

ともにあることをめざす「対話」を基礎とした カウンセリング教育の試み

—— 社会人講座「カウンセリング的対話」の実践報告

楠 本 和 彦 (南山短期大学助教授)

中 村 和 彦 (南山短期大学助教授)

I. 講座「カウンセリング的対話」のねらいと意義

従来のカウンセリングの訓練では、カウンセリングに関する理論が講義された後、学習者がカウンセラー役とクライアント役を行うロールプレイ（またはミニ試行カウンセリング）を実施することが多かったと思われる。理論から学ぶのではなく、学習者の体験から学ぶことを重要としている南山短期大学人間関係科では、カウンセリングの授業を展開していく際にも従来の方法とは若干異なるアプローチを実践してきた。それは、教員は様々な理論を会得している権威者として存在しないこと、すなわち、学生に一方通行的に理論を教えるという立場にはならないことを根本として、学生の体験を大切にしながら授業を実施していくものであり、「カウンセリング的対話」という名称で行われてきた。

I-1. 南山短期大学人間関係科の主各論「カウンセリング的対話Ⅰ・Ⅱ」

(1) 「カウンセリング的対話」という名称とねらいについて

「カウンセリング的対話」という言葉は確かに聴きなれない言葉である。ここにはこの造語を作った担当者の意図、姿勢が反映されていると考えられる。南山短期大学において「カウンセリング的対話」がⅠ・Ⅱの通年科目として成立した平成2年度（1990年度）の授業科目の案内（担当：市瀬英昭・中堀仁四郎）にはカウンセリング的対話Ⅰのねらいとして、「対話の基礎であるべき人間観を求めて、歴史上或いは同時代の様々な考え方を検討しながら、自分自身の人間観を明確にしていく」とあり、カウンセリング的対話Ⅱのねらいとして、

「カウンセリング的対話Ⅰ」を前提にして、対話的に生きること、即ち、自分が自分らしく他者と共に生きる方法をさぐる。その際、自分の現実の他者との関わり方に気づき、「対話」に必要なスキルの訓練にも重点をおく」とある。また、平成8年度（1996年度）（担当：中野清・中村和彦）では、カウンセリング的対話Ⅰのねらいは「人と人が向きあい、わかりあい、共感していく“対話”を、悩みを持つ人に対する援助的方法としての“カウンセリング”の観点を含めながら、実習・討議・読書などを通して捉えていく」とある。「対話」は単なるコミュニケーションの方法ではなく、人間観に裏打ちされた人と人が関わる際の姿勢であり、それは他者と共に生きようとする生き様であると考えられている。また、「カウンセリング」は人に対する援助的方法と考えられている。また、カウンセリングは当然ながら単なる方法ではなく、その基礎に人間観を持っている。つまり「カウンセリング的対話」は心理的症状の除去のためにカウンセラーがクライアントを援助する方法を学ぶものではなく、悩みつつ、成長を志向する人間が「向きあい、わかりあい、共感」し、尊重しあい、相互に人間的な成長の援助を行なうためのスキル、方法、態度、人間観の総体と考えられる。それは日常を生きる我々にとってかけ離れたものではなく、日常の中に自己実現の様相を創造していくことであり、他者と共に生きる道を探し続ける姿である。

（2）「カウンセリング」と「対話」の概念的 위치づけ

ところで、「カウンセリング的対話」という名称が成立するのは、「カウンセリング」と「対話」が異なる意味を持つことを前提としているためであると考えられる。「カウンセリング」と「対話」という言葉は、意味的・概念的にどのように異なっているのだろうか。

まず、「カウンセリング」と「対話」というタームを並べた際、「対話」の方がより日常的なタームであるにも関わらず、その内容や意味をイメージしにくいと思われる。「対話」は英語で“dialogue”であり、その語源はギリシャ語“dialogos”に由来している。“dia”は「～の間に」という意味の接頭語、“logos”は「ことば」という意味であり、そもそも「対話」には2方向性の言葉のやりとりが前提となっている。しかしながら、日本語には「会話」というタームが存在している。コミュニケーションにおいて双方が物理的に話すのみでは「対話」とはいえず、「会話」の範疇に属するであろう。「会話」が「対話」となるためには、“言葉”が単に行き来するのみでなく、お互いの存在が対等な立場で相対し、存在の内的な領域でお互いが向き合い、“言葉”でなく“相手の存在”そのものに関心が向くことが必要とされよう。また、そのようなやりとりの結果、双方の存在にとって何らかの心理的・精神的な影響が生じたり、二人の関係性に何らかの変化が生じると考えられる。

それでは、「カウンセリング」と「対話」との間にはどのような違いが存在

しているのであろうか。本質的な相違は、目的の明確さである。「カウンセリング」には、クライアントの心理的症狀の軽減や人間的成長をめざすという、明確な目的が存在している。そこには、自らの不全感で悩み苦しむ援助を求めているクライアントと、クライアントを援助できる可能性があるカウンセラーという、異なる欲求を持った人が存在する。すなわち、一方が援助をされる人、もう一方が援助をする人、という異なる役割を持っている。ところが、対話には目的が明確に存在することは稀である。時には、両者、或いは一方が、“向かい合いのために”、“わかりあうために”、“より親密になるために”という意識的な目的を、両者が、或いは、一方が持つことによって対話が生じることもある。しかし、対話の目的はカウンセリングほど明確でない場合が多い。また、対話には役割が存在せず、両者は対等な個人として役割を持たずに向き合っている。

カウンセリングには特殊な目的があり、その目標を達成するために場所・時間などを両者が契約するによってカウンセリングが始まる。カウンセリングでは枠が大切にされ、特定の場所で定められた時間の中で行われる。枠の中の場は非日常的な場であることをあえて強調する。ところが、対話は自然発生的であることが多く、場所や制限時間もあらかじめ定まっていないことが多い。もちろん、対話することを目的とした対話には場所や制限時間が定められていることもある。例えば、政府・役所・学校などの公的機関が実施する“対話の会”などの集会や、Tグループなどの人間関係トレーニングなどである。しかし、日常の中では、たわいもない会話があるきっかけで意図せず突然対話となったりするなど、自然発生的な対話が多く、しかも枠が決められていてそれを守ろうとすることは少ない。

結果はどうであろうか。対話の定義には、言葉や影響関係に両方向性があることが含まれている。対話をすることによって、両者が相手から様々な影響を同程度受けることが予想される。お互いに向き合い、言葉を通して他者に直接接触することにより、他者も自分も変容する可能性がある。ところがカウンセリングでは、影響を受ける重心はクライアント側にある。カウンセラー自身も影響を受け、変容していくならば、対話としてのカウンセリングが成立しているといえよう。

すなわち、「カウンセリング」と「対話」とでは、目的、役割、対等性、自然発生的性、枠（時間や場所）、日常性－非日常性、影響関係、という違いが存在している。

ところで、南山短期大学人間関係科ではカウンセラーの専門家を育成しようとしているわけではない。特殊な場の中ではなく、あくまでも日常の中で他者とともにあることができる能力を育成している。「カウンセリング的対話」も、日常の中で他者と向き合い、ともにあり、しかも相手に援助的に関わることができる能力を育成することをめざしている。日常の中で他者に援助的に関わら

うとする際にも、対等に向き合い、相手の存在に直接触れ、そして、ともに学び成長するという態度が重要になると考えている。そこには、一つの個と一つの個が、それぞれの相異なった感性を生かしながら相互的に働きかけ、影響を受けあうといった関係性が存在している。すなわち、「カウンセリング的対話」は従来のカウンセリング教育に比べて、枠や役割を超えたところでの関係性を念頭に置きながら、対等性やともに成長する態度を強調し、理論やスキルではなく自分自身の感性を大切にしながら他者と向き合うことを重視している。

(3) カウンセリング的対話の授業内容について

これまで述べてきたように、「カウンセリング的対話」の授業は、単にコミュニケーションやカウンセリングの方法論を学ぶことのみを目的としているわけではない。人と人との向き合い、ともにあろうとする際に生じる「対話」の基礎となる人間観、ともに生きる道を探る基礎としての哲学観が形成されることも目的としている。すなわち、心理学の知見のみでなく、哲学の知見・哲学的な観点も必要とされてくる。したがって、従来から「カウンセリング的対話」の授業は心理学系のスタッフ1名と哲学系のスタッフ1名、計2名によって担当されてきた。両スタッフは、異なる領域の知見や理論・人間観を背景に持ち、ミーティングの中で異なった観点から意見を出し合い、それぞれの捉え方を生かしながら授業を構成していった。

授業の実施時期は、1年後期に「カウンセリング的対話Ⅰ」が2コマ連続で15週、2年前期に「カウンセリング的対話Ⅱ」が2コマ連続で15週にわたって実施されてきた。

「カウンセリング的対話Ⅰ」は基礎編として位置づけられ、内容は担当者によって異なるが、コミュニケーションや対話、カウンセリングの基礎的な体験をすることや、基礎的な知識の理解を得ることをねらいとして実施されてきた。例えば、木村晴子・市瀬英昭のスタッフによって実施されたプログラム（1991年度～1996年度）では、カウンセリングや対話のイメージのブレインストーミング、カウンセリングや対話に関する読書、グループでのコミュニケーション実習（実習「ホープ・アイランド」など）などのプログラムが実施されてきた。

また、中野清・中村和彦が担当したプログラム（1996年度～1998年度）では、コミュニケーションに関する実習（実習「話す・聴く・観る」、実習「対話するからだ」：距離や位置関係による影響を知るもの）や、カウンセリング的な要素を含んだ基礎的な実習（実習“How do you feel the counselor”、実習“I. D. C.”）、カウンセリングの理論や対話の哲学的基礎に関する小講義、カウンセリングに関するVTRを見る（「グロリアと3人のセラピスト」、映画「普通の人々」）、などのプログラムが実施されてきた（資料1「1996年度カウンセリング的対話Ⅰ全日程表」を参照）。中野・中村担当のプログラムでは小講

義も実施されたが、それは学生の体験を整理するための一つの枠組みとして提供されたものであり、あくまでも学生が体験から気づいたこと、感じたことを重視するという人間関係科の教育理念からは離れるものではなかった。

「カウンセリング的対話Ⅱ」は応用編として位置づけられ、ロールプレイ(木村・市瀬担当)やミニ試行カウンセリング(中野・中村担当)が実施されてきた。両者の違いは、ロールプレイはクライアント役が架空の悩みを話すのに対して、ミニ試行カウンセリング(田畑、1982)はクライアント役が実際の自分の悩みを話すというものである。しかし、双方とも基本的には、学生はカウンセラー役・クライアント役を行い、カウンセラー役として行ったカウンセリングを録音して逐語録を作成し、それをグループ・スーパーヴィジョンという形態で検討するというものであった。グループ・スーパーヴィジョンを進める際には、①カウンセリングの理論に基づきながらスタッフが権威的に指摘をしないこと、②逐語録の中のやりとりから学生が感じたことを大切に扱うこと、③グループ・スーパーヴィジョンの中では、やりとりには一つの正解が存在するわけではないので、「よい」「悪い」といった評価的なフィードバックするのではなく、個々のメンバーの感じ方を意味のあるものとしていくこと、などをスタッフは念頭に置きながら実施していた。

1-2. 人間関係研究センター講座としての「カウンセリング的対話」

南山短期大学には、人間関係科の教育実践を社会に還元していく目的で設立された、南山短期大学人間関係研究センターという機関がある。人間関係研究センターでは、人間関係講座やTグループなど、様々な講座が開かれており、のべ3千人を超える社会人が受講している。ところが、これまでの人間関係研究センターの講座にはカウンセリングに関するものがなく、受講者の方からカウンセリングに関する講座を開いてほしいという要望があがっていた。また、基礎的な講座である「人間関係講座」が終了した後の各論的な講座のうち、コミュニケーションに関する応用講座が存在していなかった。そこで、これまでの学生向けの授業である「カウンセリング的対話Ⅰ・Ⅱ」で培われた教育実践の蓄積を生かし、社会に還元していくために、1998年度から人間関係研究センターでも社会人向けに「カウンセリング的対話」の講座を筆者である2名のスタッフが開催することになった。本稿は、初回の試みである1998年度の「カウンセリング的対話」の実践記録とその考察を記述したものである。

この講座では、従来のカウンセリングの講座とは異なる点として、以下のねらいを設定した。

- ・日常の対話の中で生かすことができる聴く技術を伸ばすこと
- ・人間関係講座のアドバンスコース「コミュニケーション」編として、学習

- 者のコミュニケーションの特徴への気づきが可能となること
- 基礎的な理論からカウンセリングを学ぶのではなく、学習者自身の体験から学び、最終的には理論に合わせた援助的な聴き方ではなく、自分らしい援助的な聴き方を発見し、伸ばしていくこと

上記のねらいを達成するために計12回の通いの講座を企画したが、初年度の試みでもあり試行錯誤の実践であった。本稿は、体験学習を主軸としたカウンセリング教育の新たな試みを記録し考察することで、カウンセリング教育への新たなアプローチを提言するとともに、自らの実践をふりかえり、より改善されたプログラムを展開していくことを目的として執筆されたものである。

Ⅱ. 各回のプログラムの流れ

「カウンセリング的対話」は、4月下旬から7月下旬までの毎週木曜日の夜、18:30～21:00の時間帯で、計12回が実施された。12回中、前半の5回はラボラトリー・メソッドを用いたコミュニケーションの実習を通じて、対話の基礎となる自分自身の聴き方をふりかえることをねらいとして行われた。また、後半の7回は、カウンセリング的な（援助的な）聴き方を実践する試行の場として、また、検討する場として、ミニ試行カウンセリングとグループ・スーパーヴィジョンが実施された。

各回の講座のねらいと実施結果を以下に紹介していく。なお、今回の講座への参加者は12名（全て女性）であった。

講座「カウンセリング的対話」各回の実施結果

第1回（4/30） お互いに知り合うために——実習「他己紹介」

最初の講座は、参加者はお互いのことをあまり知らず、緊張を伴うものである。それぞれの参加者がどのような人で、どんな目的をもって講座に参加しているかを知り合うことによって、緊張が若干解け、また学ぶ共同体作りを行うことが可能となる。そこで講座の初回は、実習「他己紹介」を実施して、お互いに知り合うきっかけ作りを行うこととした。また、実習「他己紹介」では、ペアを作って相手にインタビューを行うが、その過程の中で自分自身のコミュニケーションの特徴も捉えることができる。

そこで、第1回目の講座のねらいは以下のように設定された。

- ねらい：
- とともに学ぶ関係作りとして、お互いに知り合う
 - この講座でのねらいを共有化する
 - 自分のコミュニケーションの仕方に目をむける

18:30～この講座をはじめるにあたって
18:45～実習「他己紹介」
 導人
 ペアリング
 インタビュー
19:25～休憩
19:35～他己紹介(全員で)
 ふりかえり
 わかちあい

講座を始めるにあたってスタッフ2人が、どのようなねらい・構成で講座を進めていくかを伝えた。その際、「カウンセリングの専門家を養成しようという講座ではないこと」、「日常の対話の中で、いかに援助的に相手の話を聴けるかをねらいにしていること」、「体験的な実習を中心に進めていき、講義はあまり行わないこと」などを強調した。

続いて、実習「他己紹介」に入った。他己紹介は、最初にペアを作り、ペアの相手に対して15分間インタビューを行い、次に全体で集まって自分が相手になりきって他のメンバーに紹介するというものである。

最初に実習の進め方を提示した後、ペアリングを行った。ペアリングの際は、メンバーの中にはすでに知り合いの人もいたため、「知らない人とペアを組んでください。」と伝え、自主的にペアを作ってもらった。続いて、「相手の趣味や性格、そしてこの講座に来たねらいを後で紹介できるようにインタビューしてください」と提示し、ペアの相手に対するインタビューを15分間実施した。インタビューの際は、一方がもう一方に15分間インタビューし、時間の経過後スタッフから役割を交代するように伝え、インタビューされた側が15分間インタビューを行った。

インタビュー終了後、全員が集まって輪になり、他己紹介を順に行った。他己紹介の際は、紹介する相手の後ろに立って、相手の方に軽く手を置いて、「私は～です」と自分が相手になりきって相手のことを紹介していった。おもしろい発言が飛び出すと笑いも起き、他己紹介が進むにつれてだんだん柔らかな雰囲気になっていった。

全てのメンバーが他己紹介を行った後、実習のふりかえりを実施した(ふりかえり用紙は資料2参照)。ふりかえりでは、「インタビューをしたり、されたりしている時に感じたこと、気づいたことは?」、「他己紹介をしている時、されている時に、感じたこと、思ったこと、気づいたことは?」、「他のメンバーの紹介を聞いて感じたこと、思ったことは?」、という3項目について個人で記入を行った。初めの2項目は自分自身のコミュニケーションの特徴に目を向けるために、最後の項目はこの講座に参加したねらいを共有化するために用いられた。

ふりかえりを個人で記入した後、ペアごとにわかちあいを行い、お互いに感じたことを共有化した。

第2回(5/7) 異なったタイプのカウンセラーを体験するために

— 実習 “How do you feel the counselor?”

第2回目には、実習“How do you feel the counselor?”が行われた。この実習は学生に対する授業である「カウンセリング的対話Ⅰ」で開発されたものであり、3つのタイプのカウンセラー（①指示型、②非指示型、③非指示+共感型、資料3参照）をロールプレイすることにより、異なったタイプのカウンセラーによる影響を体験できるものである。従来のカウンセリング教育では、ロジャーズ型のカウンセリングがモデルとなり、学習者はそのモデルに合わそうと試みる人が多いと思われるが、この実習では3つのタイプを中立的に捉え、それぞれのタイプによる影響関係を学習者自身が体験し、その体験からカウンセラー・クライアント間の影響関係を学ぼうとするものである。

第2回目の講座のねらいは以下のように設定された。

- ねらい：・カウンセリング的対話を体験する
- ・異なったタイプのカウンセラーによる影響を知る

18:30～今日の導入
18:40～実習“How do you feel the counselor?”
導入
トリオ作り
第1ラウンド
第2ラウンド
17:40～休憩
17:50～ 第3ラウンド
20:15～3つのタイプの違いの明確化
全体でのわちあい

まず、実習“How do you feel the counselor?”の全体の流れがスタッフより説明され、続いてトリオ作りが行われた。その際、できるだけ知らない人同士でトリオを作った。次に、トリオの各メンバーをそれぞれA、B、Cとして、第1ラウンドではAがカウンセラー役、Bがクライアント役、Cが観察者となった。

カウンセラー役（A）は、演じる役割が記入されている3枚のカード（資料3参照）のうちの1枚を取り、カードに書かれているロールの

イメージアップを行った。クライアント役は、自分自身が演じる人物や悩みをイメージアップした。イメージアップ後、カウンセラー役とクライアント役は対面で座り、観察者（C）は両者の横に座り、10分間のカウンセリングのロールプレイを行った。その後、ふりかえり用紙の各ロールの欄に気づいたこと、感じたことを記入した。ふりかえり記入後、①クライアント役、②観察者、③カウンセラー役、の順で気づきのわちあいを実施した。

上記の手順で、第2ラウンドでは、カウンセラー役：B、クライアント役：C、観察者：A、という役割に交代し、第3ラウンドでは、カウンセラー役：C、クライアント役：A、観察者：B、という役割で繰り返した。一度ひかれたカウンセラー・ロールが書かれたカードは戻さず、3名のカウンセラー役はそれぞれ異なったロールを演じた。

3ラウンドが終了した後、全員が集まり、3つのタイプのカウンセラーに対して感じたこと、気づいたことの全体での共有化を行った。その際には、以下のような気づきが出された。

①指示的なカウンセラーに対して

- ・ 堂々巡りになる
- ・ クライアントが反抗的になる（上から言われているような感じがする）
- ・ クライアントにとっては自分で考えなくていい、カウンセラーに依存する
- ・ 根本的な解決にならない
- ・ 助言がほしいというクライアントにとっては不安が解消してよいのではないか
- ・ クライアントにとって、共感してもらえていない感じがする
- ・ カウンセラー役をしていて、相手を大切にしていない感じがした

②非指示的なカウンセラーに対して

- ・ クライアントにとって物足りない、「本当に聞いてくれているか？」という感じがした
- ・ 肩透かしをくらった感じがした
- ・ カウンセラーの「どうしたいの？」という言葉で整理ができた
- ・ クライアント役として話はよくできた、「一番苦しい気持ちをわかってほしいー」という気持ちがあった
- ・ カウンセラーの考えをなかなか出せず、つらかった

③非指示的+共感的なカウンセラーに対して

- ・ クライアントが自分でしゃべっていくことが必要だと感じた、非難がないので安心
- ・ 問題の焦点が絞れないうちに終わった感じ、的を得て返ってこない感じ
- ・ 母性的であるが、父性的ではない
- ・ 自分の気持ちが深まる経験があった
- ・ あまりに共感しすぎると距離がとれなくなる感じがした（自分の中にも同じものがあるから）
- ・ カウンセラー役で、共感していてもそれをうまく伝えられなかった
- ・ 共感とおうむ返しの差がわからなかった

最後にスタッフ（楠本）から「日常生活では立場や関係によって態度は変わってくる、その場の中で一番自然な態度、必要な態度がある」というコメントを行い、終了した。

第3回（5/14） 聴くことの重要性を体験するために

—— 実習「聴く（カウンセリング的対話バージョン）」

第3回目は、対話場面で非常に重要となる「聴く」という行為について、聴くことの重要性を体験し、学習者自身の聴き方に気づくために、実習「聴く」

を実施することにした。実習「聴く」は、ペアがお互いに会話をするが、相手の話を聞いた際にその内容を繰り返して確認してから、自分が言いたいことを話す、というものである。今回は、第2回目で「共感」についての疑問が参加者から出されたこともあり、内容を繰り返す際に相手の気持ちに共感した部分も伝えて確認する形態とした。また、カウンセラー・クライアント関係を模して、話し手・聴き手を分け、聴き手は話し手の内面・気持ちを知ることに重点を置きながら話を聴くという設定とした。また、相手の内容を繰り返して確認するのは聴き手のみとした。

第3回目のねらいは以下のように設定された。

- ねらい：・コミュニケーションの中での聴くことの重要性を体験する
- ・共感的な聴き方を試みる

18:30～今日の導入
18:40～実習“聞く”
導入
トリオ作り
デモンストレーション
第1ラウンド
第2ラウンド
19:50～休憩
20:00～ 第3ラウンド
ふりかえり
(個人記入)

実習「聴く（カウンセリング的対話バージョン）」は以下のように進められた。まず、トリオを作り、それぞれをA、B、Cとした。3ラウンドを行ったが、第1ラウンドはAが聴き手、Bが話し手、Cは観察者となった。話し合うテーマは4つが用意され（私が大切にしていること、最近気になっていること、私がとてもうれしかったこと、この講座を受けてみて私が感じていること）、話し手（B）がテーマを選択した。次に10分間の会話に入ったが、まず聴き手（A）

が話し手（B）に質問をして会話を始めた。会話は、聴き手は自分が話す前に話し手が言わんとしたことを言い返し（繰り返す）、確認をするというルール（資料4参照）のもとで行われた。また、聴き手が確認をする際には、話し手の気持ちで自分が共感したことも伝えてみることを試みた。

10分間の会話の後、ふりかえり用紙に気づいたこと、感じたことをメモし、続いて、観察者、話し手、聴き手の順に気づきのわかちあいを行った。その後、役割を交代して3ラウンドを実施した。

全てのラウンドが終了した後、今回の実習での気づきを白紙（B5版の1/3の大きさ）にメモをした。そこで記述された気づきのうち、いくつかを以下に挙げる。

- ・普段の会話では、次に話すことを考えながら聞いていたり、間をあげないことを意識しながら話すことがあると気づいた
- ・耳で確かに聞いているけれど、心を傾けて“聴く”ということは、話し手の話す内容が解る・理解できた、ということよりももっと深い意味がある。

- ・聴くという作業、次に質問するという作業に追われて、相手の気持ちにまで自分の気持ちが届かないという反省をした。
- ・事実（言葉）ばかりを受けていると、大切なこと（気持ち）が見えにくくなる
- ・共感“聴く”ことが前提になっているが、まったく同じ感情を重ねることでもないと思う。また対峙することでもなさそう
- ・相手の言っていることが自分の価値観に反していると、どうしても素直に相手の言葉が入ってこない
- ・表面的な事実を追ってしまって、なかなか相手に関心を持つことができない
- ・2人の間に信頼感が生まれないと、本当に“聴きあう”関係も生まれられないのでは
- ・聴き手が話の内容を理解しきれなくなって混乱してくると、話し手自身の方も自分が何を話しているのか、伝えたいのかわからなくなっていく
- ・“沈黙”は大切。質問攻めにして追いつめていることも多い
- ・共感的に受けとめてくださると、とても楽しく快感と思えるほど心がいやされるように思った

第4回（5／21） 援助的な聴き方の理解を深めるために

—— “聴く”・“共感”についてのまとめ & 小講義

第3回目の実習「聴く（カウンセリング的対話バージョン）」で、“聴く”こと、“共感する”ことについて体験をし、その体験の中から参加者それぞれが様々な気づきを得ていた。これらの気づきを共有化して深めることを第4回目に行うこととした。また“聴く”・“共感”についての体験を整理するための一つの枠組みとして、ロジャーズの理論を後半で紹介することとした。

第4回目のねらいは以下のように設定された。

ねらい：・援助的な聴き方や共感的な聴き方についての理解を深める

<p>18:30～今日の導入 先週の気づきメモの プリントより “聞く”“共感”の個人 記入 グルーピング 個人記入のわかちあい 20:40～小講義「積極的な聴き 方・カウンセラーの3条件 とは」</p>
--

まず、第3回目の最後に行った気づきのメモを印刷したものを配布し、それを見ながら“聴くこと”・“共感すること”についての個人記入を行った（資料5参照）。次に、6名ずつの2グループに分かれ、個人記入のわかちあいを項目ごとに行った。計画では、各グループで“聴くこと”・“共感すること”をまとめる作業を行う予定であったが、わかちあいで具体例が出てくるなど話し合いが深まり、また、各メ

ンバーの思い・考えがそれぞれで、まとめる作業が困難であり、グループでまとめる作業は中止した。

後半では、スタッフ（楠本）が「積極的な聴き方・カウンセラーの3条件とは？」と題してロジャーズの理論についての小講義を30分ほど行った。

第5回（5/28） 積極的・援助的に聴くために

——実習「I. D. C. (Introspective Developmental Counseling)」

これまで“聴く”ことについて取り扱ってきたが、次回の第6回目からミニ試行カウンセリングに入っていくことを前提として、第5回目は“援助的に聴く”ことを試みることができる実習“I. D. C.”を実施することとした。I. D. C. は、Introspective Developmental Counseling の略である。この実習では聴き手と話し手が分かれ、話し手が発達上の出来事を内省して自己理解が深まるよう、聴き手は援助的に聴き、質問をするというものである。

実習“I. D. C.”では発達の時期を①就学前期、②小学校期、③中学・高校期の3つに分け（資料6参照）、各時期を1セッションごとに扱い、一方の話し手について計3セッションを行う。よって、ペアの双方が話し手を体験するためには合計6セッションが必要となる。今回は講座の1回分のみしか使えないため、時間の都合上、ペアの一方が話し手になるセッションを1セッションずつ設定し、合計で2セッションを行うこととした。なお、取り扱う時期は、セッションの開始前に話し手が3つの時期から1つを選択した。

第5回目のねらいは以下のように設定された。

- ねらい：・他者理解に向けて、積極的・援助的に聴く
- ・自己開示を試み、自己理解を深める

18:30～今日の導入
18:40～実習“I.D.C.”
導入
ペア作り
Part I.
話し合い
ふりかえり
わかちあい
インタビュー
19:55～休憩
20:05～ Part II.
話し合い
ふりかえり
わかちあい
20:50～全体でのわかちあい

最初に実習の全体の流れ、進め方の説明を行った。次にペアを作ったが、今回は受講者が奇数だったため、スタッフ（中村）が入った。まず、どちらが先に話し手を行うかを決め、次に話し手がどの時期について話すかを決め、その後セッション1の話し合い（20分間）が実施された。話し合いでは、聴き手は質問表（資料6参照）の質問を参考にしながら、話し手が自己開示しやすいように、また話し手の自己理解が進むように援助的に聴くことを試みた（資料7参照）。20分間の話し合いの後、所定のふりかえり用紙（話し手用は資料8、聴き手用は資料9）に

感じたことを記入し（10分間）、続いてふりかえりで記入されたことわか

ちあいが持たれた（10分間）。

セッション2では、話し手と聴き手の役割を交代して同様に実習を行った。

セッション1とセッション2の終了時に、実習中に気づいたこと・感じたことをスタッフがインタビューをし、全体でのわかちあいをを行った。聴き手を体験して気づいたこととして、「じっくり聴き、話し手が語るることについて行くことで、話し手の方の自己理解が進むことが体験できた」、「話し手の話を伺っていて、こちらまで温かいものがこみ上げてきた」、「自分の関心で質問していくと、話し手の邪魔になることがあった」、「話題レベルに関心が行ってしまって相手の自己理解を促進することができない時があった」、などが挙げられていた。

第6回（6／11） 自分らしく援助的に聴く力を深めるために

——実習「ミニ試行カウンセリング」

これまではコミュニケーションの実習を中心に行ってきたが、自分の個性・特徴を生かした援助的な聴き方を探し、それを深めることを目指して、カウンセリングのトレーニングの一つである「ミニ試行カウンセリング」を実施した。本来、「ミニ試行カウンセリング」でクライアントになった人は自分のことを語るのだが、この講座ではロールプレイでもよいことにし、クライアントになった人が選択できるようにした。それはできるだけ侵襲的にならないよう配慮したためである。

第6回の講座のねらいは以下のように設定された。

ねらい：・「ミニ試行カウンセリング」を実施し、カウンセラー体験をする。

18:30～今日の導入
18:40～実習「ミニ試行カウンセリング」 導入 トリオ作り 実施の説明
19:00～移動
19:05～第1ラウンド 実施（15分） ふりかえり（10分） 第2ラウンド 第3ラウンド
20:20～移動・休憩
20:35～逐語録の作り方の説明 今後の予定について G.S.V.の順番決め

実習「ミニ試行カウンセリング」は以下のように進められた。最初にこの実習のねらいと今日の流れが説明された。そして、次回以降、その逐語録を元に、グループ・スーパーヴィジョンが実施されることが伝えられた。

トリオを作り、それぞれがカウンセラー、クライアント、観察者の役割を1回ずつ経験した。ミニ試行カウンセリングは12分をめどとして行われ、そのやりとりは録音された。クライアントは自分のことを話してもよいし、ロールプレイでもよいこととされ、ロールプレイの場合は最初に性別と年齢をカウンセラーに伝えることが行われた。観察者は両者の主な言動（応答）、

その際の表情・雰囲気などをメモした（資料10）。各ラウンド実施後、それぞ

れの役割のふりかえりシート（資料11・12）に感じたこと、気づいたことをメモした。カウンセラー用のふりかえりシートの主な項目は、「主な話題・テーマは?」、「カウンセラー体験をしてみて感じたことは?」、「クライアントの印象は?（その他、クライアントに対して感じたことは）」であった。クライアント用のふりかえりシートの主な項目は、「話した主な話題・テーマは?」、「話し終わったいま、感じていること・気づいたことは?」、「カウンセラーに対して感じたことは?」であった。観察者用のふりかえりシートの主な項目は、「カウンセラーの印象、カウンセラーの応答に対して感じたことは?」、「クライアントについて感じたことは?（クライアントの様子、前半から後半への変化など）」であった。

最後に、また全体で集まり、逐語録の作り方（資料13）の説明とグループ・スーパーヴィジョンの順番決めを行なった。逐語録の作り方の資料は『カウンセリング実習入門』（田畑、1982）に基づいて作成した。順番は各受講者の希望とその時にクライアント役をした人が出席できるか確認して決定した。

第7回（6／18）～第10回（7／9）

自分の人との関わり方、聴き方の特徴の気づきを広げ、深めるために
——「ミニ試行カウンセリング」のグループ・スーパーヴィジョン

18:30～今日の導入
18:40～一人目のG.S.V. テープを聴く ディスカッション
19:40～休憩
19:50～二人目のG.S.V. テープを聴く ディスカッション

第7回～第10回まではグループ・スーパーヴィジョンが行われた。日程、リソースの広がり、受講者の発言のしやすさ、関係の深まりなどを考慮して、第7～8回はスタッフ、受講者全員1グループで、第9回は2グループで、第10回の前半は2グループ、後半は1グループで行われた。1人あたりのグループ・スーパーヴィジョン

は約1時間15分で行われた。第6回で自分がカウンセラーとしての逐語録を発表する日程を決めたが、都合が悪くなり、カウンセラー、クライアント両者がそろわない場合には、発表担当者を変更することがあった。

グループ・スーパーヴィジョンでは最初に逐語録が配られ、カウンセラーが全体的な感想、印象、検討してほしい点について述べた。続いてテープを再生し、二人のやりとりを聴き、その後スーパーヴィジョンに入った。

スーパーヴィジョンの観点として、カウンセラー側の要因（クライアントに対する態度・姿勢、応答の特徴、どのような意図・気持ちでその応答を行なったのか等）に主に焦点を当て、受講者、スタッフがカウンセラーにフィードバックすることが中心に行われた。しかし、必要に応じて、クライアント理解やクライアントに受講者が伝えたいことなども話された。また、時にはその「ミ

「ミニ試行カウンセリング」でのカウンセラー以外の受講者が、自分ならこのように応答するというのをその場でクライアントとやりとりし、その感想や気づきを、やりとりした二人、聴いていた人が述べるといったことも行われた。

それぞれの感じたことや応答の特徴をそれぞれの個性、自分らしさとして、お互いがお互いを尊重しあう雰囲気大切に。そのことにより自分の個性や特徴が明確になり、自分のものとして定着していくことが期待された。

時にはグループ・スーパーヴィジョンがやりとりの検討の場というよりは、グループの構成メンバーが「いま・ここ」での気持ちや思いを伝え合う場として、また、クライアントが語り切れなかった思いを語り、それが受けとめられ、癒される場として機能することもあった。

第11回（7/16）～第12回（7/23）の前半

「ミニ試行カウンセリング」、グループ・スーパーヴィジョンでの自分の気づき・学びを試みるために

—— 実習「ミニ試行カウンセリング part II」

第11回～第12回の前半にかけて、「ミニ試行カウンセリング part II」が行われた。「ミニ試行カウンセリング」、そのグループ・スーパーヴィジョンで自らが気づいたこと学んだことを試みてみて、確認したり、定着したり、再検討する場、新しい発見のための機会として、「ミニ試行カウンセリング part II」を行なった。

ねらい：・援助的な関わりにおける、自分の新しい可能性を試みる

[7/16の日程]

18:30～実習「ミニ試行カウンセリング part II」

導入・トリオ作り

19:00～移動 セッティング

19:10～第1ラウンド

実施 (15分)

ふりかえり (10分)

わかちあい (25分)

20:15～休憩

20:25～第2ラウンド

実施 (15分)

ふりかえり (10分)

わかちあい (25分)

21:10～Na21教室へ移動

「ミニ試行カウンセリング part II」では、「ミニ試行カウンセリング」同様トリオを作り、カウンセラー、クライアント、観察者の役割をそれぞれが経験できるようにした。実施は「ミニ試行カウンセリング」同様12分をめどとした。録音は行なわれず、観察者が記録シート（資料14）にやりとりや表情、雰囲気を記録した。ふりかえりではカウンセラー、クライアントは記録シートにやりとりをメモし、観察者はコメント欄に気づいたこと、感じたことを記した。観察者の記録を元にトリオでのわかちあいを行なった。1ラウンド（実施、ふりかえり、わかちあい）に約1時間要した。

受講者にとっては「ミニ試行カウンセリング」、そのグループ・スーパーヴィジョンで自らが気づいたことを試みてみて、完全とまではいかないもののその

気づきを生かせたり、「ミニ試行カウンセリング」では気づかなかった自分を発見したり、自分の援助的な関わり方の現状を再確認する場になった。

第12回（7/23）後半 私らしい援助的な関わり方を明確にするために

——まとめ「私らしい援助的な関わり方」

この講座の締めくくりとして、各受講者が自分が見出した自分の援助的な関わりの特徴を明確にし、言葉やイメージで表現することによって、定着を促進することを目指して自分のまとめを作成した。

ねらい：・私らしい援助的な関わり方を言語化する

[7/23の日程]
18:30～実習「ミニ試行カウンセリングpartⅡ」 導入
18:45～移動 セッティング
18:50～第3ラウンド
20:00～休憩
20:10～まとめ 個人記入(画用紙に) 全体でのわちあい

まず、「この講座で気づいたこと」を画用紙に言葉や色や形や線で表現した。次いで、「日常の中で生かしたいこと、応用できること — 全般的なこととして、ある場面に特徴的なこととして、その人との間で大切にしたいこと—」を表現した。そして、それぞれの発表を受講者、スタッフ全員で注意深く、傾聴した。

まとめとしての言葉や表現は非常に多様で、個性的であった。それぞれの人がこの講座で考

えたこと、気づいたこと（人の関わりの中での自分の特徴など）、これから大切にしていきたいこと（この講座で見つけた自分の宝にしたいことなど）、日常で生かしていくための工夫（ここでの学びを日常で生かすための自分なりの変換など）が、それぞれの思いを託され、命を持って生きづいているように感じられた。

Ⅲ. 本講座の意義、改善点の考察

本講座の意義と改善点を「カウンセリング的対話のねらいと内容」、「プログラム」、「時間設定・人数枠」の観点から考察する。

(1) カウンセリング的対話のねらいと内容について

Iにある「カウンセリング的対話」の概念、授業の歴史から分かるように、「カウンセリング的対話」は心理的症状の除去のためにカウンセラーがクライアントを援助する方法を学ぶものではなく、悩みつつ、成長を志向する人間が向きあい、わかりあい、共感し、尊重しあい、相互に人間的な成長の援助を行なうためのスキル、方法、態度、人間観の総体と考えられる。それは日常を生

きる我々にとってかけ離れたものではなく、日常の中に自己実現の様相を創造していくことであり、他者と共に生きる道を探し続ける姿である。

ただ、現在の日本において、「カウンセリングの対話」という言葉が上記のような意味として捉えられる現状にあるかという点、必ずしも時が熟しているとは言い難い。カウンセリングという言葉はかなり一般的となってきたが、それは精神的な困難を抱えた人がその問題を解決に行く場との認識が強く、人間的な成長の場であるとの認識はまだまだ充分とは言えない。

本講座においても、そのねらいと内容とのつながりを受講者がすんなり納得できたわけではない。現実にはそのことをめぐって、何度も問いや迷いが出された。受講者からの問いは、「特殊で、人工的な場面であるカウンセリングと日常との接点は？」、「ここでの学びを日常で生かすには？」というような言葉に集約できるものであった。そのような問いをめぐって、体験と対話を通してスタッフと受講者とが共に考えていったという方が講座の現状に則している。

その問いはIにある「対話」と「カウンセリング」との矛盾する点、特に目的の有無、役割の有無と関係していたように思われる。「カウンセリング」は援助という目的を持ち、カウンセリング、クライアントという役割を持つ。それに対して「対話」は目的や役割を持たない。

本講座ではカウンセリングといった場合、ロジャーズが述べたように、カウンセラーとクライアントが同じ人間として、同一の地平に立つことを基本姿勢とし、お互いがお互いの成長を促進する関係と考えている。しかし、カウンセラーとクライアントという役割は存在すると考える。それは援助という目的があるためである。カウンセリングという援助のための専門的、人工的關係においては、どちらが援助し、どちらが援助されるのが明確にされる必要がある。それが逆転することは本来の目的を損なうことになる。

ただ、カウンセリングにおいても、その目的や役割の意識が明確な時とそれらがほとんど意識されないときがある。目的や役割があまり意識されないのは、一つにはクライアントの心の深みに触れて、カウンセラーが人として感動している時である。そのような時にはカウンセリングの目的や役割の意識はほとんどなく、ただ「いま・ここ」で二人の人が出会っていて、その出会いが生まれたことに感謝するような気持ちがあるだけである。また、二人の関係が深まり、お互いが自由に振る舞い、語っている時もある。それから、クライアントが語ることのあまりの深さに、カウンセラーが自分の意識がなしうる限界を感じて、より大なるもの（無意識も含めたクライアント全体の内的治癒力、時、自然、宗教性など）の力の現われを望みつつ、二人が会っているような場合もある。それらの時は「カウンセリング」が「対話」に非常に近づいている瞬間といえてよい。

また、日常の援助においては必ずしも、目的、役割は明確とならない場合がある。援助するという目的が意識されず、「家族だから」、「親友だから」と無

償の愛による行為が存在する。また、援助する—される役割が交代することがある。役割が交代し、相互援助的になることの方がより成熟した関係とも言える。このような関係においては、目的、役割において、「対話」に近づいてくる。確かに役割がなくなるわけではないのだが、役割が自然に交代し、固定しないため、役割意識を強く持たなくとも関係を継続し、深めていけるからである。瞬間、瞬間においては役割、あるいは、構えは存在するが、それがその本人にとっては不自然ではない状態と言ってもよい。また、役割、構えはあるのだが、役割や構えが意識されていない状態と言ってもよい。このような関係はある意味、理想的な相互援助的な関係である。そして、この地点は上記の「カウンセリング」と「対話」の矛盾が、解消したわけではないにせよ、二つが非常に重なりをもった状態とも考えられる。ロジャースが専門家の権威性を排し、素人のよさを指摘した一因はこのような点にもあるのかもしれない。

ところで、我々が援助的関わりのトレーニングを受けるというのはどのような事態であろう。多くの場合、自分の援助的関わりがうまくいかない、もっと向上したいという時ではないだろうか。また、人の関わりにおいて、本来、対話がそうである目的、役割を持たないということを実現したい時ではないだろうか。つまり、援助すること、関わりを持つことが自然に行なえず、それに対する意識、違和感が存在する時である。「〇〇を援助したいが、うまくいかない」、「〇〇と関わりたいが、何かしっくりこない」という時である。目的や役割を意識しないことが理想ではあるが、意識せざるを得ない状況があり、それをなんとかしたいと思っている時、我々はトレーニングを受けようとしたり、なんらかの意識的行動をとる。

トレーニングは意識的な行為である。今、自分が取り組んでいることに意識の光を当て、それを習得することである。本講座で言えば、自分の人の関わり、援助的な関わりの特徴に光を当て、それを問い直し、自分のあり方や力を向上させることと言ってよい。すると自分が日常の中では気づいていなかった自分の関わりの特徴を発見してしまう。それは喜びであり、苦しみでもある。無意識、自然に行なっていたことに意識の光を当てることは、混乱を生む。その混乱を乗り越えた時、統合が生まれ、ステップアップした自分が現われる。

「カウンセリング的対話」という講座で学び、日常でそれを生かそうとする時、その理想と現実のギャップに突き当たる。目指すところ、実現したい思いはあっても、現実には行なえないことは我々がよく経験することである。トレーニングという状況は厳しさをもちつつも、実験室という統制され、守られた環境でもある。日常の方が複雑で、混沌としている。トレーニング場面ほどには守られた環境でないことも多い。トレーニングを日常に移植しようとするには、より高い技量とより熟成された人格がいる。

本講座における受講者の問いや迷いは「カウンセリング」と「対話」との持つ本来的な矛盾の反映であるとともに、理想と現実の乖離、意識することと自然に行なうこととの違い、トレーニングと日常との差が反映していると考えられる。

ただ、上記のような問いがなされ、それを考え続けられたことは受講者にとっても、スタッフにとっても、「カウンセリング的対話」とは何か、何がそのコアなのかを考える機会となった。「カウンセリング的対話とは」を一方向的に講義するのではなく、共に何かを考えていくプロセスにこそ、この講座の意味があったように思える。最終回のまとめにおいて、この講座で学んだこととこれからの日常において自分が生かしたいこと、大切にしたいことの繋がりを受講者は自分の課題としてとらえ、自分の答えを見つけようとする姿が見られた。「カウンセリング的対話とは何か」を考えるプロセスは各受講者のまとめとして表現され、現在の私の答えとして一応の区切りを与えられた。もちろんそれは「現在の私」のものであって、これからも修正され、成長していくものである。

(2) プログラムについて

1) スキルトレーニングと関係の深まりとをめざして

本講座は講義を最小限にし、体験学習を主な方法として行われた。講座の目的がカウンセリングの専門家養成にあるのであれば、カウンセリングの知識は必要不可欠となる。しかし、本講座は「コミュニケーションやカウンセリングの実習を行い、そこでの体験を通じて自分自身の聴き方について気づきながら、日常の対話の中で相手の話を共感的に聴く能力（感受性）を高めること」をねらいとしている。そのため、受講者ができるだけ、自らの体験から学ぶこと、自らの特徴・個性に目をむけること、共感的に聴く能力（感受性）を高めることができるよう体験学習のプログラムが多く提供された。

中でもコミュニケーションの実習が中心となった。第1回のねらいは各受講者のねらいの共有化であったが、ペアでのインタビューをプログラムに取り入れることによりコミュニケーション実習の要素を加味した。第2、3、5回もコミュニケーションの実習である。「ミニ試行カウンセリング」とグループ・スーパーヴィジョンが本講座のメインプログラムと考えられるが、そこに到るまでにコミュニケーション実習を何度も行い、できるだけ十分な準備を受講者が行えるように配慮した。それがこの講座の一つの特徴と言えよう。準備はコミュニケーションの能力を磨くというスキルトレーニングの面でも必要である。それと共に、この場が「自由で、保護された」(Kalf, 1966) 場になり、オープンに自己を語れる雰囲気成熟していくことでも重要であった。

講義が中心となり、自分の関わりの特徴、個性に気づいたり、お互いが体験

の中で関係を深めることができている中で、インテシブな実習を行なうことにはいくつかの危険性をはらんでいる。

ひとつには理論が権威、依ってたつ基準になってしまう危険性である。理論は必要である。自分の学びと理論とを比較し、戦わせることにより、自分の学びの特徴を明確にし、そのよさと練り足りない点をクリアーにしてくれる。そのことでさらに自分の学びをブラッシュアップすることができる。また、カウンセリングの理論は数多くある。それはカウンセリング理論がそれを考えた人の経験やパーソナリティの影響を受けるからである。ひとつの理論が唯一絶対なものではない。それぞれに特徴、長所・短所を持つ。しかし、「理論は侵すべきものではなく、自分の経験、感覚は価値がない」、「この理論が唯一絶対である」などと受講者が理論を相対化できない場合には、受講者は理論に自分を合わせてしまい、自分の個性を大事にできないことが起きる。専門家養成の際に、自分がある理論を依ってたつものとして選択することは必要であるが、講座が専門家養成でない場合には、理論の提示には慎重な配慮が必要と思われる。

さらには、受講者が自由で、保護され、オープンに自己を語れる体験を十分にしていないと、特定の人物の影響が多大になり、それ以外の受講者がやはり自分を大切にできない状況が生まれる。スタッフ、経験豊かな受講者、押しの強い受講者がそのような存在になることが多い。その人の発言も相対的なものであり、それ以外の可能性もあることが受講者に納得されている必要がある。

この講座では上記の危険性を減らすために、体験学習を中心にし、かつ、スタッフの発言が唯一の正答と認知されないよう、それぞれの人が大切にされる雰囲気成熟に工夫したつもりである。それはある程度達成されたが、完全なものであったとは言い難い部分も残った。これは今後の課題としていきたい。

例えば、ミニ試行カウンセリングとそれに続くグループ・スーパーヴィジョンでは自己に焦点が当たる。その際にそれぞれのあり方や発言を大切にすることが充分ではない時もあった。上記のようにミニ試行カウンセリングでは自分のことを語るか、ロールプレイにするかはクライアント役の受講者の選択にまかされた。しかし、選択して自己を語ることを選んだとしても、グループ・スーパーヴィジョンでは自分が気づいていない側面に焦点があたることが起こる。それを自ら抱えていくためには自我の力と抱える環境がある。抱える環境としてスタッフ、受講者は機能していたが、完全に個人を大切にできたとはいかなかった。スタッフの現在の力の限界である。受講者の場合、自分の枠組みから他者を見てしまうこともあった。スタッフがそれに気づいた時には介入し、個人が理解され、大切にされるよう配慮した。ただ自分のプロジェクトを高いレベルでコントロールしたり、自分の枠組みからだけでなく共感的に人に関わることはたやすくはない。そんな難しさにも直面した。また、特定の人物の影響を相対化することにも今後の課題が残った。これを克服するには、各受

講者のあり方、実感、発言をより大切にしていくなぎ作りを心がけ、それに必要なスタッフの力を向上させる必要がある。

体験学習では個人の経験や思いが語られる。ただ、講座では適切に関わることが難しいような個人の課題や悩みが語られることもある。そのような時には十分な配慮が必要となる。本講座では、講座での仲間によるサポート的な関係を損なわず、かつ、この講座の目的、限界を明示するよう配慮した。例えば「それに触れるにはもっと自分が安心して触れられるような個人的な環境が必要かもしれません」というような言葉で伝えることが必要であろう。

2) 小講義について

小講義は第4回のみであった。そのため、カウンセリングの基礎理論として、ロジャーズの考えに触れるに止まった。その際にも、「クライアント」というようなカウンセリングの用語に違和感を持った受講者もいた。ロジャーズの考えはカウンセラーの専門家としての独善、権威のデメリットを厳しく批判し、人間としての対等な関係の重要性を強調するものであるが、その真意をうまく伝えきれなかった感もいめない。これも「カウンセリング的対話」という講座の基本姿勢に関わる側面であるので今後の課題とし、よりよい工夫の創造、改善に努力したい。例えば時間の関係上、今回は行なえなかったのだが、自分の受け取りをシェアし、日常や自分の生き方にマッチするよう咀嚼する時間が必要であろう。既成の理論だけではなく、受講者の人間観、援助観をシェアし、自分の中に取り入れることもできるだろう。

また、ひとつの理論が唯一絶対と誤解されないよう、いくつかの理論を紹介することも、スタッフは検討した。しかし、今回は日程との関係で、多くの理論を紹介することは無理であった。そのため、小講義では「これが唯一絶対の理論であるとか、一番優れた理論であるということではなく、日常とトレーニング場面を繋いでいく際に、比較的参考にしやすい理論であるとの意図」で紹介したことを伝えた。

以上のような工夫により、まず、自分の気づき、実感に光を当て、その後何かを取り入れ、また、自分の気づき、実感に戻って、それを大切にできるサイクルを繰り返すことができよう。

(3) 時間設定・人数枠について

南山短期大学における「カウンセリング的対話」の授業は2コマ続き、3時間10分の時間枠で行われている。本講座は平日の夜に行われたため、2時間30分で行われた。実際に実施してみると、時間が超過することが多く、受講者にご迷惑をかけた。実施してのスタッフの実感としては、やはり3時間枠が必要

である。可能ならば3時間枠で、講座を実施することが望ましい。

今回の講座は受講者が12名で、講座の回数は12回であった。グループ・スーパーヴィジョンを講座で実施するのであれば、人数があまり多くなると、それまでのコミュニケーション実習に当てられる回数に影響がでる。また、面識のない受講者がお互いを信頼でき、自己をオープンに語ることができる雰囲気を作っていくにはあまり大人数は望ましくない。今回実施しての感想でいえば、上記の条件を考慮すると、受講者数は12～15名が理想的であろう。

文 献

- Kallf, D.M. (1966): SANDSPIEL – Seine therapeutische Wirkung auf die Psyche. 河合隼雄監修、大原貢、山中康裕共訳 (1972): カルフ箱庭療法. 誠信書房.
- Rogers, C.R. (1951): Client-centered Therapy – Its Practice, Implication, and Therapy. 友田不二男編訳 (1966): サイコセラピー. ロージャズ全集. 3. 岩崎学術出版社.
- Rogers, C.R. (1980): A WAY OF BEING. Houghton Mifflin Company.
畠瀬直子監訳 (1984): 人間尊重の心理学 – わが人生と思想を語る. 創元社.
- 田畑治 1982 カウンセリング実習入門 新曜社.
- ロージャズ全集. 11. カウンセリングの立場. (1967): 友田不二男編訳 岩崎学術出版社.

資料1

【授業スケジュール：1996後期木曜14:15 at No.11】おたけの対話1

97.01.16

カウンセリング的対話1：対話する人間関係

「愛のあるカウンセリング」

～ともにあることをめざして～

（ねらい）カウンセリングの観点を含め対話的人間関係の方法と意義を学ぶ。

* 【スタッフ】中野、中村 【学生】36名

1	9月26日	◇各人の期待（ねらい）の明確化と共有化 ●Where is counselor? (カウンセリングイメージを洗い出す) ●授業のねらい・方法・日程の説明
2	10月3日	◇ねらいの共有化(つづき) ◇実習「How do you feel the counselor?」カウンセラーの3タイプを体験する。第1ラウンド～第2ラウンド～第3ラウンド。分かち合いとコメント。

体育の日（10/10）

3	10月17日	【対話】1 対話観の分析：●(E)「対話とは」①導入（Q.似て非なるものは?）～6グループに分かれてブレーストミグ～順位・対話づけ～発表 ②おたけ分け（グループで、全体で）
4	10月24日	【対話】2：●(E)「生き生き対話の創成」①前回データを眺めてチャット（ユニークなものを出し出す）②4人グループをつくる ③ユニークをつなげて対話場面の「物語づくり」～発表
5	10月31日	【対話】3：●(E)「対話するからだ」①「パーソナルスペース」②「タテの対話」③「ヨコの対話」
6	11月7日	【対話】4 まとめ：●対話とカウンセリング①(L)「対話とは?」～個人メモ ②(L)「Rogersのカウンセリング観」③「対話とカウンセリングの関係」～個人メモ

入トレD合宿週（11/11～16）

7	11月21日	【コミュニケーション】1：●(E)「たずね、こたえ、観察する」導入～トリオ作り～ラウンド1～ラウンド2～ラウンド3～「私の話し方、聴き方、観方」のまとめ～2人でシェア
8	11月28日	【コミュニケーション】2：●(L)中村「コミュニケーションのモデル」～(E)4人グループで具体例を考え発表／(L)中野「対話の3人称的な構造」
9	12月5日	【コミュニケーション】3：●(E)「I・D・C」その1：べアリング・導入～セッション1（話し合い・ふりかえり・分かち合い）～セッション2～セッション3～まとめ記入、3べアリンググループになってシェア
10	12月12日	【コミュニケーション】4：●(E)「I・D・C」その2：べア役割交代して～セッション1（話し合い・ふりかえり・分かち合い）～セッション2～セッション3～まとめ記入、インタヴュ&解説
11	12月19日	【カウンセリングと援助】1：●VTR「グロリアと3人のセラピスト」を見て、①クライエント中心療法（Rogers）②ゲシュタルト療法（Perls）の場合の、違いを知る。

冬休み（12/22～1/7）

12	1月9日	【カウンセリングと援助】2：●映画「普通の人々（The Ordinary People）」を見る。個人記入～5-6人でシェア～感想インタヴュ
13	1月16日	◇まとめ：対話とカウンセリングの関係をさぐる。全日程表を見ながら～個人記入～タイプ別にグループに分かれて～発表 ◆レポート課題提示、次年度IIの予告
14	1月23日	【試験週】＝各自レポート制作 【レポート課題と提出期限】「学習のまとめ＆私の対話観・カウンセリング観」＊メ切り1月30日（休）

資料2

「他己紹介」 ふりかえり用紙

1. インタビューをしたり、されたりしている時に感じたり、気づいたことは？

（例 耳を傾けたり、情報を得ようとした側面は？ 相手の人が多く語った側面は？

自分の聞き方について感じたことは？

相手に自分のことを話している時に感じたことは？

2. 他己紹介をしている時、されている時に、感じたこと、思ったこと、気づいたことは？

（例 ベアの相手の紹介をしている時、ベアの相手の紹介をした後

自分のことを紹介してもらっている時）

3. 他のメンバーの紹介を聞いて感じたこと、思ったことは？

資料 3

カウンセリング的対話
1998. 5. 7.
南短人間関係研究センター

役割 A

クライアントは自分でどうすればよいか決定できず、あなたに助言してもらうことを望んでいます。また、あなたの考え方や意見を聞いて参考にしたいと思っています。クライアントの話を聞き、あなた自身の考えや意見を伝えてください。また、いろいろなアドバイスをしてください。クライアントが悩んでいる時は、その悩みをしっかり聞くとは本人はより悩み、重くなってしまうので、とにかく様々なアドバイスや助言、あなたが考えている意見を伝えることが大切です。

役割 B

カウンセリングをする際は、相手の話をじっくり聞くことが大切です。あなたが自分の感じていることを話したり、体験したことを話したりすると、クライアント自身が言わんとしていることから話がそれてしまいます。だから、自分が考えていることや意見は相手には決して伝えないでください。

自分の感じていることや、自分の体験を話さずに、クライアントの言っていることに対して“相づち（首をたてにふること）”を打ち、「うん、はい」と反応しながら、聞いてください。何か質問された場合は、自分が思っていることを答えずに、「あなたはどう思いますか?」と問いかけてみてください。

役割 C

カウンセリングをする際は、クライアントにアドバイスや助言をする必要はありません。「こうしてみたら」という助言はしないでください。

クライアントの話を聞きながら、できるだけクライアント自身の持つ気持ちに目を向け、時には「その時はどう感じたの?」、と気持ちを問いかけてみたり、「〇〇と感じていたんだね。（しんどいねー など）」とクライアントが感じている気持ちに共感し、共感した内容を伝えてみてください。

資料 4

聴く実習の対話 1998. 5. 14. 八田明久

聴く実習（カウンセリング的対話Version）

ねらい：・コミュニケーションの中での聴くことの重要性を体験する
・共感的な聴き方を試みる

手順

1. 3人のメンバーのうち、2人（AとB）が話をする。その際、Aは聴き手、Bは話し手とし、与えられたテーマからB（話し手）が1つのテーマを選択して話をする。もう一人（C）は観察者になる。
2. まず始めに、A（聴き手）がB（話し手）に対して質問をしながら話を始める。その後、A（聴き手）はB（話し手）の人の内面を知ることが重点に置きながら話をし、B（話し手）は自分を語り、聴き手に知ってもらうことに重点を置きながら話をする。
3. 話をしながら、AとBは以下に示されているルールにのっとり、お互いに相手と言わんとすることを確認しながら話を進める。特に、聴き手のAは、相手が言おうとした気持ちや思いを共感しながら、それを伝えて確認することを試みる。
4. AとBはルールに従って10分間話をする。その間Cは、2人が話している時に起こっていること（プロセス：話題そのものではなくて、どのように話しているかということ、具体的には、どこでズレが生じていたか、声の調子や話す早さ、2人の表情や身体動きなどを観察し、「観察メモ」にメモしていくとともに、ルールが守られているかどうかのチェックも行う。
5. ふりかえり：10分間の話し合い終了後、3人が気づいたことや感じたことのメモを行う。
わからあい：ふりかえり終了後、以下の順序で気づいたことのわからあいを行う。
 - 観察者（C）：観察していて気づいたことを報告する
 - 話し手（B）：話ながら感じていたこと、どこでズレを感じたか、共感してもらえたと感じたことなどを伝える
 - 聴き手（A）：聴きながら感じていたこと、共感できたと感じたところやできなかったと感じたところを伝える
6. この実習は全部で3回行い、毎回役割を交替する。

ルール

※まず、Aが発言する。

※聴いていた人[B]は、発言者[A]の言わんとすることを言い返し（繰り返し）、発言者[A]から“OK”をもらったら、次に[B]は自分の言いたいことを発言する（[A]は今度は聴き手になる；以降、交互に発言者と聴き手を交替しながら話をしていく）。

※相手[A]は、[B]の言い返しが、自分の言ったことと違っていると感じたら、“NO”と言う。

※“NO”の場合、[B]はもう一度[A]が話した内容を言い返す。

※それでも“NO”の場合、発言者[A]は自分が真に言いたかったことは何かを説明する。その後、[B]が自分の言いたいことを発言する。（以降、会話をしていく）

資料5

カウンセリング的対話
1998. 5. 21.
南短人間関係研究センター

“聴く”こと・“共感”することについての個人記入用紙

1. 私が考える、心を傾けて“聴く”とは...

聴く際に、聴く側にとって大切なことは...
そうすることによって、何が生まれてくるのか(相手、自分に)

2. 私が考える、共感的な聴き方とは...

共感って、こんなこと
共感的な聴き方をするためには...
共感によって、相手はどのように感じ、どのように変化するか...

3. わたしにとって、まだ謎のことや、わからないところは...

資料6

カウンセリング的対話
1998. 5. 28.
南短人間関係研究センター

I. D. C. 質問表

◆セッション1：就学前期

- ・あなたの家族構成を教えてくださいませんか。(場面構成のために)
- ・あなたが生まれた時のことについて、お母さんあるいは他の家族から、何か聞いていることがありますか。
- ・あなたが覚えていることの中で、一番小さい時のことを話してくださいませんか。
- ・幼稚園または保育園に入る前のことで、一番印象に残っていることはどんなことですか。
- ・小学校に入る前に、あなたはどんなことをしてお母さんを困らせたことがありますか。
- ・小学校に入る前に、あなたは両親についてどんなふうに感じていましたか。
- ・その頃あなたは、兄弟姉妹で争ったことがありますか。
- ・その頃あなたは、何か特に楽しい思いや、怖い思いをしたことがありますか。

◆セッション2：小学校期

- ・あなたが小学校1年生の時の先生は、何という名前でしたか。その先生はどんな先生でしたか。
- ・1年生の時に起こった出来事について、何か具体的な例を話してくださいませんか。
- ・3年生か、4年生の時には、どんなことがありましたか。
- ・3年生か4年生の時、あなたにはどんな友達いましたか。
- ・小学校時代に、あなたは誰かをいじめたり、誰かにいじめられたりしたことがありますか。
- ・5、6年生の時、勉強のことで何か困ったことがありましたか。
- ・小学校時代であなたが覚えている、最も印象的なことはどんなことですか。

◆セッション3：中学、高校期

- ・中学・高校時代のあなたの友人関係について、話してくださいませんか。
- ・あなたは、特定の異性の友人を持っていましたか。
- ・あなたとあなたの両親との関係は、どんなふうでしたか。
- ・あなたは、両親に反抗しましたか。
- ・あなたは、どのようにして進学の道を決めましたか。
- ・あなたは、学業のことで悩んだことがありますか。
- ・あなたは、自分の進路の決定に満足していますか。

資料7

カウンセリング的対話
1998.5.28.
南短人間関係研究センター

I. D. C. (Introspective Developmental Counseling)

ねらい：自己開示を試み、自己理解を深める
相手の自己理解のために援助的に聴き、質問することを試みる

I. D. C. は、生まれてから現在に至るまでの時期を3つに分け、それぞれの時期において、個人の発達にとって重要であると思われる事柄に関する、基本的な質問が示されています。それぞれの質問を有効に使うことによって、自己理解を深めるためにつくられたものです。

※そのために、<聴き手>は

聴き手のねらいは、相手の人の自己理解を促進するための援助を行うことです。そのために、質問表の中の質問を参考にしながら質問をし、相手の話をよく聴いてください。時間内に全ての質問を行う必要はありません（当然、質問を順番通りにする必要もありません）。大切なことは、話し手が自己開示を行い、自己理解を深められるように援助することです。具体的には、話し手ができるだけはっきりと、できるだけ多くの事実を思い出せるように質問したり聴いたりすることです。そのためには、示された基本的な質問だけでなく、必要に応じて付加的な質問を行うことも必要になってきます。また、相手の人がこれまでの自分をふりかえることができるように、じっくりと聴く態度が必要とされます。

援助的に聴くために工夫したこと、聴いているときに自分の内面に起こっていること、疑問に思ったことを心にとめておき、ふりかえりとわかちあいで話し合います。

※そのために、<話し手>は

話し手のねらいは、自分のこれまでの歩みをふりかえりながら自己開示を行い、その過程の中で自己理解を深めていくことです。そのために、聴き手からの質問を手がかりとして用いながら、自分のこれまでの体験を積極的に語ってみて、思い切って自己開示を試みるのが大切です。

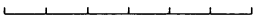
自己開示を行う前と後の、自分の内面に起こっていることに気づき、どのような質問が自分にとって役に立ったかを心にとめておいて、ふりかえりとわかちあいで話し合います。

資料8

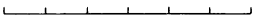
カウンセリング的対話
1998.5.28.
南短人間関係研究センター

I.D.C. ふりかえり (話し手用)

1. あなたはこのセッションで、どの程度、自己開示ができましたか？

全くできなかった  充分できた
1 2 3 4 5 6 7

2. あなたはこのセッションで、どの程度、自己理解ができましたか？

全くできなかった  充分できた
1 2 3 4 5 6 7

3. あなたが考えたことや気づいたことは...

①自己開示するために考えたこと、試みたことは？

②自分について気づいたことは？

③相手（聴き手）の聴き方（動作なども含めて）について気づいたことは？

資料9

カウンセリング的対話
1998.5.28.
南短人間関係研究センター

I.D.C. ふりかえり (聴き手用)

1. あなたはこのセッションで、相手の自己理解のために、援助的な問いかけがどの程度できましたか？

全くできなかった | 1 2 3 4 5 6 7 | 充分できた

2. あなたはこのセッションで、どの程度、相手の話を援助的に聴きましたか？

全くできなかった | 1 2 3 4 5 6 7 | 充分できた

3. あなたが考えたことや気づいたことは...

①援助的に聴くために考えたこと、試みたことは？

②自分について気づいたことは？

③相手(話し手)の話し方・応答(動作なども含めて)について気づいたことは？

資料10

カウンセリング的対話
1998.6.11.
南短人間関係研究センター

ミニ試行カウンセリング 記録&ふりかえりシート(観察者用)

実施場所: _____ 観察者: _____
実施時間: _____ ~ _____ カウンセラー: _____
クライアント: _____

1. カウンセラーの印象、カウンセラーの応答に対して感じたことは？

2. クライアントについて感じたことは？
(クライアントの様子、前半から後半への変化など)

資料11

カウンセリング的対話
1998. 6. 11.
南短人間関係研究センター

ミニ試行カウンセリング ふりかえりシート(カウンセラー用)

実施場所： _____ カウンセラー： _____
実施時間： _____ ~ _____ クライアント： _____
観 察 者： _____

1. 主な話題・テーマは？

2. カウンセラー体験をしてみて感じたことは？

【カウンセラー役をやり替えて、いま感じていることは？
共感できたなーと感じた部分は？ また、共感できなかったなーと感じた部分は？
やりとり（言葉がけ）でうまくいったなーと思うものは？ また、失敗したなーと思うものは？】

3. クライアントの印象は？（その他、クライアントに対して感じたことは）

4. その他

資料12

カウンセリング的対話
1998. 6. 11.
南短人間関係研究センター

ミニ試行カウンセリング ふりかえりシート(クライアント用)

実施場所： _____ クライアント： _____
実施時間： _____ ~ _____ カウンセラー： _____
観 察 者： _____

1. 話した主な話題・テーマは？

2. 話し終わったいま、感じていること・気づいたことは？

3. カウンセラーに対して感じたことは？

【カウンセラーの印象は？
伝えたかったことを言えましたか？ また、考える良い機会になりましたか？
カウンセラーの反応の中で助けになったことは？ また、こんなふうに応えてくれたら
もっとよかったなーと感じることは？】

4. その他

資料13

カウンセリング的対話
1998. 6. 11.
南短人間関係研究センター

ミニ試行カウンセリング 逐語記録の作り方

ミニ試行カウンセリング逐語記録	氏 名	No.1
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> カウンセラーを行った感想、やりとりをふりかえって感じていることなどを記してください </div>		
T: カウンセラー	C: クライアント	
[特記すべき場面状況があったら記してください]		
やりとり	備 考	
T1: ×××××××……		
C1: ○○○○○○ (ウン) . ○○○ (ハイ) ……		
T2: △△△△△?		
C2: □□□□□… —沈黙 1'20" —○○○○……		
T3: ××××××ということ? (ソウゾウ) では、△△△△……		
C4: <ややうなづく、少し涙ぐむ> ……	Tちょっと焦った	

【備考】

- ・ () は言葉の間にあつた相手の反応
- ・ 沈黙は — — で示し、秒数を入れる (沈黙は「S」でもOK)
- ・ < > はノンバーバルな動き等

資料14

カウンセリング的対話II
人間センター 1998.7.16.,23.

ミニ試行カウンセリング② 記録シート

実施場所: _____ 観 察 者: _____
 実施時間: _____ ~ _____ もう一人の観察者: _____
 カウンセラー: _____
 クライアント: _____

時間	Who	メモ (音動・表情・雰囲気など)	コメント (他の選択肢)

東海心理学会・特別講演

“対談” 「ひとが かわりはじめる とき」

竹内敏晴 & 村山正治

1997年5月11日 南山短期大学にて

第34回 特別研究会

「出会い・かかわり・学び～もうひとつの人間関係原論」

中野 清

1998年3月17日 南山短期大学にて

“対談” 「ひとが かわりはじめる とき」



竹内 敏 晴 (たけうち としはる)

- 1925 東京都に生まれる。生後まもなく中耳炎にかかり、難聴となる。
- 1951 東京大学文学部卒業。演出家岡倉士朗と出会い「ぶどうの会」で演出家としての道を歩み、代々木小劇場の創設にも関わる。
- 1972 竹内演劇研究所創設。
- 1975 『ことばが劈かれるとき』発表。からだことばへの独自のアプローチを展開。
- 1979 宮城教育大学教授。林竹二と協力して日本各地で授業実践に取り組む。
- 1986 南山短期大学教授。人間関係科で演劇による人間性教育に取り組む。
- 現在 著作、ワークショップ、演劇を中心に活発に活動している。
- 著書 「ことばが劈かれるとき」(ちくま文庫)
「からだ・演劇・教育」(岩波新書)
「「からだ」と「ことば」のレッスン」(講談社) 他



村 山 正 治 (むらやま まさはる)

- 1934 東京都に生まれる。
- 1958 京都大学教育学部卒業
- 1963 京都大学大学院教育学研究科博士課程修了。ロジャーズ派臨床家として研究と実践に没頭。
- 1967 九州大学教養部助教授として赴任。
- 1968 福岡人間関係研究会を創設し、ジュネラルエンカウンターグループの研究と実践を積極的に展開。
- 1972 ロジャーズのもとに留学。フォーカシングとエンカウンターグループを中心に社会的活動にも取り組む。
- 1987 九州大学教育学部教授
- 現在 久留米大学教授
- 著書・訳書 「エンカウンターグループ」(福村出版)
「夢とフォーカシング」(福村出版)
「カウンセリングと教育」(ナカニシヤ出版) 他

山口：…今回は、こういった大きな場所でもパネルディスカッションとは違って、本当に対談のようなものができると良いなと思って、こういう半円形にテーブルを用意しました。司会の私が真ん中に座っているのも変だという感じがするのですが、お二人が向かい合って左右に座っていただく形にしてみました。テーブルが半円であるということは向こう側にもテーブルが広がっていて、客席全体でひとつのテーブルを囲んでいると思って下さい。ここで対話が行われ、そして皆様方も私も中に入っているという状況で進めていきたいと思っています。



さて、この対談のタイトルは「ひとが かわりはじめる とき」となっています。なかなか不思議な感じがします。この対談の話しを持ち出した時に、竹内先生から出てきたテーマだったのですけれども、「ひとがかわる」という言葉を聴いたときに、私は教育哲学者として実際に教育現場に入って行かれた林竹二先生のことを思い出しました。林先生が「学んだということの唯一の証は、何かが変わることだ」と書いておられるのを思い出したわけです。竹内先生は、林先生の晩年の教育実践に協力者として一緒に活動してこられたので、「かわる」ということを考える時、竹内先生の中にもこの言葉があると思います。もうひとつ、竹内先生が「かわる」ということを考えるときに、竹内先生自身が耳の聞こえない少年期に過ごして、ご自身の耳の快復とともにあらゆるものが変わっていくという体験を根底に持っておられると伺っております。

一方村山先生は、エンタウナーグループやフォーカシングを専門として長い間研究と教育をやってこられたわけですが、それは人が人との関わりや出会いの中で変わっていく場であり、人が変わる場をたくさん体験してこられたと思います。

エンカウンターグループにしても竹内レッスンにしても、関係の中で自分や人が変わっていく、あるいはからだや声が変わっていくということであり、人は一人で勝手に変わるわけではなくて関係の中で変わると考えている点は共通しています。

また、「かわりはじめる」というところに目を向けてみるのはおもしろいと思います。どうも私たちは、変わった結果を求めがちになりますが、本当はその変わり始める瞬間をとらえることができるかどうか、教育者としても、あるいは心理学者としても、心理臨床家としても一番大切なのだと思います。変わった結果を見て“あ、変わった”と言うんじゃなくて、変わり始めるところをプロセスとして明確にとらえることができるかどうかというのが、大切なのだと思うからです。

そういった意味で、今日の対談では、初めに竹内先生の方から最近フォーカシングのワークショップで体験された人が変わっていくというケースといえますか、あるいはできごととして、そこにおられて見たこと、感じたことを少しお話ししていただいて、それに対して村山先生の方から色々なコメントや合いの手を入れながら、その話を明確にしていく働きかけをしていただこうと思っています。

それを皮切りにして、焦点としては、「人が変わる」ということのプロセスを、お二人の先生がどのようなことを手がかりにして、どんな風に人の変化、成長を見ていらっしゃるのかといったことも含めて、できるならば、竹内敏晴あるいは村山正治が変化に関わる時に、その援助者あるいは側にいる者としてどのように関わっていったのか、といったあたりを語っていただけると嬉しいなあという風に思っております。だいたいそんなところで1時間半、う

まく楽しく過ごして行けたら良いなと思っております。

それでは、お二人の人に登場していただこうと思います。どうぞ竹内先生はこちらの方に、そして村山先生はこちらの方にお座り下さい。

(拍手)

山口：そんなところで、始めていこうと思います。もうすでに10分ほど過ぎていますので、貴重な時間ですので、早速ではありますけれども、竹内先生に最近、フォーカシングのワークショップでこんなことがあったんだよというあたりからお話をしていただけますでしょうか。

竹内：こんにちは、竹内です。私は、心理学は全く門外漢ですし、からだを動かしたり声を出したりしていつもワークしている人間で、演劇出身ですから、それで体験したことをことばにしていくという方法しか持ってないので、今日はいくつかのことについて村山さんからコメントいただけたら嬉しいなあというようなつもりで話したならば、なんかさっきから聞いてたら、えらい大ごとになりまして、どうなるかよく分かりませんが、とりあえず話し出します。

さっき山口さんがおっしゃいましたけれども、林先生の「学んだということの証は、何かが変わることである」ということばは、私にも非常に大きなこととして、ひとつありますね。それから、まあ、生きていく条件が変わる、私の場合だと、耳だれが止まっていくらかでも声が聞こえてくるとか、ことばが今しゃべっているような場合に、劈かれてきた、一応しゃべれるようになってきたというようなことは、生きていく条件が変わるわけで、それによって変わっていくということがひとつありますけれども、今日村山さんとお話できることは、多分、人と人とが触れ合うっていうか、出会うっていうことであろうという風に、まあ思ったんです。村山さんの専門のエンカウンターということになるんですけども。

だけど出会うっていうことを言い出すと、どうしても信仰の場合のことが一番最初に私の頭に出てきまして、例えば、イエスに出会ったペテロが船を捨てて従って行った、というようなことがあるわけです。そのへんが出会うっていうことの一発の原型として私の中にあります。

日本の話ですと、「今昔物語」の中に「源太夫出家のこと」というのがあります。これは簡単に言うと、源太夫っていう山賊の親分みたいなのがいるわけです。手下を連れてあっちこっち荒し回ってる奴ですね。それがあの日、山から下りてくる。そうすると村人がたくさんお堂の前に集まっている。一体これはどうしたんだろうと思って、ずかずかと入っていってみると、村人たちはびっくり仰天してみんな逃げるわけですね。「どうしたんだ」って捕まえて聞くと、「今、都から偉いお坊さんがみえて説教してらっしゃる、それで、みんなその話を聞きにきてるんだ」「ふーん、俺にも分かる話か」「分かるか分からないか分かんないけどありがたい話だ」と聞いて、ずかずかずかずつと入って行って、坊さんの真正面へ座った。まあとにかく刀を横たえた大男が座ったわけで

すから、坊さんの方がぶるっちゃった。手下たちは外で待ってる。それで、とにかく仏様におすがりすれば、西の方浄土に生まれることができるということを、まあ坊さん一生懸命になってしゃべるわけですね。

終わった途端に、源太夫が、この坊さんの所にずかずかっ行ってね、「お前の言ったことは本当か」って言う。「阿弥陀様の御名を唱えておすがりすれば本当に浄土に行くことができます」「本当だな」と言った途端に刀をばぁって抜いた。坊さんびっくり仰天したらば、「この刀で俺の髻を切れ」って言う。「これから俺は佛さんの弟子になる」って言う。坊さんの方がぶるっちゃって「いやそういうことはちょっと家族の方や、他の方とよく相談をなさった方がいいんじゃないですか」って言ったら「何を言うか！今の今までお前は、“今、仏様におすがりすれば、今救ってもらえる”と今言っていたじゃないか。それは嘘か」って。「いや嘘じゃございません」「そんなら髻を切れ」。とにかく坊さんは手が出ないので、自分で髻を切りましてね、部下を集めて「今まで儲けた物は全部お前たちにやるから、俺はこれから出家をする」と、その場で全部身につけたものを脱いでしまって、衣を貰ってずた袋みたいなのをぶらさげて、数珠をもらって、頭を剃ったまんま「浄土はどっちだ、阿弥陀様はどっちにいるんだ」「西の方にいらっしゃる」「西に行きゃあいんだな」それで、手を合わせて西の方に向かってそのまんますすぐに歩き始めるわけですね。畑も野も川も湖も何にもかまわない、とにかくすすぐすすぐすすぐすすぐ西へ向かって歩いて行ってしまふ。途中で庵か何かに立ち寄りまして、そこにいた坊さんに「七日経ったら見に来い」と言ったので後を追って行ってみると、崖の上に木がありまして下の方には渦巻いている海が見える。源太夫は木の上に上って、「阿弥陀佛よー、ほーい」と呼んでいる。坊さんがびっくりして見ていると、「阿弥陀佛よー、ほーい」と呼びかけると潮がざあーと打ち寄せる。波の間から「ここにありー」という美しい声が聞こえた。彼はそのまま木の上で「阿弥陀佛よー、ほーいほーい」って唱え続けて、そのまま死んでしまふ。と、口から白い蓮華の花が一輪咲いた。こういう話が今昔物語に出ています。で、多分出会うということは、さっきのイエスとペテロの話も同じですけども、決定的な問題というのはそういう風にあるだろう、と思います。さっき山口さんから注文されたことの前にもどうしても一言言っとかないと気持ちが済まないの。私の中で「かわる」ってことの原型みたいなのはそういうところにあります。

「かわりはじめるとき」とさっき山口さんは丁寧におっしゃったけども、そういう風に丁寧な話になるかどうか分かりません。まあこれだけ前にお話しておいて、えー、勝手な話をもうひとつさせていただきます。

私はからだのこと、声のことをレッスンしているわけですけども、言葉が本当にその人に触れたっていうか、声がかかったときには、その相手の人は“ああ、本当に自分に話しかけられた”って感じた時に変わり始めるという風に思っ

てるわけです。しかし今からお話するのはそれではありません。山口さんがさっきおっしゃられたようなことから、命ぜられましたから話します。フォーカシングという風におっしゃいましたけれども、村山先生や都留春夫さんから学ばせていただいたフォーカシングのある方法を自分のレッスンの中に勝手に取り入れさせてもらってやったということに過ぎないのですけれども、お話しします。

最近、3月に20人ばかり集まりましてレッスンをしました。ご承知のように、フォーカシングの技術は2人で組になって一人が集中して自分の中に気がかりなことが思い浮かんだら、それを外に出してそこに置いてみる。もうひとつ気がかりなことが出てきたらまたそれも置いてみる。自分との間に距離をとってみるということをやっていくわけですね。ですが、特に感受性の豊かなというか、何かに非常に苦しんでいる人たちはなかなか距離がとれない、その苦しみと一対化してしまっているから。その距離をとるという作業を明確にしていこうというのがひとつのポイントでありました。

私もある人と一緒に組んでリスナーになってやっていて一区切りした。他の組はどうしてんだろうかと思って見たときに、一組が割と早くあがってしまったみたいで談笑しているのが眼に止まった。それでそこへ行きまして「どういう具合だったんだ？」と聞いたんですね。そうしましたらね、フォーカサーの方が、女の人ですけども、自分なりに気がかりなことを出して行って、全部すっきり出ちゃったと。ところがよく考えてみると、どれもそう大したことではない。気がついてみると自分のお腹の中に丸く固まった、鉛色の玉子みたいな物があって、しかしそれがどうあっても外に出ないっていうわけですね。それで、まあいいやと、これは手がつかないけど、外にこれだけ出て、自分の気持ちが一応すっきりしたんだから、ここまでにしようと思って打ち切りましたと、こういう話なんです。

それでちょっと口をはさんでいいか、と行って「その玉子みたいなのはどんな色？」って言ったら「鉛色みたい」だという、「固くて冷たい」っていうわけですね。「重いか？軽いか？」と聞くと「重い」と言う。「じゃあちょっと、それに聞いてみしてくれないか？」って言ったわけです。どうしてそこにいるのか聞いてみしてくれないかと。そうしたら彼女がちょっと黙っていてね、「急に叫び声みたいな、悲鳴みたいなのが聞こえてきた」っていうわけです。「キャーキャー言ってる」って。それで、なんて言ってるのかというと「人に言っちゃいけない」って言ってるというんです。「人に話したらダメ。絶対ダメ！」って、もうキャーキャーわめいてってわけです。しばらく聞いていて、「話すのをやめろ、やめろ、やめろ」って言ってる、「とにかく“どうして人に言っちゃいけないの？”って聞いてみたら？」って言ったのです。そうしたら、激しい勢いで「あんたのためだ。あんたを守ってるんだ」って言う。

その辺から声の質が彼女にちょっと分かってきたらしいんだけど、それはま

た後で申し上げます。で、そいじゃあって、もう一回私は「何を守ってるのか聞いてみて」って言った。そしたらば、非常に困って返事をしなくなって、困ってるような様子だけでも、人に言っちゃいけないってことだけをくり返して言ってる。そこで、「誰にも言わないから私だけに聞かせて」っていってもういっぺん聞いてみて」と。そうしたところが、じいーっと黙っちゃった。なんか、彼女の言い方によると、質問をしても抑え込んじゃって、逃げ出したがってるような感じがするってわけです。それで、「あなたが今、黙ってるその塊に向かい合ってみて。自分のからだの感じはどうなんだ？」って聞いたんです。そしたらば、「自分が大きくなったような気がする」って。それで、「大きくなった」っていうその感じを、もうちょっと、相手を見ながらね、丁寧に感じてみると…あ、そうか、そこで初めてね「それを外に出すことはできないか？」って言ったわけです。

村山：ああ。(感動して聞いている)

竹内：そしたらね「やってみる。…外に出せそう」って言うわけですね。

村山：ほーう。うん。

竹内：外に出した。ちょっと待ってからどんな感じかって尋ねたら、「頼るものがなんにもなくなっちゃって、からだの中がからっぽになっちゃったような感じがする」って言うわけですね。それで、まあそれを、少し味わってみよう

村山：簡単に出せました？

竹内：すごい時間かかりましたけど、割かしもうはっきりしてました。

村山：ああ、そうですか。

竹内：後で聞いてみると、中にある時にもうね…

村山：かなり固まってた…

竹内：固まってたものがね、壊れ始めてたって言うんですね。で、外に出してこう向こうに置いて、それと向かい合っている自分のからだの感じはどうなんだ？と訊かれているときに、その玉子みたいな塊が、びしびしびしびし壊れていったそうです。でまあ、それを味わっててくださいというようなことを言ったんですけども。それで、そういう形が一区切りしてから「からだの感じはどうなんだ」って言ったら、「お腹に息が入るようになった」「自由になってきて、自分のからだ自分のものになってきた感じがする」と言うわけですね。とにかくそうやって見ている間に、鉛の塊みたいなのはぐしゃぐしゃに壊れていって、それで、さっきから叫んでる声はね、これは母親の声だったってことに気がついたって。母親が、彼女の言い方によると鬼子母神みたいな母親で、もう一生懸命に自分のことをかばってくれたっていうか、また縛ったっていうか、まあある年になったらそれはうるさくなったり反抗もするわけですけども、そういう母親だったんだそうです。で、いつからこういう玉子みたいな感じがあったんだろうと、途中で彼女はずっと考えたんだけど、どうも子供の頃から

あったような気がすると言うのです。けれども、どうしてあったのか、いつからあったのかははっきりわからないという。こんなようなことだったんです。

その1日のプロセスはそれだけのことだったんですね。それで、それから彼女と別れまして半月ぐらい経ってから会ったときに、本当にびっくりしたのはね、…あ、もうひとつ彼女が感想を言ったんだ。それはね、「今日、私は泣かなかったね」って。

村山：うん。

竹内：つまり、今までワークやったときに、感受性の鋭く動く人ですからあるところまでいくと、情念が強く動いてくる。そうするとね、耐えきれなくなって泣き出すっていうことがよくあった人なんですね。

村山：はい。

竹内：それがその日は、距離を持つっていうことを繰り返しやったせいかどうか分からないけれども、泣かなかったっていうことを最後に気がついた。それで半月くらい経ってから彼女に会ってみて非常にびっくりしたのは、しゃべる言葉がね、何て言いますかね、こう楽々として出てきてね…

村山：ほう。

竹内：感情的じゃないわけです。まっすぐ出てきて、順序立って、明るい。びっくりして、「あんた話が分かりやすくなったねえ」って言ったんですけども。あと、いくつかの特徴に気がついたことはありますけども、あんまり長くなるからこのへんでやめます。だいたい前のことで忘れかけていたこともあるんですけども、だいたいそんなことですね。フォーカシングのプロセスとして、はみ出していると思いますけども、だいたいそういうことです。

村山：今お聞きしてて、まず最初の方のことで申し上げたいんですが、竹内先生がおっしゃるように、「ことばとからだ」っていうことがいつも主題ですよ。つまり先生のやられていることは僕が理解すると、やっぱりことばとからだとの相互作用かな。それがいつもテーマになっておられたんじゃないかなと思うんですね。それはある意味ではフォーカシングそのものだったような気がするわけです。で、竹内先生はことばのことを二つに分けてまして、情報伝達の言語っていうのと、それから表現としての言語ってのを分けてらっしゃって、それでその表現としての言語っていう方がつまり大事なんだと。で、その場限りの今生まれてくることば、それがやっぱり人とのコミュニケーションでは決定的に重要なんだという風におっしゃっていて、僕はこれを読んで、竹内先生は独自に自分の中に持ってるものを言語にしていって、そのプロセスって言いますかね、それを一生懸命やってくられた。これは僕の理解していることでは、フォーカシングも結局はからだの感じとことばのイメージとの相互作用で、そこで納得いく線で落ち着くといえますか、それはフォーカシングの本質であろうと私は理解していて、ですから先生のワークの本質的な部分が、フォーカシングと非常に同じことを狙っているのかな、というのがまず第一点です。あと、

今の話ですよ。

竹内：はい。

村山：実は私も今と同じようなことを最近かなりやってまして…。

竹内：はあはあ。

村山：特に、今お話があったように、気がかりなことと距離をとる、距離がとれるっていうことは、これはものすごく変化が起こる。つまり問題の中身が変わるっていうことじゃなくて、自分とその問題、気がかりなこととの関係が変わるといふか、そこが今の話の中でもやっぱりポイントで、その距離がとれたということが変化するすごく大きなポイントになっていると思いますね。で、これはおっしゃるように、これができるときというのは非常に本人が楽になるし、そうなった時に、おそらく先生もお分かりだったと思うんですけど、表情とか態度が、声の調子がこちらに感じとれるほど本当に今までと違って、元気になっていくとかですね、そんな感じ、つまり問題に飲み込まれてしまっているようなものが自分との距離がとれると、前と変化したという実感を本人も感ずるし、他人にもよく分かるのです。

竹内：ええ、ええ。

村山：まあ僕らの言葉で言えば、なんかすごい主体性が回復されるといいますか、問題に圧倒されてそれと自分との区別がつかなかったのが、やっぱりはっきり区別ができて、それを見ることができるといふ風な感じがいたしました。

それでおもしろかったのは、先生がですね、最初いくつか軽いものを出したんだけど、残っている一番大きなものに注意を向けられて、そこと対話をするというのが非常におもしろい所だと思うんです。カウンセリングっていうのは僕の理解ではやっぱり、セラピストを通していわば自分自身との対話だと思うんですよ。で、フォーカシングというのは、話とかの中身っていうよりは、なんて言うんですかねえ……うん、そのつまり、自分の問題と直に対話させるというね。

竹内：はあはあはあ、はいはい。

村山：カウンセリングですと話しにかなりいくんですけど、フォーカシングでは問題をきちっとここに凝縮させてしまってありますから、そこをはっきりつかまえたうえで、それが何をしゃべりたいのかとか、何を言いたいのかっていう風に話をさせるっていいですか、そこがやっぱり、すごい特色のような気がしますね。夢のフォーカシングなんかでもそういうことをよく使うようですけども、やっぱりそこに話をさせるということではいろんなことができて、だから問題の声を自分が聞けるっていうこと自体が、まずは距離をとるひとつのステップだったと思うんです。

竹内：ええ、そうですね。声が聞こえてきたって言ったときには、彼女もびっくりしたんだけど、僕もちょっとぎくっとしましたけどね。

村山：あの問かけが非常に巧みだったように思いますよね（笑）、その対話

をしていくことで「ちょっと聞いてみるよ」ってな話で。(アンワイザーもよく使う)

竹内：(笑)

村山：だけでもうひとつ印象に残ってるのは、出すときに実は意外と出しにくいことがよくあるんですよね。

竹内：出しにくいっていうのは、例えばどんなことですか。

村山：つまり、今の話を聞いてると、やっぱり彼女はかなりイメージがはっきり出ているということもあったし、先生はからだの感じの方から入ってますから、からだの感じをずいぶん彼女はつかんでたんじゃないかな、感じとってたんじゃないかな。

竹内：うん、はい。

村山：っていうのは、なんて言うんですかね、出すっていうのは、出しちゃうとこれは自分がなくなってしまう。

竹内：はいはいはい。

村山：そんな風な共感みたいなのがあったり、それから自分にとっては大事だからしばらくそれは置いておきたいとか、そんなことが実はよく出てくるんですね。

竹内：はあ、なるほどね。いやそれはね、やりながら多少は感じましたね。だからあの、それと本当に距離をとってそれをちゃんと見れるかどうかという感覚をなんとか作りだそうという、そうことをやって…。向こうの感じじゃなくて自分のからだの感じの方はどうなんだっていうことを繰り返し問うたりね。それで距離の取りようが少しずつなんとかなるかな、そういうつもりで見ました。

あのね、お話の途中で変なんですけども、また戻っていただきますけどね、それやってるともう僕はへとへとになってね。つまりその、玉とこっちがね、真ん中に彼女の体があるんだけど、向かい合って戦ってるみたいなんです。こう、力任せに、やりあってるような感じで。村山さんご存知かと思いますが「指輪物語」という有名なファンタジーがありますね。大きな玉がある。世界にいくつかそれがありましてね、それを見ると、世界の有様が見えてくるわけですね。ところが玉を見ると向こうに魔王がいてね、魔王もその玉を持っているんです。顔と顔を玉の中で向かい合わせてしまう。そこで口を切る時に、勝負がついちゃうんですね。ほとんどが魔王に負ける。つまり自分は負けていないつもりでいるくせに、向こうに支配されるようなものを自分で背負い込んでしまうっていうのが、その玉の怖いところなんですけども。それを思い出して、これはえらいことになったなあと思って、必死な感じでした。私の方もとにかくそのままをちゃんと、彼女といっしょになって見るというか、そういう実感がありました。

村山：はい、そこがやっぱりポイントだと思うんです。僕らが学生たちやセラ

ピストと一緒にこういうことをやるときに、よく、共感の訓練になるというようなことを言っているわけですけど、言葉ではないんですけどね、つまり今おっしゃった大事な部分と言うのは、普通僕たちはリスナーと言いますが、その側にいる人間が相手と一緒に作業をやっている感じって言いますか、やっぱりその部分が非常に大事で、しかもおそらく相手の人はそれをすごく感じてたんじゃないでしょうかね。先生も一緒にやっているとこの感じをね。それがすごく安心してその人が、取り組めるっていいですか、それにはその部分が本当に大事じゃないかなあと思いますが。

竹内：なるほど。

村山：でね。

竹内：はい。

村山：だから、確かに…。あ、もうひとつ。だから、それがしっかりしてるから、それ程あまり心配ないのかも知れないって感じなんです。つまり、僕たちがやっている場合には、よく出した後の作業ってのが意外といるんですよ。つまり出してまた戻って来るってということが（笑）、出し方によってですね。

竹内：（笑）そうか。

村山：やっぱりかなり丁寧に出不ないとまた戻って来るってのもあったりして、だから出した後、もう一度距離を取り直す、つまりそこに置いて大丈夫かっていうか、それで自分のはっきり安心できるかですね。自分の気がかりを出してみ、そこに置くことで、もう戻って来たりなんかなくて、要するにはっきり距離が取れたという確認と言いますかね。

竹内：ああ、そうですね。うんうん。

村山：それがですね、うっかりすると戻って来たり、それから無理に出したんだけど戻って来たりとかね、そういうことがあるので。

竹内：そうですね。からだから何にも頼るものがなくなって、からっぽな感じになってしまったっていう時には、戻って来るっていう可能性はなくなったわけじゃあまだなかったんでしょうね、今の話を伺ってみると。でもその所で、自分の存在だけで立っているような、自分のからだが大きくなったような気がするって言ったんで、そのところはあんまり心配しないで、私は終わっていいんだろうという風に思ってたんですけども。

村山：そうですね、そう言ってましたもんね、確かに。

竹内：実は、その人は保母さんなんですけどね、子供たちに自由に伸び伸びとさせたいという気持ちが強くて、しつけを厳しくする人たちとかなり対立して、あの人は変わってるとか言われたりして、まあ私のところのワークにきて、レッスンって私たちは言いますが、なんか追いつめられた感じになったりするとすぐ感情的になる。といっても他人に対してどうこうするってんじゃなくて、自分の中で非常に感情が飛躍するという感じになるんです。やはり自分をなんとかまっすぐ表現したいという気持ちがあるんでしょうね。

で、芝居をやりたいというのでやった訳です。そうするとね、感受性のいい人だからとってもセリフの言い方がいいんですよ、普段は。ところが、ある場面の稽古で、彼女が妹で姉さん役の人に話しかけるんですけど、どうも聞いてもおかしいんだな。つまり、本当に相手のところに「私は<からだ>と言いますが、ことばが行かないんです。最後の語尾のところですね、例えば…言葉ちょっと忘れちゃったんで言えないけども、例えば私が「村山さん本当にそうなの？」ってなことを言うとしたら、「村山さん本当に？」まではいいけれど、「そうなの？」になると、ことばがポーンと向こうに行っちゃうんですよ、遠くに行っちゃう。最後の語尾がね、絶対に相手に触れない。外しちゃう。語尾が相手に触れない、といっても「本当にそうなの？」って、こう自分の方へ戻っちゃう人もいるんだけど、その人の場合は遠くに行っちゃう。どうしても、うまく触れない。相手に本当にことばで触れていくにはどうしたらいいかっていうのは、——これは私の話しかけのレッスンってやつの基本課題なんですけど——、それが稽古でもいくらやってもできないんですよ。これはなんだろうなあ。なにかゼットイ他人に触れたくないものがからだにあるに違いないが、見極めがつかなかった。芝居の稽古の中では到頭だめだったことが、このワークを越してから、彼女はことばで平静にしゃべれるっていうか、——つまり、情念をぶつけっぱなしで逃げるんじゃなくて——相手に語尾がちゃんと掛かるようになってきたわけですね。で、因果関係がどうのこうのって言われると甚だ困るんだけど（笑）、自分の中で自分にこだわって自分に戻って行くとか、自分の気持ちをぎゅうっと詰めてポーンと相手にぶつけるとか、そういうことがなくなった。さっきの言い方だからさっぽになってね、その存在だけでしゃべると。

村山：はい。僕なんかの言葉だと素直にことばが出るようになるとか、そういう感じに僕なんかは言ってしまうんですけど。

山口：それっていうのは、例えば玉子と向かい合うことができたという体験がその変化を起こしてるという風なんですか？

竹内：あのね、因果関係はだから分からないけども（笑）、結果から言うと非常に明確にそうですね。

村山：そうですね。

竹内：それからさっき村山さんがおっしゃったように、明るくなったとか何とか、帰っていく途中はこうだった、それから何日か経って人に会った時にこうだった、私が半月くらい経って見るとはっきりした変化が起こってるというだけのことですけれども。

村山：僕もそれ以上のことは分からないですけど、おっしゃるように、割合フォローアップとかきちんとしてみると、変化は持続してるんですよ。その変化っていいですか、今みたいな、言葉が明確になったりとか、届くようになるとかですね、それが持続してるっていう感じがしますね。

竹内：その玉子みたいなのは、これはもう完全になくなったですね。

村山：そうですね、その辺がとにかく気にならないということもありますね。ただひとつお尋ねしたいのは、先ほどのそのレッスンの時に彼女はね、先生はいわば自分の耳で届いてないと、つまり返るか通過するかね、そういう様なお話でしたよね。

竹内：はい。

村山：それは先生は気づいておられたんでしょうけども、彼女はそれはどうなんでしょうか。

竹内：分らないです。

村山：分らない。それは指摘されてもだめなんですね。

竹内：だめですね。それに気づくことはある程度できるけれども、それをコントロールすることはできない。というのはね、なんて言ったらいいかな、全然逆に言うと、それはことばとか声の問題じゃないんですね。相手が見えるか見えないかみたいな話で、本当に見えてない。今みたいなことが起こった後で、相手の見え方が変わってきてるわけです。どういう風に言ったらいいか……。じかに触れるっていうか、じかに相手のからだにことばが掛かるっていうのは、方法をいくら変えてみてもだめなんで、何かが変わって、相手がパッとはっきりじかに見えてきた時に、初めて声がかかる。声のことでいうとそうなんですね。ことばをかける方法を、こういうやり方じゃあだめだから、じゃ、こうやってみますとか、そういう風にやってる間はだめなんです同じ水準であちこち行ってるだけで。そういうこととは違うことだと思います。

村山：先生は、そういう点の訓練とかには、どっちかっていうと否定的ですね。そういった色々な方法でするっていうのは、やっぱり内面ですかね。

竹内：あの、否定的といっても、そういうのが全然意味がないとは私は思わないのですけれども、方法を変えることで何か達成されるわけではないって思っているんです。そういうことが、あるきっかけになって、何かが変わる。けど何が変わったのかは——場かも知れないし、出会いかも知れない——、本当は誰にも分らないだろうと僕は思っているんで、変なことというけども。

村山：それは、今のようなお話でもすごく大事なことだと思っていますね。というのは、「変わるときがこない」とっていうのはすごくポイントじゃないかなあと思うんです。というのは、先ほどの彼女もずーっと今までそれをね、抱えてきたし、通り抜けてきてるんだ、それなりに。ですから、まあ何て言ったらいいんですかね、そういうことやっても、なかなか何年もそう簡単には出せなかったりというテーマがあって、ある時にそれが開けるって言いますかね。そんな感じがいたします。

竹内：先生がやって来られたエンカウンターなどで、何か具体的な例がありますか？

村山：そうですね、今のお話で言えば、ふたつほどあるんですが、ひとつは、

やはりその方は10年くらい…。中身は言わないでいるところがみそなんです
ね、これは。あんまり中身を話さないでもまあやれるっていうことですけど
も、彼女の場合は、舅さんとの関係があったみたいですけど。まあ10年くら
いそんなことをやって、それをやっぱりこういうデモンストレーションの場
で、じゃあ自分やってみるっていうわけです。それで、その人の場合には、い
くつか収納箱みたいなのに、まあタンスに入れるとか、いくつかこうやってみ
たんですが、最後は何か押入に入れるとというようなことでね、それをしまっ
たんですね。やっぱりその、先ほどの玉子の話ですけど、収まる場所に収ま
るっていうところが大事なことなんです。つまり、置くっていうよりは
何か収まるっていう方が僕なんかは好きで、こう、置くっていうと少し無理を
かけるっていうのがあるんですが、収まるっていう感じだと、無理が少ないん
です。まあそんな形で収まったんですね。

竹内：収まるか。うんうん。

村山：そうするとですね…

竹内：収まるっていうのは、当人がそう感じるんですか？

村山：そうです。当人が収まるって感じなんです。だから、出して、いくつ
か返せましたから、押入とか、タンスとか、

竹内：あそうか。

村山：で、それを確認して、ここが一番いいという時まで一応ね、少しやって
みるということがひとつと。

竹内：なるほどね、あそうか、なるほどね。……その、さっきのところ、
収めるんじゃないくて、壊れちゃってね、包丁ふりまわしたりしたらそれはやっ
ぱり収めた方がいいんですかね。やっぱりその壊れたものを。(笑)

村山：(笑) 要するに本人の問題ですからね。本人が壊れたままでそれを納得
してるならいいと思いますけど。それは手続きの問題で…。

竹内：荒野に置き捨てにしても構わない。

村山：だから、人によっては…。だから、もうひとりの人は、どこかで書きま
したけど、「悪魔払いをやってもらってありがとう」なんて後で言われてびっ
くりしましたが、やっぱりそれもデモンストレーションで、その人の場合は
ね、金庫に入れて、海底に捨てて、ざばんと、蹴飛ばした。ざまあみると呟い
ていました。

竹内：(笑) なるほどね。うん。

村山：それで、でもそんなことでいいのかなと思って、やっぱり気になるから、
ちょっと落ち着いてから手紙を出してみたら、その問題は一応それで収まって
いると。

竹内：お話聞いてね、デモンストレーションでそういうことが起こるわけでしょ。
そうすると、普段やってるときとデモンストレーションのときと、何か違いま
すか？と聞きますのは、私は演劇の人間ですから、デモンストレーションって

というのはつまり、見てる人、観客がいるわけでしょ。

村山：はい。

竹内：見てる人がいるときの集中の仕方っていうのはね、一対一でやるときとちょっと違うだろうという気がするんですね。

村山：はいはい。

竹内：それだけ伺いたかったんです。

村山：それはね、僕の経験では、この人たちの場合にはそういうことがなかったように思いますが、学生とか何かでやると、少し無理するようですね。こっちに合わせないと悪いっていう感じが出てきて、うまくいかないと悪いってな感じで働いて、少し無理をする。

竹内：うん、邪魔になる。

村山：で、後でね、あの時はうまくいったような感じだったけど、ちょっと残ってるとか、っていう。

竹内：はい、はい。そちらの方はよく分かるんだけど、逆にデモンストレーションで人を見てるときの方が集中度が深くなるっていう場合もあるような気がするんですよ、私は。今のお話が二つともデモンストレーションの話だから、逆にいうと一対一だと相手に対してある気遣いとかね、余計な何か動いてるのが、人が見てる前で集中しなきゃいけないとなると、緊張が高まりますね。そうすると、集中度がそこで深くなる人もいます。そうすると一気にだーっと動いていくっていうこともね、あるんじゃないかなって気が、ちょっとしたもんだから伺ったんですけれども。

山口：ゲシュタルトセラピーなんかでもやっぱり、他者が存在することは非常に重要ですね。目撃者という表現もします。ですからやっぱり舞台と同じ様なことが起こるっていうことが…。

竹内：ただその場合には目撃者っていうものの自体の集中度っていうか、こちらでやる人たちの集中を支えるその集中度がないとだめですね。

山口：だめですよ。

村山：そうですね。そう言われてみると、ひとつの例はたくさん人がいた。もうひとつの例は、実は午前中に大勢の前でペアでやって、それが残ってしまったんですね。それで昼飯帰ってきてから、何か調子が悪いて言うんで、じゃあもう一度やろうってことでその場合はオブザーバーの人と3人でやりました。

竹内：ああ、そうか。

村山：あとの例の場合、確かに見てる人はいましたけどもね。

竹内：あのね、芝居の人間から言うと、つまり、逃げられなくなるわけですね。何かどこかでね、自分なりにごまかしてみたりね、相手の視線からこう自分を避けてみるっていうことが、見られてる時にはできなくなる。自分がのっぴきならなくなって、ということが、良くいった場合ですよ。

村山：うんうん、そうですね。

竹内：芝居で、素人に芝居をやらせるっていうことの私の最大のポイントはそこなんですけどね。もう後戻りができない。稽古だったら、「しまった」とか言ってね、もういっぺんやり直すということが出来るけど、そういうことが一切できない。失敗したら失敗した所から先へ行かなきゃならない。その時に初めてその人の、何て言うかなあ、自分も気がつかないような本音が出てきたりね、というようなことがあるんで、ちょっと興味を持って……。

村山：でもそこが、竹内レッスンの厳しいとこかな。

竹内：（笑）厳しい。うーん。

村山：いや、人にもよるっていうことはあるんじゃないですか。

竹内：ええ、あると思います。ですからその人のからだを私流に言えば耕して、ある所まで行って、この人の集中度がこまで行ったなという手ごたえがなければできないですね。

村山：そうですね、その手ごたえってのが……。

竹内：闇雲にやると、さっきおっしゃったみたいに、気になってね、ちらちらになってしまう。とは思います。

山口：そのあたりというのは、ファシリテーター、例えばそれはレッスンの進め役であったり、セラピストであったりというようなことなんですけれども、そういう関わる人の資質だとか関わり方だとかといったようなものは、やっぱり相当重要だっていう風に言っているんですか？

竹内：エンカウンターなんかの場合では、その場をどう作っていくかっていうかな、そういうことについては村山さんの方が…。

村山：あの、さっきフォーカシングで一対一でやる方ですね、それはね、ジェンドリンという人は、一対一で、側にリスナーというのがいるだけでいいってなことを言っているし、それから一人でもできるんだってなことを言ってる。で、僕らの経験では、かなり経験を積めば電車の中でやったりとかね（笑）、そういうことは一人の方でもできるんですけど、やっぱり取り上げた問題が大きかったりすると、なかなか一人っていうのは難しいように思いますね。ですからやはり側に誰かがいるということと、それから、繰り返し言いますが、共感の訓練になるっていうのはやっぱり一緒にやってるというね、その実感で言うかなあ、それがないとなかなか大きな問題には取り組めない。安全機能が働いて眠ってしまうことが多い。

竹内：あの、その前に、きついことを言うと、リスナーの方が共感してるつもりでね、勝手に自分が思いこんでいるっていうことはありませんか？

村山：いやそれはですね、だから時々「こんな感じ？」ってリスナー側が表現して聞くことも可能だと思うんですよ。自分がちょっと…大体でもね、二人でいると、何となくずれたなとか、ある程度感じとれるし分かりますよね。ですから、それは聞くことで、ある程度カバーできるんじゃないかと思います。

竹内：あのー、私はことばが不自由だった人間なんで、ことばっていうものが、

人間存在がそういう風に触れ合うときに、どこまで…何て言ったらいいかな…もう思い切って言えば、信用していいのかどうかっていうのがいまだによく分からないってところがあるんです。それはどういうことかと言いますと、私たちにほとんどことばを使わない“出会いのレッスン”というのがあるんです。エンカウンターっていう（笑）レッスンがあるんですが、つまり、二人がある距離を置いて後ろ向きになっていて、合図で振り向いて、向かい合って相手のコーナーまで歩いて行く。両方がすれ違うわけですね。すれ違う時に、相手の人をどう感じたかをそのまま動いてみるというワークがあるんですよ。

一方が相手を「これはいい人だなあ」って近づきたいことも、握手することもあるだろうし抱き合うこともあるだろう。けどもう一方はやって来た時に「これはご免こうむる」と言って逃げちゃうこともあるわけですね。そういうのをやっていて、段々集中度が高くなってくると、こういうことが起こるんです。これは、障害を持った人と健常者がやる場合にも起こるんですが、向こうから人が来ますね、それがあつた時に人に見えなくなることがあるんです。雲が近づいてくるみたいに見えたり、岩みたいに見えたりね、爬虫類がよく出てきますけども。つまり、いい人とか悪い人という以前に人として見えなくなるっていう時があるわけですよ。そうするとそれはもう、例えば岩に迫って来られたらもう逃げるよりしょうがないんで（笑）。

つまりね、私に言わせると、こちら側がいる次元と、そちら側が安心して日常生活、社会生活の中でのいる次元とがね、どっか食い違っている場合です。それが、普段こうやってお話をして、「やあ、村山さん」「竹内さん」と言ってる時はいいんだけど、そうじゃなくて礼儀とか気配りとかそんなこと一切抜きにして向かい合って、近づいて行った時に相手がどう見えてくるかっていうのはね、障害を持っている人という言い方では大雑把過ぎて危ないが、集中度がある深さになった時には、違ってきてしまいます。それをもうちょっと、どうやって言ったら分かりやすく言えるかと思って困ってるんだけど。

例えばぱっと会いますね、それで「あつ、こんにちは。昨日のテレビ見た？」みたいな話をべらべらべらべらしゃべる人がいるわけだ。相手は「あたしはそういうことであなつとつきあうつもりはないんだ」って、だんだん引っ込む。ところがこつちは全然分からない。なんで気易く話を合わせてこないのかなと思つてべらべらべらべらしゃべってる。片方はある深さの人間的な触れ合いができるかできないかっていうことに自分の関心が向いてるのに、片方は普段の生活と同じ次元でべらべらしゃべってるつのがこつち食い違つと、絶対にこれは触れ合わない。片方はどつどん近づいていく、片方はどつどん逃げてくつていうことにしかならない。分かりやすく言つとそういうことになつますね。そういうことがあるんで…。

村山：それはね、グループでもよく起こります。例えば初めてグループに参加したりした時に、何か今みたいに常識レベルで関わつてくれる人と、自分はそ

れがむしろ傷つくみたいな感じで。

竹内：だから多分フォーカシングのトレーニングっていうのは、相手の中で動いているところへ探りを入れていくための、自分のセンスを、何て言いますか働かしていくっていうか、そういうことなんだろうとは思うんですけどね。だから「出会う」って言う場合に、さっき山口さんがおっしゃったみたいに、ファシリテーターとしての条件っていうか…。

村山：そうですね。僕はね、その辺はもうひとつ分からないので、まだうまく言えないんですが、これは竹内先生の仕事のヒントでもあるんですけども、集中度ということ以前にですね、最近は特にそういうことがあるんですが、自分の感じになかなか気がつかない自分に集中できない人がかなりいるんですね。

竹内：はいはいはい、います。

村山：そういう人がまた、グループなんかで参加しても、つい社会的な規範の方に自分を合わせて、自分はそうしたくないけど、自然にそうになってしまう。そうするともう、グループの中ではますます疲れて大変なんですね。そういうこともありますし、また学生の中には特にそういう訓練をやってますと、こちらの期待に応えるみたいな感じの応答になってしまって、自分の感じの方に全然触れてないというか、感じとれないですね。そういうことが起こってくるので、ひとつぼくらは、一人になるコーナーを作るっていうか。つまりこう、周りのことを気にしないで、自分の気持ちだけに触れられるようなコーナーを作るという形で、まずは自分の感じに触れさせるといいますか、触れる機会を、周りの方の刺激を少なくして作ることから始めます。というのは、それを最初から組み合わせると、今みたいなことが起こってしまって、先生も言われましたけど、なかなかかえってお互いに気を使うみたいなことで。

竹内：いや本当に、自分のことを感じないっていう人はワークやってると非常に多くてね、学校の先生には非常に多いんですよ、教師ってのはものすごく多い。(笑)

村山：(笑) いやいや。はい。

竹内：で、「今どんな感じですか？」って聞くでしょ。すると色々あるんだけども、「普通です」って言う。

村山：ええ。

竹内：「普通ってのは何ですか」って(笑)。それで「そういうことじゃなくて」とか…。そうすると「感じるって何ですか」っていう言い方が出てくる。割かし多いですね。感じるって何ですか。で、例えば「この人を見てどう感じるか」って聞くと、例えばね「非常に頭の良さそうな人です」とかいうでしょう。それはまあいいと。「相手のことはいいから、その相手の頭の良さそうな人を見てね、自分はどう感じるか。それはとてもいい感じで近づきたいと思うのか、それともこれはもうこんな頭のいい人はまっぴらご免ということになるのか」と。そこいくと分かんないんですね。自分が感じていることが分

からないというか。まあそういうことはとっても多くて。

村山：そうですね…。

竹内：そうか、一人になるか。なるほどね。私の場合には、そういうのはおかしいと思わない？っていうようなことでね、動いていくってことで、ワークを進めてく。実際に触れてみることから始めるんですけどね。「触られてみてどういう感じ？」って聞くとね、「触られてます」って言うんだよね。(会場笑)「触られてるってことはわかるよ、そりゃ(笑)」って。「じゃ、触られてるのはどんな感じだ？」って言うと「はあ、普通です」ってこうなる訳だね。

村山：(笑)

竹内：でまあ、そこから始めるしかしょうがないんですけども、その時に、だんだん人に体の重さを委ねて、重さを委ねられるかどうかを揺すってっていくというレッスンがあります。床の上に一人が寝ててね、もう一人の人が揺すっていく。自分が気持ち悪くなって“いやだー”という時には逃げてもいいよ、ってなことで始めるんだけど、それですーっと、手首を揺すり、肘を揺すり、肩を揺すり、胸を揺すり、足まで揺するっていうことは最初の時はあんまりやりませんけれども、まずは上半身。こう横になって寝ちゃって目を閉じて静かにしている時に泣いてる人がいるわけですね。それが稀ではないんです、で、ある人が言ったのは、「今まで、何て自分は人のことばかり気にして生きてきたんだろう。どんなに自分がかがちになっていたんだろうかって気がついたら、ただ涙が出てきて」という、大雑把に言うとそういうのに近い感じっていうのはかなり出て来る。

村山：そうですね。

竹内：つまり一人で気づくっていうやり方もなるほどなあと思いましたけれども、一人になる“なり方”ですね。

村山：そうです。

竹内：それを私の場合には人に体を預けられるか預けられないか、自分一人だけーとね、そのまま一人になっていくという方法として私は受け取っていたんですけども。

村山：いや確かに、からだの感じから入るとするのは非常に具体的ですね。今のようなやり方というのは、とてもおもしろいなあと思って聞いてますけども。

山口：フォーカシングの場合では、自分で触れられないことへのアプローチだとかはどうなんですか？。

村山：例えば今みたいに自分で触れられない場合っていうのはいくつかあってね、今みたいに周りの人のことがすごく気になるとか、周りの人の期待に応えるっていう形では、まず一人になると割合に切れることは切れるんですけど、まあ気がつくことがひとつありますね。

それから、やっぱり今の竹内式ボディ・ワークはなかなか有効ですね。僕は昔フォーカシングとか体験過程っていうのを随分学生には説明してたんですけど

どだめですね（笑）。ますます混乱して“体験過程ってなんだろう…”とかって話になっちゃって、ものすごく日常性と離れた、自分の実感と離れたものが他にあって、それを学習するんだ、それに合わせるんだ、みたいなことになっちゃって、それからもう説明もしないようになったってことと、竹内先生の、僕も出たことはありますけれど、からだの感じから入るっていうのが何といっても実感として捕らえやすいっていうことがあって、フォーカシングを教える上では非常にあれは助かりましたね。今でももちろん利用させていただいてますけれども。

それと「出会い」の話が出ましたけれども、僕は先生が言われるようなそういう出会いもあるような気がするんだけど、エンカウンターグループの出会いというのはね、今みたいな先生の言われているようなことも確かに起こるとは思うんですよ、でも、もうちょっと楽に考えてるといえるか……。

竹内：ええ。

村山：そんな風に思いますね。それは、例えばなぜ僕なんかグループのファシリテーターみたいなことをやれるかという一つの理由はですね、やっぱりそのメンバーの共感能力とかがやっぱりすごいんですね。

竹内：ええ。

村山：ですから、僕がトンチンカンなことも結構あるんですけども、誰かがきちっとその辺をフォローするというか、ピンとくる人がいるというか、それでグループっていうのはすごく成り立っているような気がします。従って、僕の方はメンバーの人の心理的な自由というものをどれだけ確保できるかっていいですか、ということは自分ができるだけ楽にいるっていうか、僕のことばで素直に気持ちを出したりできる時の方が、どうもメンバーの方もそういう風な形で出てくる。先生の話の聞いてるとかなり一対一の真剣勝負の出会いという、それも確かに起こりますよね。だけでもエンカウンターグループっていう場合にはもうちょっと何て言うか、皆で相互作用が起こると言えますか、メンバー同志の相互作用が起こるといえることですか、すごく救われてる部分もものすごく多いですね。

竹内：それはやっぱり、ことばという媒介が大きいとお考えですか？

村山：いや、それはやっぱり、ことばが飛び交って……いや、何て言ったらいいかな。そうですね…最近、私はエンカウンターグループという言葉を使わなくなってきたんですね。

竹内：はあはあ。

村山：何故かっていうと、出会いっていうのはやっぱり、こうすごく、先生が言われたようにものすごい真剣勝負みたいなのを連想するから。そういうことは確かにあるんですよ。でもね、僕が今考えてるのは、結局、まずは自分の気持ち、それからことばが、それにまず触れることが大事っていいですか、そこからことばが出てくると必然にすごい相互作用が起こってくるんですね。

竹内：はい、はい、よく分かります。

村山：ですから、まずは一人ひとりが、僕は「からだの気持ち」なんていう訳の分からない言葉を使わせてもらってますけども、そういうからだの感じに触れて、そこからつまり声を出せるとだんだん滲み通るような感じになってきたりとかですね、そういうことがまずはポイントだと思うんです。で、それから後は、確かにまた本当に真剣な出会いみたいなのが自分の感じであるんですけど、それ以前にあるじゃないですか、通じなくて言葉のやりとりだけに終わってしまうという感じがするんですね。

竹内：ありがたい話だと思う…って、ありがたいって言い方はちょっと変かな。あの、からだで感じてることをことばにしていくっていうことをね、まあ私が生涯苦しんできたことだから、そのことがそういう風に動いてくっていくのは、とってもそれこそありがたいことだと思うんですよ。ただそれはそれでそういう風に動いてきた人は、日常生活の中でそのことばがね、使いきれるかどうか。日常生活に戻るとまた、さっきの情報伝達の言葉にね、周りから要求されるでしょう、ぱっと戻ってきてしまって、その自分がからだに感じたことをことばにしていくっていうと、生活の中でね、どれだけ広げていけるかというか、それだけの力をどこで持てるんだろうかということをこのごろしきりに思うんですよ。で、いやおうなしにそういう言葉しか使えなくなっちゃう人がいるんですね。僕なんかちょっときついかも知れないですけど。

村山：いや、そうだと思いますよ。

竹内：そうすると、職場にいられなくなったりなんかすることになる。職場に続け、そういう情報伝達の言葉を要求されながら、それに対して表現のことばというものをその場でちゃんと成り立たせながら生きてくっていくことが、今の世の中でどういうことが手がかりになったらちゃんとできるんだろうか、ということをお考えですね。

村山：今のお話を聞いて、二つのことが浮かぶんですけども、一つは、何て言うんですかね、エンカウンターグループに出て、エンカウンターグループはこうあるべきだというのを取り込んでしまった場合というのは、比較的危ないんです。戻った場合にそうあるべきだと。“俺はこうやってるんだからお前もそうあるべきだ”みたいな形になってなかなかですね。だからそうな場合はもう一つ自分の感じてももの実感を感じとれてない可能性もあるような気がします。

竹内：うん、うん。

村山：それからやっぱり、人によっては酔ったような感じになったりとかね。グループ酔いといいますけども（笑）。

竹内：（笑）なるほどね。

村山：これはね、あんまりはっきり自分の感じに触れないうちに、みんなの雰囲気とか何かで流れるといいますか、そういうこともあります。ですから一つ

は、今のような形で、でも人間というのは知恵があるもので、リピーターが多いという一つの理由は、年に二回ぐらいね、少しガタガタしてるのを社会に出た時にきっちり自分で確認したり、というような形で段々やってらっしゃる方もありますね。それからもう一つは、それは私どもの福岡人間関係研究会も一つのモデルなんですけど、今のところではありますけれども、要するに日常場面でそういうことを、例えば週一遍とか月に一遍とか、また日常に戻ってからもやると。そういう場をセットすると。そんな形で…。

竹内：日常場面でセットするってどういう風に？

村山：普通、僕がさっきイメージしたのは例えば4泊5日とか合宿形式でやるんですね、で、戻って来て例えば月一遍そういう3時間ぐらいのミーティングをやる。そういう形で自分の感じを確認する作業みたいなものやすることで、社会とのつながりみたいなものをもう少し繋いでいくと言いますかね、そんな風にはしているんですがね。

山口：あの、その社会の中でとグループの中でとか、情報伝達と自分を表現することとか、そういった質の違うものがありながら生活の中では両者を合わせていけないといけないという状況があって、その表現の方やグループの中で体験の様なものっていうのが、レッスンの場やグループの中で行われてるんだろうという風に思うんですね。で、例えば竹内先生の場合、村山先生のそういうグループの中で起こっている、例えば共感によって支えられて何かが変わっていくといったものと、竹内先生が本当にレッスンの場の中で大きな変化を見つけ出すそのものっていうのは何か違いの様なものとして感じられますか、それとも同じものですか、どのように感じられますか？

竹内：リピーターが多いことによって支えられている感じっていうのは、直接的な場合と間接的にその場に一緒にいる人間のね、例えば後で、“自分はこう思った”という言い方しか戻らなくても、有り得るだろうという風にはまず思うんですね。で、それが一番最初に考えたことですが、もう一つは、今一人のメンバーがいるとして、その人がその場で安心して自分であり得るというか、どんな自分を出してもいいということが保障されているということ、自分のからだの底で納得していくっていうことについて言うとね、僕はほとんど共通だという風に思います。ただ、さっき言ったみたいに、私本当言うとエンカウンターっていうのはちゃんとやったことがないんですよ。以前に私のグループである人を呼んでやったことがあるんですけど、それがまあ極端に言うとか大失敗したわけです。そのファシリテーターにメンバー側が全く乗らなかったっていうことがありまして、その事情はお話ししませんが。ですから、雰囲気ってのは僕は非常に大事だと思うけれども、雰囲気でその場で自分がそういう風になったつもりになってるのと、さっきおっしゃったみたいに自覚的に自分のからだからことばが出てくるっていうことの、自覚の差という、そのような場でどれだけ本当にできるのかなあというようなことをね、もし、外から見

てて気がかりなところを言えと言われるとそういうことになりますね。

そういえばね、例えばこういうことがあるんだ。野口晴哉さんという方が、もう亡くなられましたけどいまして、整体…あれは療法と言っちゃいけないんだから何だっけ、整体法ってのがあります。で、晩年に晴哉さんにお目にかかったことがある。でね、そこで活元っていうのを何十人かがやってるんですよ。非常に簡単に言うとかからだ自然に動き始めるっていうことなんです。で見るとね、要するに三種類あるわけ。自分のからだは動いてないんだけど一生懸命動いてみる、これは気がついて、自分でもよく分かってるんだけど、とにかく動かずにいたんじゃどうにも格好つかないから、一生懸命動いてみて何とか動き出すからだを見つけたいと思っているってのが、どのくらいいるのかなあ、まあ、半分以上はそうですね。それからね、その次が微妙で、ぱあーっとかからだ動いているつもりなんだけど本当は動いてない、自分が動かしてる、微妙に動かしてるんだけど、自分では動いているつもりになって陶醉してるというのがね、これがかなりいるわけです。本当はからだ動いてるのは、まあ4分の1か5分の1と。私は全然整体法自体は知らなかったんだけどね、からだを見てるとそう見える。そう言ったら「その通りだ」って言われたんです。それで、その初めと後のいいんだけど真ん中のところが一番問題なんですね。一見“ああよく動いてるな”って見える。当人も動いているつもりでいる。しかしそれは本当に整体でいうと錐体外系の働き、というのかな、で動いているんじゃなくて、非常に微妙に自分で動かしてるに過ぎないんだけど、自分自身もそれに酔っててね、動いてるつもりになってるといふね、これが一番危なくて。私は自分がやっていることも含めて、いろんなグループでやることの中で一番用心しなきゃいけないのはその部分だという風に思うんです。

山口：でも考えてみると、その層が一番変わるチャンスを持っている層ですよ。その自分の何て言うか、“やってるつもり”が崩された時に初めて気づくことっていうか、そうじゃないですか？

竹内：あのね、私は逆に、その層が一番変わらないっていう説なんです。（会場笑）つまり、どういう風にやっても、自分で陶醉してる自己肯定の中に閉じこもっちゃって、やってるつもりだということに、例えば指摘されても気づかない可能性の方が大きいと私は思うんです。自分は本当は動いてないんだけど、何か動かなきゃ、動けないかと思って一生懸命やってるって人は、どこかでぱっと変わるけども。私の感じがそうなんですよ。

山口：はい、わかります。

竹内：そこへ入っちゃうと、これはもう一遍、まっさらなところに戻さないと。僕のこれは感想ですよ。だから…

山口：そこが一番難しい。

竹内：あるいは山口さんのおっしゃるように、そこからぱっと動いていって

のもいるかもしれませんが、自分が違うんじゃないか、と感じるという能力が目覚めてくるということは、一番難しいっていう感じがする。

山口：グループの場合はどうですか？

村山：あのね、僕はやっぱり一つは、いろんなレベルの人が参加してるっていうことがあると思うんですよ。参加者がね。スタートラインていうか、自分のからだの感じにきっちり向かえ合いやすい人と、それからすごくその距離がある人っていうのは随分違うと思うんですね。ですから、その辺りのご本人の参加した時点での自分のレベル…上下じゃないですけど、自分の心の、そこに触れる、触れられる、その辺りが随分違うような気がしてですね。必ずしもそういう風に一括して言えないんじゃないかなというか、やっぱりその個人にとっては、かなり意味があるのではないかという気がしてます。敢えて言えばそんな感じですよ。もちろん…、そのリピーターっていう言葉がそもそもちょっとね、言葉が悪い…

山口：ちょっと否定的な…。

村山：はい、そうなんです。それにもちょっと問題がありますが。

山口：繰り返していくことによって、突破していくこともあるということでしょうか。

村山：という人も確かにいるような気がするし、おっしゃるように少しマンネリ化するという人も、確かにいるように思いますが。随分個人差があるような気がしますね。

竹内：ええ、それはそう思いますね。……基本的にね、私は出会うってことは相手によって自分が突破されることだって感覚を持ってるんです。自分が触れ合っただけという言い方は非常にソフトですけども、実を言うと相手っていうのは自分と全く違う他者ですから、その他者によって自分が突破された途端に、“あっ”という風になった時に出会ってということが起こるし、自分がその時には変わってるっていうのが基本。

村山：あの、それに近いか遠いかちょっと分かりませんが、例えばグループの中で、これは後半によく思うことですけどね、例えば、リーダーシップをとったり、パワーのあるような人、いますよね、で、なかなか自分の思いっていうのが言えないんですよ。で、ある時にその人が「みんなはまあまあとか言うけど、ちょっと私、何かあるんだけど今はちょっと言えない」という形で、ちょっと待ってくれと。で、例えば翌日にもう一遍ね、その人にチャレンジすると「自分はずっと昨日から思ってたんだけど、あんたについてはこういう感じがあってね、自分としては非常に動きにくい」とか、そういう形の一種のコンフロンテーションですけども、が起こってきます。その時には多分、両方ともね、越えられたような感じを持つのではないかという風に思いますが、後半になるとかなりそういう部分が出て参ります。それから、やっぱりある程度言っても大丈夫だっていう土壌も出て来るし、それからおっしゃる、ひ

とつその人の、ある種の、ここで何とか自分は言いたっていうかな、相手と向き合いたっていうか、そういう勇気みたいなものですね。

竹内：いや、私は「今は言えない」っていうね、言い方はとっても、私には何て言ったらいいだろう…大事なことのようなことでもあるし、切ない気がするんです。私は、ことばがうまくしゃべれないっていうことはね、それが言えないんですよ。

村山：いや…。

竹内：今は言えないから後で、っていうことが言えないんですよ。

村山：うーん、そうですね…。

竹内：ええ。それが言えるようになるっていうことは、随分ことばがしゃべれる段階にならないと言えない。だからそこは今伺っててちょっとね、切なくなっただんですね。

村山：先生はどこかで書いておられましたよね。自分が若い時にひとつやったことは、「ちょっと自分は耳が聞きにくいから、もうちょっと大きな声で言ってくれ」とかですね、それを言うこと自体がすごく大変なんだという、それは大変なことですね、やっぱり。だけど、やっぱりさっきのような場合にもある意味ではそれに近いような、そういうことはやっぱりすごく勇気が要って、そこに自分をぶつけないといけないみたいなのところがあって。ま、それを毎回、先生の場合はやらなきゃいかんか、ということになるんで（笑）状況も…。

竹内：あの、そういう難しさと同時に、「今は言えない」ということばを選ぶのが難しいんです。一生懸命言うってということでしょうか？ 何とか自分を表現したいってことは、何とかことばにしたいってことですから、「今は言えない」ってことはね、しゃべれる人だから言えることなんですよ。うまくしゃべれない人間にとっては、「今言えない」っていうことは「永久に言えない」ってことなんだ。だから「今は言えないけど後で」ってことが言えるってことは、もうすでにある程度表現としてのことばがね、自分にあるという自信がないと言えない。だから、まあそれはちょっと今ここで話すにははみだしましたけどね…。

村山：いやいや。

山口：時間もちょっとはみだしてるんです。

竹内：ああそうですか（笑）。

村山：（笑）

山口：どうしましょうか？

竹内：（笑）いや、どうするかってのは山口さんの責任だもん。

山口：いやいや。えー、時間が来てしまっているようなんです。全体にまあ1時間半という設定自体にかなり無理があったんじゃないかなという風には思っています。さあ、対談はいつまでも多分続いていくんだろうと思うんですが、私自身は聞いていて、やはり原点のところはソクラテスを思い出してしまうと

うか、これは竹内先生の話にも出ましたけれども、最後の例でもそうですが、当たり前だと思っている、あるいはやれていると思っていること自体の中にどうも大変な問題が含まれているようです。

それからもうひとつ、村山先生のお話の中にもやっぱりそれは出てきていて、最後のお話でもそうですが、人がこれまで言ってこなかったことを言いたいというか、それが生まれたということは、多分その前の段階で自分に触れるということが起こってきているんだろうと思うんです。その辺りのことが、からだを通して、あるいはからだごととがすりがすり合わされていくところで、自分に触れるっていったことが起こり始めて、そして自分が今まで当たり前だと思って済ませていたことだとか、出来ていると思っていたものが壊される、竹内先生は突破ということばを使っておられましたけれども…

竹内：突破される。

山口：突破される、ああなるほど。本人が突破するのではなくて…

竹内：じゃなくて、突破される。

山口：やっぱりソクラテス…役が必要なわけですね。

竹内：（笑）

山口：役が必要なわけですが、村山先生の場合は、多分特にファシリテーターがいなくても、自分自身であったり、一人になるというような時を持つといったことで、自分で自分を突破するきっかけを得たり、あるいはそのグループの仲間からの指示や対決のようなもの、それで突破するきっかけができたりという風なことなんだろうと思いますね。そのあたりが多分“かわりはじめるとき”なのだと、私は聞いておりました。

フロアにいらっしゃる皆様方の方でいろいろ感じたことだとか、質問などがありましたら、あと5分くらい許可をいただいて延長ということで…。それでは何か、ご意見やご質問がありましたら受けたいと思いますけれども、いかがでしょうか？

近江：南山短期大学のスピーチ・コミュニケーションが専門の近江誠と申します。声を出すとかからだを動かすとかいうことは、それ自体が目的となりますよね。言葉も教えていますから全くその通りだと思うんです。けれども、同時にそのことが精神の解放をさせるための手段にもなるという風に、手段か目的か問題は実に大きな問題だと思っています。

先ほど、自分がからだを動かしているような気持ちになっているということ、竹内先生はおっしゃいましたけれども、私、アメリカの養老院にしばらく行ったことがあります。いや自分が歳をとったからではないんですが（笑）。私が20代で留学している時に、インディアナ州のある養老院に行ったことがあるんです。おじいさんやおばあさんのいろいろな手伝いをして、木曜に必ず社交ダンスのパーティーがある。ところが、ほとんど動けない人たちが社交ダンス

をやることは無意味か、無意味でないか、という問題がある。初めは無意味だと思ったんですね。だいたい車椅子に乗っている人たちが何で社交ダンスやらなきゃいけないんだというわけで（笑）。タンゴ、ジルバ、ありとあらゆるダンスがあって、その相手をさせられるわけです。

一生懸命おじいさんやおばあさんの相手をしましたけれども、みなほとんどがもう一箇所止まっただけで目をつむって体を揺すってるだけなんです。今度はタンゴ、今度はジルバ、でもステップなんてないんです。ほとんど体を動かしてるだけで。でも、踊った気持ちに十分なってるようなので、私も真剣にその相手をしました。それで終わってからどう言われたかっていうと、あるおばあさんからは「ああ、今日は楽しかった。本当にいろんな踊りを踊った」と。「また来週も木曜日にダンスがあるから一緒に踊ってくれないか」という風に言われました。この時思いました。この社交ダンスっていうのはこの養老院においてはあくまでも、おじいさんやおばあさんたちの精神を解放させるための手段としてすごく機能してるんだな、と。

で、一方、健常者であるはずの学生たちなんかを見てると体は動かしてるけど随分無意味な動かし方をしてるし、心の中はどんな風に解放されてるのか、結構何か鬱々したもの持ちながら体だけは動かしてる人を見ると、どっちがまともなのか。このおじいさんやおばあさんたちは、体こそ動かないけれども、その感覚は中で確実に育っているし、社交ダンスはいい手段として機能してる。

また、言葉を教える場合においても私もやっぱり、ここのところはこうしよう、ここのところのイントネーションはこうしなきゃいかん、こう言ってる時には体はこう動かさなければいけないっていうことを、うるさく言うと、プロになるんじゃないんだからそんなきびしくやらなくたっていいじゃないかって言うような風潮がありますけども、実はそういう様なことをぎしぎし指導している過程において、別のものを学んでいるという部分が多分にあるんですね。ですから、みんなプロにならないのは当たり前だけれども、あたかもプロになるかのような英語演劇やスピーチの指導をするわけなんですね。目的と手段が結構混同されていて、あの人はこういうトレーニングをやっているから演劇の専門家やスピーチの専門家を育てたいと思ってるんだらうという風に勘違いされます。それは間違っているんじゃないかなという風に思います。

竹内：いやあ、それは踊ってる気持ちになってたんじゃなくて、踊ってたんです。（笑）それはちゃんと。僕も社交ダンスはちょっと習ったきりやってないけども、いつだったかな、船に乗った時に、本当に日本人が踊っているとすぐ分かる。ワルツだろうとタンゴだろうと、外国の人たちは夫婦でできあってとにかく全部同じように楽しんで踊ってる、それでも結構、自分たちなりにあるリズムでその時その時変わって踊ってる。ところが日本人は曲が変わるたんびにパッとステップが変わる。タンゴはこうしなきゃいけない、ワルツはああしなきゃいけないって、一目見て“ああ日本人が踊ってる”っていうのが分かる

(笑)、あれは踊ってるんじゃないわな、あれは体操だなと思ってました。やっぱりそういう違いじゃないかなという風に思います。踊るっていうことがからだの中にあるっていうことであって、肉体がこういう格好をするということは違うと思ったから、さっきのお話聞いて、*“そうだろうなあ”* と思いました。

山口：さあ、それでは時間がきたようです。

竹内：一言言っていていいですか。

山口：はい。

竹内：さっき話が途中になって…。*“かわる”* ってことについて一言。つまり *“かわる”* ってことは、時がこなればって話がありましたよね。

村山：ええ、ひとつはね。

竹内：で、何とか今までのやり方でやっていける間は変わらないって風に僕は思うんです。それがどうにもしょうがなくなったという、そのこと自体が自覚されている場合もあるし、自覚されていない場合もあるけれども、今までの生き方ではもうこの先やっていけないという時にならなければ人は変わるものじゃないと、大体、なまけものですから、という風に思うんですね。だから *“変わりたい”* と思って変われるわけじゃない、と私は思います。しかし、努力しないで変わるという訳にもいかない、という風に、それだけちょっとさっき言っておきたかったので。

山口：最後になってまたえらいことが出てきましたけども、(会場笑) そうですね、でもやっぱりぼかぼかあったかいと、いつの間にか服を脱いでる場合がありますよね。

村山：ありますね、そうですね。

山口：これは多分、エンカウンターグループの方はそれも言いたいんじゃないかなあと。

村山：そういう一面もあるでしょう。つまり、まあ大きく変わるという意味ではおそらく竹内先生のおっしゃるとおりだと思うんですよ。でもまあ、ちょびちょび変わる中で、そのうちに変わっちゃうというのもありますから。(会場笑)

竹内：(笑)

山口：はい。ここまで来たところで今日はお開きにしたいと思います。どうもありがとうございました。

「出会い・かかわり・学び～もうひとつの人間関係原論」



中野 清 (なかの・きよし)

- 1949 千葉県に生まれる。
 - 1979 上智大学で中世思想を中心に学び、大学院哲学研究科博士後期課程満期退学。
 - 1980 南山短期大学人間関係科講師就任し、哲学系の基礎論・人間論を担当。また他の領域の教員とともに現代社会と人間、カウンセリング的対話なども担当する。
 - 1987 独ミュンヘン大学カトリック神学部グループマン研究所客員研究員。
 - 1995 南山短期大学人間関係科教授（現在に至る）。
- 著書：『告白録』におけるアウグスティヌスの神探求の道
「体験学習」を哲学するー体験と知とコトバー
「都市の賑わい」ー地下街を読むー
「人格と行為」ーガブリエル・マルセルの論文を読むーなど

中村：例年は外部からの講師で研究会を行っていますが、教員合宿の中での話し合いで、人間関係科の教育の中で身近に考えてみるのが大事だろうということで行うことにしました。話題提供半分、質疑応答、質疑というよりも、話題に対してどんなふうに考えるかを出してもらいながら、人間関係原論や、人間関係から学ぶとはどういうことかなどを考えられるといいなと思います。

中野：今日の話の流れを概要をプリント〈資料1〉に作ってみました。きっと穴だらけの話なので、皆さんがその穴に一度はまってもらい、そこからみんなして抜け出せると、いろいろなアイデアが出てくるとと思いますので、よろしくはまってみてください。

タイトルの「出会い・かかわり・学び」という3つのコトバがどのようにつながっていくのかということ、今日お話したいと思っています。「出会い」も「かかわり」も「学び」も、人間関係科の授業では、学生もスタッフもいろいろな形でたくさん使っているコトバです。その意味で人間関係科の日常語がありますが、また様々な授業の根幹にあるコトバではないかと思ひます。それについて、普段気づいていることを少しまとめてみようというのが今日話の主眼です。

副題に「もうひとつの人間関係原論」と付けました。人間関係原論は、みなさんご存知のように、人間関係科の入学から卒業まで連続して続く必修科目です。1学年全員が4人の担当スタッフとともに2年間かけてつくりあげる人間関係科のもっとも人間関係科らしい大事な授業のひとつだと思います。また、

「もうひとつの人間関係原論」という副題で、わざわざ「もうひとつの」としたのは、「原論」と名づけられているのですから、この授業には私が考えている以上にもっとがっちりした何かがありそうな予感がしているのですが、自分が普段考えていることはそれとはいつもちょっとずれているんじゃないかという気がしていて「もうひとつの」とした次第です……。結構謙遜してつけました。

3つのコトバの関連を検討するのは何のためかということ、人間関係科の教育とか学習の基礎的概念を検討していくのが、私の大事な仕事だと思っているからです。そこで人関の中で、創設当初から言われている言葉を2つ取り上げてみます。一つは人間関係科の学習の基本的な方法である「体験学習」。体験から学ぶということ。人関では体験というのを授業、学習の場面で、また話をしていく中でもすごく重視している。体験を重視する主眼はどこにあるのか？を検討したい。もうひとつは、人関では何を学ぶのか？という問題。当然のこととして人関では「人間関係」を学ぶ。人間関係を学ぶといっても、特定の既存の理論などを講義や実習で教えるというよりも、むしろ学び方を学ぶのだという言い方がされます。「学び方を学ぶ」とはどういうことか？これにも触れられたらいいなと思っていますが、この2つの大テーマは、さきほど言った私の大穴にまずはまってから、後半の質疑の時間にみんなで意見を出し合う形で答えがさがれるといいなと思っています。皆さん自身にも考えていただいて、お互いの体験学習観を吟味しあえたらと思っています。

今日の話のきっかけとなっている、「人間関係原論」という授業を、今年は山本研究員を含めると5人のスタッフでやっています。星野、津村、グラビア、私と山本さんの5人です。

授業の今年の「ねらい」は2つです。ひとつは「124人と出会う。」124という数は、参加学生とスタッフを合わせた数です。お互い何らかの形で出会ってみよう。そこから何か生まれるだろうという、予感を込めながら立てられたものです。すでに顔見知りであるあるいは親しい間柄の人もいるいわば仲間どうしであるにもかかわらず、あえて「出会う」というところにひとつのミソがあるかも知れません。二つ目のねらいは「自分をいかす、相手をいかす」です。少し固く言うと、個と全体との関係。個人個人が自分であって、自分の能力・才能・興味をその都度ごとにいかし、そして相手をもちかすということ。そういう自分と相手とがともに活かしあえる共同の場がどうすればできるのか？という課題です。これは、人間関係科が昔から強調していた、学習共同体、ラーニングコミュニティといいますが、その在り方を模索すること自体が、まさに人間関係を学んでいくことであり、さらに言えば、人間関係を学ぶための学び方を学ぶ体験学習なのだという期待の下に行ってきたことだと思います。

「自分をいかす、相手をいかす」というのは、言葉としては単純でスーッと抵抗感なく入ってくることはなんですけど、考えてみると非常に難しい問題をいきなり提起しているとも言えます。課題に取り組もうとすると学生はただちに問題の困難さにつきあたります。自分が自分であって、あるいは自分らしくあろうとすると、簡単には相手の人をいかすことにつながってこない。時には衝突する。自分をいかしながら同時に相手をいかす、相手をいかしながら同時に自分をいかす。他の人と一緒の場でそれをやると、両立しないのではないか、自分と他者と両方ともがうまくいかせる場とか、やり方は理想に過ぎないのではないかという思いが非常に強くできます。でもこの問題は、この社会がより人間的に生きやすくなっていくためには、やはり共同の場、契機がどこかで作り出されそれが保障されていかないといけない、人類が永遠に追求すべき大事な問題のひとつでもあるわけですから大問題です。それを1年生の始めから取り組もうとするのですから、学生に困惑が生まれるのも当然です。しかし人と人がかかわるかぎり避けて通れない根本的課題ですから、「人間関係原論」であるかぎり、そうした問題に私たちも立ち向かっていこうという思いでスタートしたわけです。これまで1年間授業をやってきましたが、2年次の授業でもこのねらいは続くだろうと思っています。

今期、1年後期の授業ではテーマ名に「かかわることと学ぶことをめぐって」とつけました。とりわけ「学ぶ」をつけ加えたことで、学生自身のこれまでの学習体験も含めて、今人間関係科でやっている学び方に目を向けてみようという趣旨です。最初の授業では、それぞれの人が「学ぶ」ということについてどんなことをイメージするか、「学びの風景」のタイトルで表現して各人のイメージをさぐるための6回の授業をしました。1番バッテリーとして、中野自身がどんな風に「学び」をイメージしているかを話せということになって後期の初めに話をしました。今日の話は、その時学生を前に話したことが主です。

それでは、その日の授業記録<資料2>をちょっと見てください。(以下、「」の文が記録文です)

授業記録は山本さんが記録してくれたものです。どんな感じで授業が進んだか、原論の授業の雰囲気味わってもらいながら一緒に見ていきたいと思いません。

10:30 ジャーナル返却

——いつも最初に前週に学生が書いた授業のふりかえりに相当する「ジャーナル」を返却するところからスタートします。

10:45 ジャーナルへのコメント(グラバア)

「先週はツンツンとグラバアのためにハッピーバースデイの歌をうたってくれてありがとうございました。わたしがうれしかったのは声を出して皆で皆で

うたってくれた事です。グラバアが歌った歌の詩は、後ろに置いておきますので帰りにもって行ってください。次週やることの予告をして欲しいという要望があるようですが、スタッフミーティングをして次週の計画を立てる関係で今はできませんが、努力します。」

——ジャーナルに対するコメントをグラバア先生が話しました。丁寧に読むとおもしろいんですが、今日は割愛します。

10:56 私の学びの風景（中野）「出会い・かかわり・学び」

「今日は学ぶとはなにかを考えてみたい。時間管理ができませんので、30分経ったらお知らせください。」

——と前にいる学生に言ったんです。すると授業後の学生のジャーナルに「教師が自分で時間管理ができないからと、学生に助けを求めるとはけしからん。」とお叱りのコメントが入ってまして……。しかし皆さんご安心ください。その学生とは今は非常に良好な関係です（笑）。

11:00

「話の本題に入ります。『出会い・かかわり・学び』について話します。これは原論の中で話してきたことです。「出会う」ことは原論の中で大切にしたいです。「私をいかす、相手をいかす」というねらいもある。今日の話の方向性を示します。「出会いとかかわりが媒介する学び」——これは黒板に書きました——もうひとつ本日の目玉。それが「私」中野自身にもたらしてくれる変化。「私が変わること」が学びにとって大切なことだ。キーワードを示します。『学ぶ＝変貌すること（メタモルフォーゼ）』

——これも黒板に書きました。授業後の学生のジャーナルに「中森明菜のメタモルフォーゼという歌はそういう意味だったんですか」と書かれていて……（笑）。「変貌する」という言葉自体は、森有正、経験を大事にしてきた哲学者ですが、かれの思想展開の中期に、「経験の変貌」ということを言い出していますが、その言葉を借りました。

『『出会い（124人と出会う）→かかわりの変化（自分をいかす、相手をいかす）→学ぶ（ ）』——これを黒板に書きました——。

『『出会い』から話しを進めます。私（中野）の出会いのイメージは「思いもかけないこと」が私の前に現れてくること。学びにつながる出会いのあり方は「思いもかけないこと」が私の前に現れること。』

——まず、出会いとかかわりと学びについて、「出会い→かかわりの変化→学ぶ」という言葉を、直線的につないで提示をしました。つづいて、出会いというコトバを聞いて私の中で思い浮かぶことばのイメージを、「「思いもかけないこと」と出会うこと」、これが私の中にある「出会い」という言葉の持つ大きなイメージです、と。最終的に学びにつながってくる出会いのあり方は、思いもかけないことが私の前に現れてくることです、と。これが私の中にあるひとつのイメージです。今日のテーマの3つの言葉がどうつながっていくのか？

いま124人と出会うということをやっている、出会って、いろいろなかわりがうまれるのかなんとかよくわかる、印象に残る人があったり、そのまま過ぎてしまう人があったり、でもどうしてそれが学ぶということにつながっていくのか。学生の多くにとっては、われわれスタッフが提示したテーマが結局のところどこでどうつながっていくのかよく分からないという疑問点がジャーナルに書かれていました。そういうことから、「出会い」が「学び」につながる流れとはどのようなものだろうかということで話そうとしたわけです。

11:15

——ここで中野自身の出会いの経験を紹介します。このひとつ前の授業は「夏の出会い」と題して夏休みにあったことを学生どうし話してもらったので、私もこの夏休みにあったことを事例にしました。この話しは授業記録にも要点が書いてありますが、少し詳しくお話しします。

この夏は思いもかけないこととの出会いという言葉の普通のイメージからすれば、特に新しい場所との出会いとか、新しい人との出会いもなく過ごしていました。ところが9月に大海（おおみ）という三河の小さな村に行きました。その駅でひとつの出会いがありました。その時大海に行った理由ですが、家を建てようと思っていて、最近の家は、高気密高断熱を重視するという新建築基準法にそった外界の自然に対し閉ざしていこうとする方向があります。それに対して日本の従来の家は、高温多湿な日本に合うように夏の暑さをいかに避けるかを基準にした、いわば開放型でした。それが今はエアコンなど人工的な空調装置ができたので、できるだけ外気の流入を閉ざして熱効率を上げようという方向に変わってきています。私もずっとそういうものを作ろうと思っていたんです。妻がすこし心臓がわるいもので夏の暑さはすぐく体にこたえるようなのです。ところが知り合ったある設計士に「今自分が手がけている建築中の家を見てくれ」と言われました。その建築現場が大海にありました。「本物の日本の家は体にやさしいですよ」のことはにさそわれて妻と2人で出かけたのです。その日は一段ときびしい夏の太陽が照りつける日で、駅から5分ほどの道のりが遠く感じるほどでした。その家はいかにも田舎にありそうな小舞の土壁で作った大きな家で、従来の日本の家のつくりを説明する格好のモデルのようでした。「普通通りに作ってあると涼しいでしょう」と言われて、半ばでき上がった家の中を案内されながらいろいろ説明をしてくれたのですが、でも実のところあまり涼しく感じなかったんです。帰りの道はさらに遠く感じました。ようやくとっていいような気分で駅に着き、待合室で電車が来るのを待っていました。そこは腰までの壁がある以外天井までは筒抜けの小さな空間で、「クーラーがあったらなあ」と恨めしい思いさえしました。線路の向こう側には、小さな芝地に何本かの緑の葉をひろげた広葉樹とその背景に杉の林がつづいていました。暑さにばててもう冷たい飲物を買いたい出るのも億劫な気がして、あまり話しもせずボーッと前に見える景色を見ていました。そのとき、スーッ

と風が吹きぬけていきました。それがすごく気持ち良かった。風が体の中を通り抜けていったように、思わず「ああ、なんて涼しいんだ」と心底感じました。まさにその時、はじめて風と出会った実感がしました。それと同時に、中を風が吹いているような家を建てようと思ったんです。これは決して大事件ではありませんけれど、自分の感覚が何らかの状況で開かれていく、五感が開かれていく時に、起こったことで、自分の意図で起きたことではない。このとき自分の中にスーッと入ってきたこと、それが今も強い印象として残っています。これは自然とのかかわり方をめぐるひとつの例です。風は、生まれてこの方ずっと私の周りに吹いていたと思うのです。風に触れる経験は数えきれぬほどしている。風とは一体どんなものかって、言葉は知っていても自分の感覚の中で実感することは本当に長いことなかったなあと思ふのです。新たな風との出会いがあったということです。

もうひとつささいな事ですが、今度は人とかかわり方について、僕と妻の関係をめぐってです。大海に行った次の日から彼女は調子が悪くなりました。暑かったせいもあるのでしょう、体調を崩して仕事を休んだんですね。その頃彼女は職場で新しいプロジェクトを始める準備におわれていまして、そのことで部下との人間関係がうまくいかないで困っているという悩みを前から言っていました。話の中身はプライバシーに触れると困るのでカット。とにかく、こちららも夏休み、彼女も休んだということで、久しぶりに二人でゆっくりと話をすることができました。私もゆっくり彼女と向き合ってしゃべることが長いことなかったように思います。その時気づいたんですが、彼女の顔を見て話したことって、本当に長いことなかったなあと思いました。その時彼女の顔を見て話している自分に気づきました。家の中にいるとどうしても顔を見ないで、表情の変化も捉えずに、つい言葉の中身だけ聞いて受け答えをしてきた自分がいたと、はっと気づいた。その後から、時々意識して見ないといけない、彼女の顔を見て話をすることを大事にしようと思いました。そうすると、よく話が聞けるようになりました。また話を伝えようという意欲があがりました。そういう二人の関係、かかわり方が変化したと思います。

自然との出会いと、20年以上つきあっている彼女との関係、でも、かかわりの仕方はだいぶ変わるということを経験しました。

11:40

『出会い(124人と出会う)→かかわりの変化(自分をいかす、相手をいかす)→学ぶ(自覚化)…新しいかかわり方が身につく』

「行動変容が起こるまでに自覚化する。自覚化するステップを大切にする。」
できるのか……するの……。「新しいかかわり方が身につく」その先に新たな関わりが開かれてゆく。

——関わりが変化していくということが自分をいかすというねらいとつながっていることだろうと思いました。学ぶというのは、そうした自分のかかわりの

変化というのは、出会いは偶発的というか偶然的な要素がたくさんあります。それが学びに至るためには、しっかりと身に付いていく、恒常性が、学びには必要なわけです。そのためには、ある種の自覚化があって、それを自分の意志、努力において継続していくことが必要になります。直線で3つの言葉をつなぎましたが、かかわりの変化から学ぶこと、ここには実にいろんな要素が絡んでいると思われまして話は少しだけ後でします。そして最終的には行動の変容が起こること。これも人間関係科で大事にしていることだと思いますけれども。そうしたことを自覚化していく。出会いから起こる変化を自覚化していく。そのステップを大切にしていくことが、新しい関わりを身につけていくこと、新たなかかわりを開いていくことになるだろうという話をしました。授業は、この後学生とのやりとりということを期待して進みました。

11:51 2、3人で話す

——ここで話し合うよう促しますが、全体に動きがなかったので、質問を促しました。

11:55

「こんな図式通りにいくのか？というような質問はありませんか？では最後に一言。

『『学ぶ』とは変貌すること。』

12:00

「思いがけないキヨシさんを見たような気がする（星野）」

12:01 ジャーナル記入

——ジャーナルを書き終わった人から提出して終わるのは他の授業とあまり変わりません。

概要プリントに戻ります。

「基礎概念の予備的な検討……コトバをめぐって」のところから先へ話を進めたいと思います。私は哲学を勉強してきました、コトバを大切にしたいという思いが強いので、コトバを検討してゆくという方法で進めたいと思います。ここでは、「教える」と「学ぶ」、「体験」と「経験」、「かかわる」、「まなぶ」を取り上げてみます。

(1) まず一つ目は、《教えるひと》と《学ぶひと》というコトバです。教育とか学習とか言ったとき、何気なく使っているコトバです。あるいは教師である、学生であるというコトバも。教育、教えるといった人と、学ぶ人との関係は、人関の中では、よくイメージされることですが、人間関係科のスタッフは教える人というよりも、ファシリテーター、助言者であると。学生自身の学びを促進するという意味でファシリテーターと言われます。確かに、教える・学ぶというと、教える者が学ぶものに対して、上から知識のようなもの、理論のようなものを、ゴソッと埋め込む。答えを知っているのは教師で、学生はそ

れを探りあてる。これは学生自身も人関に入ってきたときには、強く思っている教育観であり学習観であるわけです。それを学生自身が自分が学ぶという主体性を持った学習の場にしようと努力しているわけですが、教えるということが、逆の意味で上下関係で捉えられ過ぎているのではないかという思いが少しあります。もともとのコトバの意味からすると、漢字的な意味からすると教務学務、これは対の概念でありまして、学ぶものがなければ教えるという関係性を持ったものもない関係概念なんですね。それも大事で、我々スタッフは教えるという役割の中で何をすべきかということ、学生との関係の中でいつも自戒していかなければいけないと思っています。

(2) 基礎的なことで「体験から学ぶ」ということで、体験というコトバと経験というコトバ、先ほども出しましたが、森有正が「経験を大事にしていこう」という哲学を述べていますが。一般的にこのコトバの意味を見ますと、日本語では経験と体験とといいますけども、西洋語の系統、ラテン系の言葉では、例えば英語では、Experience というのは体験も経験も区別がないわけです。日本語ではこの二つは何かニュアンスが違う。一般的な意味合いでは、体験とは具体的で、一回的な、人関でよく言う「今ここ」、が非常に強く特徴的だと思います。また体験というのは、非反省的。知的な整理というのでしょうか、固くは理論化するか知的に理解するかということを取りあえずは含み込まない、非反省的であるということが特徴だと思います。それから、体験とは、日本語では「体」というのが含まれますように身体の中にうごめく様々なもの。とりあえずパトス的な情意性、それから全体的な身体性を強く含んでいます。それはまさに体験は体験するものというのが、一つの身体の中で行われるわけですから、個人の自己中心性の契機を強くはらんでいると思います。それに対して、経験とは、体験—先ほども言いましたが、ある種の主体性であるとともに主観性を強く帯びたものに対しては、体験そのものはその様な主観性を持つが故の偏狭さを常に消極面として持っているわけです。それを打破していく、それを乗り越えていくという知が持っている反省的な契機、自覚的な契機を含んで、経験というのは使われる、そういう意味合いで私は使いたいということですが。そこに、共同性というか、他者とあること、ともに働いたり、考えたり、話し合ったり、そうした共同化の契機が胎動していこうと思われる。そうした反省的・自覚的契機を現実化して行くには、体験という一回性を持ったものを読みとっていく行為、ディルタイの言葉で言うところのふやして、了解という用語が哲学では使われますが、日本語では、わかるということ。学習の中でわかるという契機が、自分の中で分かることが学習者にとって必要になっていくのだと思う。なぜドイツ語を使うかということ、西洋語、ゲルマン系の言葉ですが、ドイツ語には、日本語の体験と経験に類するコトバの使い分けがあります。体験には Erleben、経験には Erfahren。ディルタイの Lebensphilosophie という「生の哲学」と訳されますが、leben とは、一人ひとりのわれが生きて

いるいのちそのものです。その中で、ディルタイは、その体験ていうのは Erleben といいます。体験とは人間の主体的な働きそのものであり、生と世界とが会おう根源的な場であると規定して、彼は哲学を展開したわけです。生の主体である私と世界とが会おうということを用意してくれるのは、体験だと思えます。その出会いによって体験とは、これは私の言葉ですが、既に知っている既知の、あるいは既にあるの既存の枠組みを突破していく行為になりうる。そういう含み、意味合いをもっている。それが体験を重視することの大切な側面ではないかと思っています。

(3)「かかわる」という言葉ですが、かかわるというのを拘束の拘を使いました。関を使ったり、係を使ったり、いくつかありますが。拘を使うことは滅多にないのですが、わざわざ使いました。学生とのつきあいの中で強く感じるのですが、人間関係科だから、人間関係に関心があって来るのかなあと思うと、新しい人や知らない人、ある一定の、仲間ができないうちはいいんですが、仲間ができてしまうと、それとは違った人へのかかわりを作っていく、つながっていくということに対して、異常なる恐れとか不安とか嫌悪感を強く感じます。僕自身にも多分にあると思うのですが、学生の現実の人間関係や友人関係がよく見えないからかも知れませんが、それが非常に強く授業の場で感じることで、日本語のかかわるという言葉のニュアンスですが、拘束の拘は、ひっかかる、ひっかけられる。自分が否応もなくそこにおかれてしまっている、逃げようもないという。これは「かかりあう」というような表現でも出てきます。どうやれば、学生の課題であると同時に、我々人間みんなの課題ですが、自分自身からかかわりを開いていくことはいかにして可能なのだろうか。大きな課題でなるし、人間関係科の大きな課題の糸口というか、そのための理論も開発することが必要なだろうとも思います。ちなみに、この「かかわり」とは、自ら関わりを開いていく、関と開を使いましたが、関という字は両開き門ですね。それを関所と言うように、閉じる、閉の状態ですね。かんけいとはまさに拘であり関であるという中国から学んだニュアンスもありますが、日本語そのものが、かかはる、ですね。それ自体がかかわりが、プラスのイメージよりも、マイナスのイメージを言葉として非常に重たく持っている言語だなあと、意識的ではないが、いかにプラスのイメージばかりを言っても、我々が日本語という言語を使っていく以上、そこに対して自分がどんな態度をとるのか、自覚化していく必要がある。

(4)「まなぶ」というのは、日本語語源的には確定したものではありませんが、一般的には、まねるということから来ているだろうと、一般的な推測できます。誰かの何かの真似。発達心理学の話を書きましても、乳児期に母親とのかかわりの中で、人間としての振る舞い、自分にとって初めての他者との関係を学んでいくと言われていますけども、ことの正否は分からないところはありますが、第一の他者のまねをしていく。それは社会化の課程が進んでいく

中で、それが友人になったり、親兄弟であったり、身近な大人であったり、学校の教師であったり、その様なまねるといことの中で社会化が行われていくという風に思います。その中で、日本語でいうしつけという学び方は、日本語の中で学ぶという一つ原型的な形を示していると思われます。柳田国男も民族学的に指摘している点です。しつけは、特定の人に教えるというよりも、一緒にいて、見習う、見て習うことによって、学習者自身が見よう見まねで、習熟し、身につけていく。しつけというのは身を美しくいう、後の時代に付けられた日本独特の言葉ですが、こういう漢語はありません。そのように日本人がとらえていったということは、恒常的に常に、学ぶということが単なる偶発的な一回限りのことではなく、恒常的に習慣化され、身の中に既成が生まれて、ああいうことに対して、こういうふうに、という流れが自然になるようにそこまで訓練していくわけです。そして恒常性とは、学ぶと言うことの中では非常に大きな要素だと思います。そうやってしつけていくことの大事さは、日本の場合には、人に笑われないということ。これも柳田邦男が指摘していることですが。大事な方法論は、いわゆる村の中で、叱るという行為よりも、笑うという行為によって、「お前の行為はそれは人並みの行為じゃない」、普通じゃない。という仕方で指摘を受ける。いかに他人と違わないこと、他人から笑われないこと、恥ずかしくないことをする。これがしつけ方の学習というか教育方法というか、大きな特徴です。日本の文化の中で行われてきた学習方法だと思えます。ただしその中で、行動、その人自身がどういう風な変化を…というのは、身につけるとい側面における行動の仕方が変わっていくことは、学びの大事な要素だとい指摘の中で、学ぶということがどうしたらその人の行動の変容にまで至っていくのか、その方法を検討することは大事なことだと思われます。

だいたい1時間ですよ。

中村：そろそろ50分。



中野：3番目の題目ですが、「《出会い》と《関わり》と《学び》はどのようにつながってゆくか？…小講義より」。先ほど少し事例を入れながら話しましたが、基本的には学ぶといのは何かそこに変化があるといこと。これは「コトバの予備的検討」で言いませんでしたけども、変化といのは広い意味で何かが変わることで、様相が変化するとい言い方もありますが。変貌とい、けものへんに兎とい非常に強いコトバを使いましたのは、インパクトのあるコトバを使いたかったとい思惑もありますが、その下にある「体験～出会い…2種類の出会い」を見ていただけますか？出会いとは、様々な偶然的な要素によって出来事として起こります。我々はいろいろなものに出会います。その中で、それっきりでフッと忘れてしまったり、無視したり、出会いとは、ここでは一般的に出くわすことですよ。エンカウンター。何かとでくわす。一番広い意味でまず考えていただいたとして、何かを体験する場面の中で何かと出

会う。そのときに、仮に出会いA、出会いBと名前を付けたとします。出会いAとは、それまでの既存の自分自身がイメージできる枠組み、処理できる、わかる。例えば人と出くわして「これは人だ」とわかる。極端ですが。つまりこれは何？というのが大抵分かる。自分がそれに対してどうしたらいいか、これは、相手が動物とであってもいいですし、車や動くものだったら。それが自分の所にドーンとぶつかってきたら、危険だと。危険だという判断も、既知の枠組みの中でこれは危険か危険でないか、判断尺度を成長の過程の中で獲得していった、その枠組みで判断してしまう。全く初めてものと出会ってもそれは…我々の一つの関心は生命を維持することですから、生命に危険があるかどうか、もう少し言えば生命を促進するような、良いものかどうか？よいものならこれともっとつきあってみようか、そうするともっと楽しくなる、生き生きしてくる、欲求も満足できる。そういった善悪の判断というのは基本的にはある。既知の枠組みの中で、大半のものが行われています。出会いにおいてもその様なものだと思います。

この辺が穴なんです…知識とか、記憶の量が拡大していく。新しいもの、初めて出た人の名前とか、そういう知識とか記憶とか、尺度が変わるというより量が拡大していくということで。コンピュータの処理と似たような、情報的な知識としてそれはもちろんコミュニケーションできますが、伝達可能なんです、情報処理型のそうしたものに受け継がれていくような。「出会い〜かかわり」。なにか学んだいっても、そういう流れで今仮に概略情報処理型と書きましたが、これはある種の大きな枠組みの中で個々の細かい要素とかニュアンスがよく分かっていない点を分析的に判断して何事か分かっていく、知っていくというような分析的な判断。これはカントの用語法をそのまま使ったコトバですので適切ではないかも知れませんが分かりやすいかなと思って。で、これは基本的には同質的なものですね。既知の枠組みの判断で処理できる。量的な変化。それを常に比較したり、同定したり、対比したり、そうした比較対比の中で、あれはこう、これはこうと随時確認していくような判断につながっていくのではなからうかと思えます。

それに対して出会いBと書きました。私はこちらの方を事例として話しました。出会うといっても異質なもの、すなわち他者、自分と絶対的に違う他者と出会うということ。それが本当にあり得るのだろうかというのは哲学者の間でも意見が分かれるかも知れませんが。まさにそうした他者と出会うこと、自分とは徹底的に違う生命と出会いかわりの場にはいると、そのようなことです。それは自分自身が持っていた尺度の枠組みで解釈できないので危機的なことである。既存の枠組みが揺らいでいく。時にはそれは壊される、まさに解体される。解体されることによって再構築されていくという契機、チャンスの時でもあるわけです。それは、簡単に言えば発見という言葉が使えます。それは人間の生命活動とか、命が動いていくというか。生が流動して流れている、簡単に

言うと生き生きしている時という風に考えます。堅い言葉で書くと、知識の質的転換・行動変容を促す発見的な生の展開、契機。「思いもかけないこと」という原論での授業の話の冒頭でも言いましたが、それはこのことなんです。偶然的。自分がそれを計算できないとか、計画できない。そのような何ものかと出会って、思いもかけないことが、ひとつの学びという恒常的な変化にどうやって結びつくのか。偶然がある種の、必然に、穴風に言うと、偶然が必然にどうしてなるのか？誰だって不思議に思うことですが、それに近いようなことです。で、その下の「出会い〜かかわりの変化」というのは、まさにそのような、何事かが偶然との出会いの中での偶発です。それが、自分の中での変化として起こってくる中で、世界との関係性が、…風の事例で話したことです。そういうかかわりの変化、世界とのかかわりの変化。そして、また妻との関係の事例で言うと、まさに人とのかかわり。そういう様々な局面で現れます。それが、学びというある種の恒常的な変化、身に付いた変化まで至っていく、まさに変貌、質が転換する。顔つきまで変わっていく、そのイメージで変貌という言葉を使いましたが、それを自覚化して、主体化していく必要があるだろうと。そしてそれを絶えずあるきっかけで起こった変化、それが体験の状況ですけれども。それを継続性あらしめる。それを行動化していくという持続の中で、この辺の仕掛けは僕もよく分かりませんが、そういうことの必要性があるとおもいます。

おわりに、一番始めに言いました、人間関係科でよく言われている、「体験から学ぶ」「学び方を学ぶ」ということは、皆さんにとってはどういうことなのでしょう。話を終わります。

中村：それでは再開していきましょう。質疑応答、ご意見など。

山口：全体として話が分かりやすかったんですが、一部分からないところもありました。その話から刺激されていろいろ考えたこともあります。中野先生とは原論と一緒にやったこともあるので、全体としては受け入れやすかったです。最初の方の「初めに」の部分。今期のねらいの2、自分をいかす相手をいかす。共同の場をどうしたらつくれるか？という話がありましたが、これは私たちが原論をやった時も大きなテーマだったもので、これを聞いたときに、このパラドックスを超えていくためには時間軸が必要だと思った。そのことは後の方で変わるという風なことで話をされていたので、同じことだなあという風に思っていました。時間の軸が入って自分が変わり、相手が変わることが起これば、自分も生き、相手も生きるといった場が生まれるということが起こるのだろう。同時に二つのその場では全ては生まれない、そんなことを思いました。

もう少し後の話では、関わること、拘るとか、おそれのことが出てきたときに思ったのは人間がすることにはリズムがあるんだろう。恐れを感じる時もあるだろうし勇気を感じる時もある。安定と不安定がある。生の律動、リズム



ムのようなものがあって、かかわることに対する恐れが生まれてくることもきつとあるのだろうと思う。またあるときには勇気を持つという風な、生きるもののリズムもかかわるということを考えるときには考えなくてはいけないのだろうなと思いました。もうひとつ、かかわるという時には、私たちは一対一の出来事を考えるけども、授業などの時は一対多の出来事、そういう授業やグループの時、一対多、一対一のできごとは、そういう観点から関わるということを考えて一体どうなるのかなと思いました。一対多のかかわりは可能なのかなあとか。あるいはそれがないと、共同体って一体なんなのかなあと、そのことから少し考えました。

3つ目のパラグラフのところで、体験から2種の出会いとい時は違うものというか、別のことを考えました。出会いA、Bはおかしいのではないかと思います。同質なものと出会うという時の同質って一体何なんだろうと思ったんですね。最初、原初はあらゆるものがきつと異質なものなんじゃないかと思うんです。あらかじめ同質なものと出会うといったことは変な感じがするということと、同質の中身は何なんだろうといろいろ考えると、そこに思考の枠組みとかいうことが書いてあって、例えば小学生が $1 + 1 = 2$ を学んだ。そして次のページをめくったら $2 + 2 = ?$ と書いてあるのを見たときに、先生はこれを同質だと分かっているんだけど、その子にとっては“これ何だろう”と思う、その異質に出会って、そして前の考え方と同じ方法で解けるというときに、 $2 + 2 = 4$ になることが分かる。それを同質の出会いというならば、そういう風なものなのかなあ？とちょっと思ったんです。最初から同質なものと出会いがあるのじゃなくて、異質なものと出会う。そこに共通する枠組み、尺度とかを発見する出会い方と、もうひとつ異質なものというか自分を変えざるを得ないというかなんていうか受容すると言ってもいいかも知れないけど、もうひとつの出会い方がきつとあって、同質とか異質は後から生まれるんじゃないかなあ。出会うのは、異質なものとしか出会えないんじゃないかなあと思ったんです。もっと考えると、本当に異質なものと私たちは分かることができるんだろうか？とも思った。本当に異質なものって分からないものにきつとなくなってしまって、ある程度自分で予測できる範囲のものとかしか出会えない、そんな限界のようなものを私たちは持っているんじゃないかなあ。自分で了解可能なものとかしか出会わない。本当に異質なものとは出会えようもない、そういうこともあるんじゃないか。そういうことをちらちら思いました。

中野：出会いA、Bに関しては、出会いに関しては異質なのではないかと言うことは、僕のコトバの本質的な位置づけからするとそうなんです。ただ、最近人間が丸くなってきたのか、世間の人がどういう風に「出会う」というコトバを使っているのかを、もう少し広い日常言語としての用例からすると、もう少し広い意味で使っている。ここでA、Bに分けたのは、原初という意味では、山口さんの言うように異質だと思う。「出会う」は学生や我々がよく使うコト

バ。その出会いが、本当の意味で学ぶということ、これはまだクエスチョンなんです。学ぶということにつながっていくような、様相を帯びて了解して使っていくことなのか、そうでないのか？後ろがどうなっているのか、後ろを先に考えていると言えば、確かにそうなんです。だから結果からというならまさにそうなんだろうと、印象に残ったのは、なかなかそういうことですね。それから、異質なものは本当に分かるのか、根本的な問題。人間の限界だと思います。人間は人間の個的な限界を超えることができるのかということとは、いつも、超越的な契機というのは、僕の頭の中に去来する。何か異質なものと出会わせることがあると仮定するならば、それを保証するものは何か。自分の中のどこを探しても、今のところ見いださない。本当の意味での他者と出会う。自分が、自分の中に取り入れて、消化してしまうやり方以外に、…別の言い方をすれば自己中心性に取り込まずに、他者とかかわるということは、可能なのはきちっと考えてないのですが、予感だけですけど。そこにやっぱり神を考える。

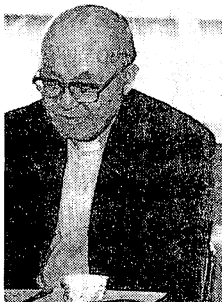
大森：AとBについては私も聞きたい。山口さんが言っただけでも、出会うというのは、僕は自己以外は他者、すべて出会うとすればそれは異質かなと思う。ただ、自己も異質かも知れないし、同じとは言えないかも知れない。中野さんの話を聞いてると、同質異質というのはどうも考え方が同じ枠組みか、そうでないか。Aは分析判断とするなら、Bは分析判断がきかない相手というか、そういう風に言われた方が私にはピンとくるという感じがします。

中野：大森さんは、出会うと言うことは？

大森：あまり考えたことないですけど（笑）。出会ったなというときは、やはり思いもかけぬ、自分のもくろみはずれたたか、壊されたとか。そういうときに出会ったかなと、ああこんな人と会うとは思わなかったとかいうような、そういう時に出会ったかなと思います。自分の思考の枠組みとか、考えが及ぶ範囲のことが起こっても、それほど出会ったかなということをあまり思わない。そういうこともあるかな、と思うくらい。そうでないときに出会ったかなと、そういう印象を持ちました。でも、Aも出会いと言えるのかもしれない。

大橋：一般に出会いということを使うとき、異質なものを前提にしていると思う。また、意外性の発見ということもありますよね。これも出会い。聖書を読んでいて、もう流してしまっていて出会ってるんでしょうけれども…。ただ、ある時ハッと気づく。こういう意味があるのではないか？そして今まで読んできたものが非常に生き生きとして感じてくる。これは出会いといってもいいのではないか。そういう意味で意外性の発見という風に…。あまりにも恒常化されてきた、今まで普通だと思っていたことが壊されてとかひっくり返されて。それも出会いというのかなと。今まで私はそんな風にしか考えたことがなかったので、何か新しい、それこそ意外な発見でしたね。

中野：出会いというのは、授業の流れの中でコトバとして、出していくために使った部分があった。もうひとつ「出会う」ということで大事だといつも思っ



ているのは、触れるということ。触れるって、どこでもあるじゃないですか。学生でも。本当に日常的事なことなんだけど。触れるということの根元的な出来事。それがやっぱり、人との関係の中でとても大事なことだという思いがある。身体に触れることによって、それが脈々と生きる体験もあるだろう。身体ではなくて別の形でとか、コトバが媒介することもあるだろうし。触れるということの方が、出会いというコトバより自分の関心としては強いです。

中村：心理学的にはちょうど入ってくるというか、ピアジェの同化と調節ということに入ってくるなど聞いていました。同質なものと出会うか異質なものと出会うかという対象を問題にしているのではなくて、自分自身の枠組みの同一性異質性を問題にしているんですね。自分自身の枠組みで捉えられないものと出会ったときに、自分の枠組みを変えていかなければならない。そこに自己中心性からの脱却とか、行動の変容とかが生まれてくるという流れだろうかと思っていました。

中野：そういう理論付けの仕方というか、学習心理学とか、そういう形での…いろんな形を僕も聞きたいです。

中村：鳥が飛んでいて、あれが鳥だよと教えられた子どもが、鳥っていうのは空を飛んでいるものだと思っていて、ワシが飛んでいるときにあれも鳥だというときが同化で。初めて飛行機を見てあれも鳥だと思おうとしたんだけど、何かすごい大きな音がして、鳥という常識ではとらえられなくなって、あれは飛行機だよと教えられて、自分の中で違うものなんだなということが分かってきて、そして鳥シマをちょっと変えて飛行機シマというのを作っていく、それが調節なんですけど。あらたな異質な思いがけないものと出会うという際には調節という枠組みが変わっていくということが必要になっていくのかな。これが行動の変容、枠組みの変容なんだろうなと聞いていました。

もうひとつ、出会いBの方の調節的な出会いというか、そういう出会いを考えた時、22期の原論では、キャッチフレーズが「つながる→かかわる→出会う→共にある」という順番でした。出会うが、もっと後に出てくる。

中野：その思うところは？

中村：異質なものと出会った時に思いがけなく出会ったというのではなくて、自分自身の枠組みが変化した時に初めて出会いがあるというか。対象の異質性によって出会うわけではなくて自分の内的な枠組みの変化によって出会うということが生じるのかなあ。そういう意味で後なのかなと。

山口：通常私たちはそんな風に使ってるよね。だけど中野さんは、どうも出会いというコトバでむしろ触れるというコトバに置き換えて、考えているみたいを感じる。もっとシンプルに出会う、触れる、しゃべる、顔を合わせる、名前を覚えるとかも含めて言っているのかなとも思いました。

中野：今の「つながる、かかわる、出会う、共にある」ということで、つながる、かかわるというのは、最初にかかわるというコトバで日本語のニュアンス

として言ったように、やっぱりかかわりというあるつながりの枠という中に、取り込められるニュアンスを持っている。もうひとつ「かかわる」と言ったのは、前のは強いので変な日本語になりますが、かかわりを開くとか、関係性を開くと言うこと、関係性に捉えられている。まさに、つながっているというのは自分がどうこうするというのではない、ある受動的な状態。といった関係イメージが一つあるとするならば、それが日常的に関わるということばが持っている、日本語が元々持っているひとつの大きなイメージとするなら、つながる、かかわる、というのが基本的にあってそれは大前提で持っていて、そこからどうやって、かかわりが開かれていくか、その契機とは何か、そのエネルギー源になっていくようなことは何かということに焦点を絞りながら、出会いBという風に言ったんですけれども。そこが、22期が3番目に会おうということをしたのは、その意味においてはあまり違わないように思う。順番は違いますが。

中村：会おうというコトバを広範囲に考えた時に、25期の場合は、会おうA、かかわりのかかわるは関になるのか係になるのか分かりませんが、で学びという順番で、22期の場合は、つながるの次のかかわるはある意味では拘りも知れないし、その後に出会いBというのを規定している、そういうコトバの使い方の違いがあるのかなと思いました。

中野：今回のこの話の中では、人は基本的には世界とか社会に、すでにある枠組みの中に産み落とされて、そこからどうやって、自分が自分になっていくのかという課程を、何をネタにしながら、自分になる、私という人間になっていくことが起こるのだろうかということで、一番最初が全くのゼロというより、むしろある枠組みということで、今回、出会いとかかかわるということを使ったなど。いろいろ言っていた、確かにそうなんだろうと思います。

まどか：私は中野先生のこういうアプローチのかけ方とか非常に興味深くて、そして今日に関しては、出会いBというある意味では人と価値観で会おうというか。価値観で了解しあうというか。その辺のことをヒントに得たような気がします。先ほど、大森先生や、中村先生がおっしゃっていたように、出会いA Bの区分けというのは、自分の中での考え方か、共同体の中での考え方の枠組みという設定になるか、それは状況次第だと思います。自分の中での枠組みが変わることで、他者を理解することもあり得るし、相手の価値観が見えてきたり、自分自身との価値観の違いが整理できてある程度出会える、あるいは了解し合えるということが起こったり。また共同体といわれる組織としてお互いの言葉遣いの違いが見えてくることでお互いのことが分かり会えてきたりということが起こるかも知れない。それは状況がいろいろあります。私が興味深かったのは、自分がパラダイムシフトという発想法の転換をテーマにしながら、人間関係科のめざす学び方、学問性の新しさをとらえているので、出会いBのことをもう少し発展させて、展開していくと、人間関係科での学び方で大事にし



ている awareness の問題、気づくということ、どうして気づくということが学なのか、どうして人間関係科の学び方の新しさにつながるのかが整理できるような気がして聞いていました。演題は「もう一つの人間関係科論」という風に遠慮がちにおっしゃったようですが、もうひとつの人間関係科論というか、人間関係科の新しさというのは出会いBのところで、出会いBがこの21番教室で展開されていくこと自体が、人間関係科の生命圏というかそんな気がします。

最後の方の、出会いからかかわりの変化、かかわりから学びというところは、いわゆる私たち自身はかかわりシステムをどう形成していくかがテーマになると思うのですが、かかわりということをもっと大事にしながらの価値というか、教育システムとか学校制度とかどうやって作っていったらいいんだろうかというようなことが、私自身は課題として感じました。印象で、説明ができないのですが、自覚化・主体化の必要とか継続性・実行性の必要、これは時間軸も入っている言葉だと思いますが、それは自分、自ら、自己意識とか、そういうことが必要を育てていく、結局自覚化とか継続性とか自己意識の中で守られていく、守りやすいのかなあ。中野先生にだけ言っている様な話ですが…。

あと質問ですが、「コトバをめぐる」というところでカタカナでコトバと書いているのはどうしてですか？

中野：ものとか、人とかを、中立的な記号化するときの書き方をするときと同じです。どうも漢字で書きたくなかった。ひらがなで書くとひらがなばかりで、わかりにくいので、というそれだけです。深い意味はありません。

楠本：かかわり～学びのところで、自覚化・主体化の必要、継続性・実行性の必要とありますが、こういう部分が必要でない学びというものもあるのではないかという気がしています。と言うのは、出会いBのような出会いをして、そこでもう変貌が起きるわけですね。質的変換が起きると言うことは、新しい主体がその時点で生まれているということだから、それを主体化する必要があるんだろうかという疑問があります。あまりにもアバウトな、論理的にあまり考えられないので…。実感的に言うと、質的な変質がいつもいつも起こるのではなくて、例えばTグループの中でとか、あるいは生きていく中で本当に何十年に1回の出会いなのかもしれない。改めて、主体化をする必要もない。改めて自覚化、化というようなそれを意識的にする必要もないような、それこそ変貌・変容と言われるような出会い方があるんじゃないのかな。そういう学び方があるんじゃないかなと思う。ただ日頃の授業の中で、そんなようなことはいつも起きないし、それを目指すことはとても危険なことだと思うのですが、意識的な主体化、意識的な自覚化、継続性、実行性というものが不要な質的な変化も有り得るんじゃないかなと思いました。

中野：そう言われればそうかなあと思うんですが。ちょっとその問題で考えたのは、習慣。ハビッツ。うまくまとめきれないです。ハビッツということが、人間が学ぶということの中で、どういうふうに位置づけるのかなあとい





う問題につながっているなあと聞きながら思っていて、まだ答が見つからない…。

伊藤：まどかさんが言われたことと楠本さんが言われたことと、私が思っていたこととつながってきそうな気がしたので発言します。出会いが起こるための素地とは一体何なのかな、あるいは人間関係科での教育は、今楠本さんがTグループの中で出会いが起きると。だけどそれが、またいつも起こることを私たちは期待していないこともあります、そこで一回起こると。だけでももう起こらなくてもいいかということ、そんなことはなくて、あるひとつの、出会いのための素地ができてくる。そういうことって、どこにあるのだろうか。意識化していくことなのかも知れないし、出会いが起こるための素地とか、起こったときの気づきとか、それらをどんな風に考えたらいいのかなと考えながら聞いていました。ありますよね、同じ体験でもちょっと意識を持って見ると全然ものが見えてくるというのでしょうか。出会いでもおそらくすーっと過ぎてしまわないでそれがパッと出会いになっていくような何か。それって、いったい何なのかなって。あまり哲学的なところはよく分からないのですが…。すごく大事なことだろうなと思いながら、出会い・かかわり・学びのどこの辺にくるのかなと思いながら聞いていました。疑問を出してるだけですが…どんな風に思われますか？

中野：こちらも聞きたいですね。出会いのための素地。うーん。

伊藤：授業の中で、これだ、という出会いの体験ができる人とできない人がいますよね。でも授業の中において、ああいうこともあるのかなと何となく分かっていて、でもその人が卒業して何年かしたある時に、パッと、電気がついたようにこれがあのときのこれなんだと、出会いが分かっていくというようなことがあってもいいのではないかなという気がしています。

グラバア：いただいたもので考えてみた。最初に出会いA、Bという話があったけど、その後に出会い、かかわりが書かれていて。私たちにできることは、関わることで、関わるということは自分の意志でできることだけれども、出会うことは自分の意志ではできないこと。先に言ってらっしゃるAとは、既存の思考の枠組み、尺度の中での出来事という面を取り出すと、こうやって言われていることが関わること、わたしができることというようなつながりがあって。そうすると、人事を尽くして天命を待つといいますが、関わりと出会いというのは私の中でそういうところがあって。素地の話もあったんですけど、私ができることとは人事を尽くすことであって、それは既存のそれのできる枠組みの中でしかできないんですが、それをやった時尽くされた時に、天命が、ヒラヒラと落ちてくるというようなことを考えたんですね。そういう見方の方が私の中にはフィットするなあと考えています。それでももう少し戻りますが、体験と経験の話があるんですけど、体験と経験というのはどういう関係にあるのか。やっぱり体験を越えて経験に至らねばという構図なののでしょうか？

中野：越えるわけではない。ここで使っている言葉の概念とは少し違うと思

ますけれども、体験の持っているある種の1回性、そういうものが事実化していく、そういう意味合いで捉えているところがある。経験は基本的に、人との関わりも含めて世界との関わりの中で、自己の中に内在化して、蓄積化されていく、それが自分の中で、自分も知らないんですけども、それが様々な形でごめいて、発酵していく、その中でそれがいかに、自分の経験として、コトバとして、提議する。自分のコトバとして提議する。自分のコトバでつかんでいく。それが経験ということ。彼は哲学者だから思想化したりするんですが、別に田舎のお百姓さんが野菜を作ったり、芸術家や職人が作品を作っていることも、彼は例に使っている。

グラバア：経が積み重なる、ことをイメージできます。そういう風に考えると、体験学習を考えているのだけど、この説明を見ると、体験学習のステップがありますよね。経験して、指摘して、分析、仮説化して…

中野：E I A Hのことですね。



グラバア：ええ。それが回っていくことと、それを重ね合わせて考えていくと、ある意味で、自覚的契機を含むと書いてありますよね。そうすると話が飛ぶんですが、体験学習の中で、分析や仮説化が弱いとよく言われるじゃないですか。十分に理論化できないとか。それが弱さと言われるのだけれども。この概念を当てはめていくと、E I A HのEの部分が体験にあたって、そのI A Hが経験にあたる。自己中心の契機が共同化への契機に熟していくということも含めて、そういう風に体験学習とこの話が私の中でつながる部分なんです。でさっきの話にまた戻ると、そういうことを言うてくると、体験の部分は関わり部分とつながるんです、さっきの構造から言うと。だから関わりはできる。体験Eの部分を提供することはできる。やることはできる。ところが、飛躍しているかもしれないけど、出会うということを考えていくと、出会うということが経験の部分と私の中で重なる。そうなると、人事を尽くして天命を待つことにもつながるけど。体験学習はE I A Hなんけれども、I A Hが足りないと言われるけど、できるところというのは体験しかないのではないだろうか。教育的な営みの場で、対象とできるところというのは体験しかないのではないかと。今ここ、1回性という…。今ここと言われていることは、ここで言われている体験ということだろうと思うし。体験学習、E I A Hと言ってきたけど、本当にそうなんだろうかなと思った。極端に、Eしかないんじゃないかと。話がわかりにくいですか？

中村：今の話の中で、結局教育的な場を作るということはEしかできないんじゃないかということと、それから中野先生の言わんとするEの後の自覚化・主体化の必要性という様なところ。論点ともなりうるのかなとも思いながら聞いていましたが。

グラバア：私たちの視野の中に、時間的な視野、基本的に体験学習をE I A Hの過程と言ってしまうと、Iの部分は私もまだ整理がつかないですけども、A

Hもある意味私たちができるとか、私たちが援助できるとか、いろんな理論をもっと提供しなければいけないという、どうしても発想が足りないという思いとか、いわゆる構造上生じてくるし、あると思うのだけど、もっと開き直るとするか、逆にもっと発酵させる時間を保証することが私たちに大事なのではないかと発想。もうひとつは、体験が経験へと熟していく、そのプロセスはいったい何なのだろうか。素地と伊藤先生がおっしゃったそれがいったい何なのか。それを新たにもう少しE I A Hの過程から見ていって、結晶化していかないといけないのかなと考えました。

山口：グラバアさんのいうこともよく分かっているつもりです。最近よくTグループをやりながら、E I A Hだけではないですよと言っている。学習のモデルがあれだけでは不十分だと感じている部分が自分でもはっきりしています。中野さんが最初に立てた問い、体験から学ぶ体験重視の主眼は何かということと、学び方を学ぶとは何か、という二つの問いからスタートして、最後にあなたは どう思いますか？という問いかけなんだろうと思いますけれども。それに関して、今この間にたくさん考えました。グラバアさんの話にもつながっていると思う。体験と経験の違いというのは、ここに書かれているのでよいんじゃないかなと思っています。ただ、体験を経験化すればそれで済むかというか、経験というのは何かあるのではなくて、経験化過程のようなもの、これはE I A Hという指摘・分析・仮説化の部分は経験化過程になるなあという風と思うんですけども。それでは体験、本当は私たちが生きるということは常に体験のただ中にあるんだろうと思うけれど、それしかないはずなのに、E I A Hを通ると経験化していくといったところにひとつの問題があるなあということも思っているんです。本当は体験の中に生きなければならないはずなのに、経験の中に生きてるとすると私はそれは間違いを起こすような気がする。Tグループが存在するのはそこに意味があるのかなと思ったんです。体験を体験できなくさせているのは、経験であって、Tグループは何をしてるかといったら、経験化をしているんじゃないかと、経験化してしまったものを体験に戻そうとしている感じがする。そこが僕が前からおかしいおかしい、このE I A Hはおかしいと思っていたところで、すごくつながってるんじゃないかと思うんですが。私たちは学び方を学ぶといったときに、E I A Hの問題だけを取り上げてるけれども、もう一度体験化過程といったものをきちんと言語化していくことができないといけないのではないかなと思っています。体験から学ぶといった時には、絶えず体験することを体験できるようになることを学ぶということ。体験からある原理なりを仮説的に導き出すという経験化することという、ふたつが体験から学ぶといったときに重要で、どちらかだけではなく両方をやらなくてはきっと体験から学ぶということはできないんだろうなあということを考えました。それから、学び方を学ぶという、つながってくるんですが、もう一つ考えたのは、先ほどの出会いA Bのことですが、やっぱり出会いBしかないと思うんで

す。それにむしろはっきりさせた方が…。もともと中野先生はそう言ってたわけだし、それをきちんとさせた方がいいなあと思ったので言うんですが。どうもこんな像が浮かんだんです。同心円ですが。中心に同質。その周りに、異質という層があって、さらにその外側に、無質という層があるように思えるんです。私たちが出会うとか学ぶと言ったときには、この異質の層と触れること、あるいは異質の層にもものを持ち込むことなんだろう。例えば無質は自分の全くアウト・オブ眼中にあるものを自分の眼中に入れてくる。これは異質と出会うことだろうと思う。それから自分の中にあるもの、自分で当たり前だと思ったものが、あれ？自分の中にも変なものがある、と言う風にして異質の層に持ち出すこと。そういった異質の層にもものを持ち込んできて異質と出会う、あるいは異質と触れることが、学ぶとうことかなあと思うと、学び方というのは、異質の層に無質の相から、いろんな、別の人の気持ちだとか考え方だとか起こってる出来事だとかを、自分で異質の層に持ち込むこと。それから自分の中の当たり前と思っていた何も感じなかった部分を異質の層に持ち出して、あれ？と思うこととかが、学び方を学ぶ時の非常に重要なものかなあ。これはまさに体験することなんだろうと思う。経験の上からは、あの人はこんな人とか、自分はこんなものか思っていたものを、まさに生々しく1回限りのものとして体験するというのは、その異質層に持ち込むことなのかなと思ったんです。そして、異質層が大きくなればなるほど、異質の中に生きようになることが、世間でいう大人になること、成長することという風に考えていくと、当然無質層、アウト・オブ眼中が自分の眼中に入ってくることで、これが無限に広がっていくと世界、宇宙を見ることができるようになったらいいでしょう。逆に自分の中を見ていくと、自分の中を分解していくことが起こるんだろうと思う。言ってみると、アイデンティティと思われていくものをどんどん崩壊させていくこと。できるだけ少数のものをもってこれが私であると言えるようになるということ。そのことが私たちが成長するといったことなのかなと。あらゆる自分、全て私と思っていたものが、だんだん分化していく、分かるということかも知れないけれども、そして異質層にどんどん持ち出していく。自分もどんどん分解して異質なものを外に出していくとか、自分と出会うということをしていく。言ってみると、自分のアイデンティティの拠り所となるものをどんどん小さくして行って、たったひとつの、あるいはそれはゼロになるのかも分からないけれど、そういうプロセスが私たちが成長するってということなのかな、なんてことを中野先生のお話を聞きながらつらつらと考えていました。中野先生の最初の問いに対する私の答です。

中野：おもしろい。

大森：ちょっといいですか？森有正の考えに沿って体験と経験ということを行うとするならば、例えばこういう風なことを考えてみたらいいと思いますが、平和問題とか。日本は戦争体験をしています。1945年に原爆が落ちて敗



戦したと。そういう経験をしたときに、どうするか。戦争しないようにしようとか、核兵器を持たないようにしようとしたと仮に思ったなら、この50年の間に、それを抑止するためにはどうしたらいいかという知恵を皆が出したり、同意したり、どうしたらそうしないで済むか、工夫してつくっていくことができたかどうか、できている、またはつくろうとしているんだったら、それは経験になるわけです。ところが実際それができていないから、体験のしっぱなし。戦争の体験しかしてない。でも、経験というんだったら、それを何とかもったいい方向に持っていくために、日本人がいろいろな努力をするとか、働きかけをする。日本の国民自体も一人ひとりがそういう意識を持ってやるような教育をするとか、そういうことが出来上がってくるのを経験といっていると思います。だからそれがどうだったかということだけを単に人に伝えたりすることだけではなくて、体験したことが生活の中で生きていく自分の支えとか、それが何かの形で出てくることを指しているんだらうと思います。

グラバア：そういう意味では、意味を見い出して自分の生き方の方向性を指し示すとなった時に経験化されるということですね。

山口：それはE I A Hと同じじゃないかなあ。非常に大きなマクロにとらえた社会現象のまで敷衍したE I A Hの考え方。

グラバア：重なっているけれども、問題は学習方法論として何ができるかと言うときに…。そう説明していくと、同じことになっていってしまう。うーん。

中村：一つ面白いポイントがあるなと思った。山口先生にはあまりにも待たせすぎてしまって一気に話がわあっと出ましたので(笑)、どこに焦点をあてたらいいのかよく分からないんですが(笑)。話の中で、経験ではなくて体験としてその場に生きることが非常に重要であろうと、ある意味で客観化した知とか、客観的、冷静的な自己像他者像は危惧になる場合もあるというところ、おもしろいポイントだと思いました。今ここで非常に主体的に生きることの重視と、そうではなく非常に客観的に知として自覚化しながら生きる生き方。E I A Hはそれを重視していますよね。Tグループの中では、体験レベルで生きていくことが中心になるだろうし、そうしたところで生きられると思う。それが非常に危惧になるときがある。今ここしか見えなくなるということがあるというか。両方のバランスみたいなことを感じながら聞いていました。

山口：両方言ったつもり。ふたつを学ばなければいけない。

中野：経験化の過程と体験化の過程というそのふたつが常に生きて動きながら体験から学ぶという風に我々はとらえようとしているんじゃないだろうか。

グラバア：体験がどのように経験化していくのはすごく大事なポイントなんだけれども、さっきのように、「E I A Hのプロセスだよ」とおっしゃってたしかにそうなんだけれども、そういうとらえ方をしていくと結局、元の、そうやって分析するのか方法を教えろとか、いろんな理論があるよとかいうことをもっと勉強しなければいけないのかなというところへ戻って行ってしまふんじや

ないかと…。

山口：あれ、何か誤解されてる？それは大森先生が言われた戦争体験とその後の平和活動について言うと、E I A Hのプロセスでもってそこで言ってる経験を説明できるけれど、逆に経験を体験化していくモデルがないということをお願いしていたつもりで、それをつくらなければいけないと感じていますと。

グラバア：経験を体験化というよりは、私が言いたいのは、体験を体験化する。本当に体験をしていくということ、体験を本当に体験していければ。体験が本当に体験できないから経験にならない。さっきの言い方だと、体験を十分に経験化できなかったから平和問題が何も生み出せなかったという論旨だと思うんですよ。構造が。ここで言おうとしているのはそうでなくて、体験を本当に体験していくということをすれば、そのことによって経験化することが大事だと。

山口：体験が体験化する学習モデルが必要と。それは私もそう思っています。

大森：ただ、森有正の場合は違うんです。体験と経験とははっきり分けてある。体験というのは、我々が使っている体験じゃないんです。それを体験を体験すると言うと、もうわけが分からなくなっちゃうんです。森有正はおいておいてこの話は進めた方がいいと思います。

中野：そうなんです。僕も森有正の用語法を使おうとしたわけではなくて。体験という言葉は、我々も無造作に使っているわけですが、例えば「体験学習」とか。そうすると何となく分かった気になるし、学生も分かった気になるんだけど。体験するって一体どういうことなんだろうか？本当に、経験科学も含めて、経験というのはかなり無造作に、日本中で、学問の世界でも使われています。人間関係科は体験学習を柱にしていくという限りは、我々自身の中で、もう少し我々自身のコンセプトとしての、体験すること、学ぶということはどういう関係にあるのかをもっともっとつめて検討していかないといけないと思います。

山口：体験と経験の説明は、私はこれでよく分かりますと思います。

中村：人関スタッフがあまりにもしゃべるのでしゃべれなかったという方もいるかと思いますが。もし何か言いたいことがあればどうぞ。

津村：討論というよりも山口先生が言われた、異質のこともおもしろいと思うし。僕はそこがカギだなあと思う。そこに気づくとか、見えてくるものとか、他者が分かるかというの、やっぱり違うから見えるので、やっぱりそこがキーワードになるなと思いました。非常に重要になるだろうなと。その同心円はおもしろいし、少なくとも異質層にどう持ち込むかということ、見えてくるということ、すべてそこだろうという感じがします。もうひとつ、山口さんが言った経験を体験化するという、これはおもしろいモデルだけでも、そういうことって何なんだろうと。体験から経験、それは筋道として分かるし今までやってきた道というか、見えてくるものとかそれを振り返っていくとか、客観視していくという意味があると思う。経験を体験化するといったときに、

それは何をやってしまうのか？

山口：経験を体験化するというより、僕は絶えず体験し続けることという風に言った方がいいと思う。それを妨げているのが経験だと言いたい。絶えず体験のただ中におり続けることを学ばなければいけないということと、体験していることを経験化することも学ばなければならない。そのふたつが体験学習から学ぶことであり、学び方というのはその二つの方法を学ばなければいけないと思う。体験を経験化する方に関しては、E I A Hのモデルがすでにある。これは経験科学の方法としてずっと昔からあるものを形式化しただけだし、僕は基本的に森有正も変わってないと思う。むしろ体験を体験し続けるための学習モデルがない、そこが私のポイント。

大森：それは、森有正はそうだよ。体験を体験し続けるためのモデル。

山口：じゃ、どのようなものがあるのかをもう少し次の研究会でお話をさせていただくと。

大森：むしろ、今言っているのは、経験化してしまったことを砕くというか壊していくということだと思う。

山口：それには方法論があるというわけ？

大森：方法論と言うのは読んだことがないけど。

山口：ただのドグマの様なものはいけないと思う。むしろ私たちは学習モデルとしてのステップを作らないと、E I A Hに対抗できない。僕はおかしいと思っているんだけど、それに対抗することができない。

大森：そういう風には考えていないからね。学習的にどうするかというよりもむしろ、生き方の問題として提示してるから。

津村：体験をし続けているといっても、そこに、人関の言葉で言うと、プロセスというのがあるね。何が起きているかとか言い出すと、戻っちゃうよね。

山口：そうだよね、うんうん。

津村：で、体験を体験し続けてるかどうか、何の自覚症状もなく今生きてます、というのではいかんわけでしょ。そうすると、何かわからない…。

山口：それはTグループの中で私たちは体験しない？本当に体験が進行しているところ。そうではないときに知性化されていたり、本当にそこに人がいて体験のただ中にいるときというのが分かってるというか。それは分かっているなければファシリテーションなんてできない。だからグループの中において、トレーナーをやれている、見えてるんだと思うんだけど、それがよく分からないんだよね。どのようにしてそれが進むのか。Tグループをやりながら、E I A Hのモデルではないということは分かってるんだけど、そこが分からない。

津村：体験してるということ自体、やっぱり僕はそこに戻ってしまうんだよね。見えることというか、自分の中に思わぬものが出てきたり、まさに体験。

山口：その時に体験が起こるわけだ。異質性に入ったときにきっと出会いがあって、体験されるんだと思う。自分が体験して何かものをもらう、そのことか



な。

津村：そう。

山口：持ち込む方法と言ってもいいのかも知れない。

津村：今の、少し戻します。単純な体験を経験化するとかいうことではないと。経験を体験化するということでもないみたいな気がする、というところで止めようかな。

山口：フィードバックとか何かだったら、またことと同じになってしまうかな。

中村：ひとつの論点が見えつつあるところで、それもまたおもしろいテーマで、考えていかないと。あとは？

まどか：大学教育や大学機関の中に体験学習をどう位置づけようとしてきたか、位置づけるのにどんなに苦勞があったかということが、体験ということの難しさとか新しさとか、体験というのをひとつのチャレンジのキーワードとしてきたと思うんですけど。グラバアさんのおっしゃっていたE I A Hのサイクルの中で体験が一番にくるところで、私もそういう感じがあるんです。そのあとの流れというのはおまかせすると言うとおかしいですが。おまかせというのは本人の人生に任せたりとか、あるいは自分の力を自分の目の範囲で、例えばこの授業の中の一コマでとか、この2年間の人関の中でという風にして見守るとのことの方がむしろ、私たちが言う学ぶということになる。その人自身がその人自身になっていくということは、大きな意味での教育の仕事や人間観の仕事というのは、学習モデルでいうならば、何に任せてるのかということがいつも問われている。一人ひとりに。その人の成長や自分のその時の居方というのを何に任せたらいいかということ各自が問われているテーマを今提供していただいたんじゃないかなと思いました。うまく言えませんが。だから体験し尽くすことのノウハウを人関として、それも大学教育のひとつの学科のあり方としてモデル化したり理論化したりというのは、私たちがそういう制約の中にいるから、チャンスとしてはあると思うししなければいけないと思うんです。だけれども、常に問われてるのは一体自分たちはどういう人間観を生きるか。今の、出会いとかかわりとか学ぶということに関して、どういう人間イメージを持っているのかということが最終的に問われているんじゃないかなと思いました。

中村：あと何か言い残したことなどは？

大塚：では。いつ言おうかと、まとまらないと思いながら。学ぶということが、一体どういうことなんだろうと。そこには何かどんなところにいる、方向性とか目指すものとか、価値観とか、どうしても付きまわってきて、何をもちて学んだという風に言うんだろうというのが、ずっと私の中にあったんですけども。先ほどの山口先生のお話の考え方の中で、異質の方に持ち込むことが学ぶことだというひとつの見方ができて、それはすごく、なるほど！という風に思いました。で、そうなる津村先生がおっしゃったよ



うにどうやったら異質の方に持ち込めるかということになって、逆に学生と関わっていると、異質の層に持ち込むまいと必死になってるというか、同質にしがみつこうとして居る姿が分かる。その時に、まどか先生が言われた、何に任せるのかということを知って、その人の人生ということではおいておけないものを少し感じていて。たまたま今度卒業していった学生の中にも、彼女は卒業までにいろいろあったんですが、結局「私はこの学校は好きではなかったし、居たくなくて2年間がまんし続けてきた。こんなにがまんしたんだから、ご褒美として卒業できるのは当たり前だと思う。先生は、この先のあなたの人生とか言うけれども、私が今欲しいのは卒業したという資格が欲しいのであって、私の人生を云々と考える必要はないと思う。」と言って。それこそ人事を尽くして天命を待つしかないというか、私にできるのはそこまでということになるんですが。彼女は体験をした、異質のものと出会った、思いもかけないところに出会ってしまって否応なしにここに置かれてしまった体験をして、でも世界との関わり、人との関わりにおいては、これから起こるのかも知れませんがこの中では起こらないで、同質のところずっと生きていて、その時何ができたかなあと。何を彼女にしようとした時に、それも彼女の人生だ、彼女が行くんだからということと、でもやっぱり何かの方向に向けて働きかけるとしたらどういう方向で何に向かって何に照らし合わせて、ファシリテーターという言葉がありました、するのかなあと自分の中で関心として起こってきました。

グラバア：一言いい？私、あまり整理されてなくて来たので、うまく伝わってなかったのかなあとと思いますが。その「人事を尽くして天命を待つ」ということについて。学習理論、ああいうステップではない何かそこに体験熟していくそういう手助けとか、さっきひとつ言ったのは時間と空間ということですが、それは多分具体的になってくると単位の問題だとか評価の問題だとかになってくると思うんです。人間的な発想から言えば、25年間やってきた中に、それはこういうもんじゃないか、その人は熟すのを助けられるエッセンスにはこういうものあるんじゃないかというそういう手がかりのようなものを、我々一人ひとりが言語化できてないかも知れないけど、それこそ体験や関わりの中で何かプレイヤーというか、何か感じているものがあるんじゃないかと思うんです。やっていくことは、自分の枠に戻っちゃうかも知れないですけど、理論を提供するとかそういうところで足りないと言って戻ってくるんじゃないかと、その子の人生だと言いながら、でも何ができるんだろうという思いですよ。そこは、いわゆる思いや、思いよりも今は進めるときにきているんじゃないか、結晶化できるところにきているんじゃないかな。だから、そういうものを結晶化してあげたらいいかと、そういうことなんですね。それが個人の思いや好意とか、その子に対する個人的な働きかけというのではなく、もっと、普遍化できる何かを探していきたい、結晶化していきたい、そんなことです。

中村：他には？



伊東：私は今日は、人間関係科のことを学ぼうと、生徒のような気持ちで来ました。先生方の話を聞いていて、私にとっては異質なものが飛び交ってくるというような感じですが。学び方って一体何なんだろうな、というのは私も思いました。ともすると、学び方というのをマニュアルみたいの方に行ってしまう、ひとつの型みたいなものを作って安定して、それに委ねてしまうことが起こりがちになって。それは学び方なのか一体何だろうか、というのが私の中でよく分からなかったところです。それから出会うというところで、私には出会うというのとはよく分からないんですが、ただ、他者に出会う、人に出会うというのは他者というのは、先ほども自分も他者ではないかという言葉があったんですけど、自分と出会うというものの出会いの中に入っているのか、もしそうであるなら、一体出会うというプロセスの中で自分と出会うのは、他者と出会うのと同じところで出会うのか、一体どこで自分というのと出会うんだろうかというのを考えながら聞いていました。で、私は割と他者との関わりというよりも、対象、ものとの関わりで自分を発見していくとか、概念とか、何かを作ったりという行為をして、体験をした後の目の前にできたものを見て、こんな私がいたとか、そういった自分の気づきをするところがあって。それがあるからかも知れないですけど、自分との出会いというのはこの「出会い・かかわり」という中でどこに位置するのかなあと思いました。

中村：よろしいでしょうか。今回話題提供していただいたことによって、体験とは？経験とは？また、学び方のモデルのこととか、いろいろな触発があったかなと思っております。そういう意味で、これは南短発信のモデルを作るためにも今後またいろいろと考えていかないといけない問題がたくさんあったと思います。これで研究会を終わりたいと思います。



『出会い・かかわり・学び』—もうひとつの人間関係原論— (中野 清) 98.3.17

はじめに

人間関係科の学習の基礎的概念を検討するために、

「体験から学ぶ」……《体験》の重視の主眼は何か？

「学び方を学ぶ」……何を学ぶか？

人間関係原論という授業の今期のねらいは、

1. 124人と出会う…… (学生とスタッフ全員)

2. 自分をいかす、相手をいかす

今期のテーマ：かかわること と 学ぶこと をめぐって

ある日の授業 (97.10.2)：『学びの風景1』……中野の小講義 (学ぶとはどういうことか、中野の夏休み中の出来事を事例として、構造を説明する)

基礎概念の予備的な検討……コトバをめぐって

《教えるひと》と《学ぶひと》

「教」と「学」は、関係的なことばだ。

《体験》と《経験》

「体験」は、具体的・一回的・非反省的だ。／情意性・身体性を含む。(自己中心化の契機)

「経験」は、体験の主観的な偏狭さを打破するための知の反省的・自覚的契機を含む。(共同化の契機)

そのための「体験を読む」(了解 Verstehen・わかること)の必要。

cf. 独語の (Erleben) と (Erfahren) の違い

cf. デルタイの「生の哲学」Lebensphilosophie. 体験とは、人間の主体的な働きそのものであり、生と世界とが出会う根源的な場である。

体験とは、既知・既存の枠組みを突破してゆく行為である。

《かかわる》

拘わることへの、恐れ・不安・嫌悪……かかわりの受動性 (日本語のニュアンス)

みずから関わりを開いてゆくことはいかにして可能か？

《まなぶ》

まねること……学びの原像

「しつけ」という学び方……恒常的な変化、「身につける」

行動の変容にまでいたる学びはいかにして可能か？

《出会い》と《かかわり》と《学び》はどのようにつながってゆくか？……小講義より

—《学ぶ》とは、変貌すること—

体験～出会い……2種の出会い

出会いA：同質なものとの出会う。

既知・既存の思考の枠組み (尺度) のなかでの出来事。

知識・記憶の量的拡大を促す情報処理型。分析判断。(同等、対比、時空的接近の要素間の適合による明晰化の過程)

出会いB：異質なものと出会う。「他者」と出会うこと。

「危機」の時。既存の枠組みのゆらぎ、解体と再構築の時。「発見」のとき。「イキイキする」とき。

知識の質的転換・行動変容を促す発見的な生の展開契機。

「思いもかけないこと」……偶然性

出会い～かかわりの変化

事例：世界とのかかわりの変化

事例：ひととのかかわりの変化

かかわり～学び

自覚化・主体化の必要

継続性・実行性の必要

おわりに

「体験から学ぶ」……

「学び方を学ぶ」……

平成 9 年度 授業記録

日時... 10/2 (木) 教習... 2 (菅野 史)

科目名 原 論 I 担当者 菅野・古川・中野・津本・山本

ねらい
テーマ 今回の風景。

授業内容・実施状況 (資料)

10:30 シェーリング 田中

10:45 シェーリングのコメント (菅野)

先週はランダムに読んだ本が、11/10-11/20頃の
読んだ本で、これらから「シェーリング」について

私が「シェーリング」の「シェーリング」について、
シェーリングの「シェーリング」について、
シェーリングの「シェーリング」について、
シェーリングの「シェーリング」について、

よりかえり

10:55 私の今回の風景 (菅野)

「出金」の「出金」の「出金」

今日は「出金」の「出金」の「出金」

時間管理が「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

11:15 10月15日の「出金」の「出金」の「出金」
私の今回の風景... 菅野の「出金」の「出金」の「出金」
「出金」の「出金」の「出金」
「出金」の「出金」の「出金」

授業内容・実施状況 (資料)

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」

「出金」の「出金」の「出金」